

日本キリスト改革派教会 大会教育委員会

教会学校 教案誌



church school curriculum



わたしがあなたがたを愛したように、
あなたがたも互いに愛し合いなさい。

ヨハネによる福音書13章34節

vol. **83**

2021年10-12月

「子どもと親のカテキズム」
に基づく二年サイクル 第2年

- 自閉症の息子を与えられて 坂尾連太郎
執事職について(3) 吉田 実
【献身のすすめ】私の使いみち 芦田高之
【信仰告白のあかし】自分を打ち碎かれて、自分を知る 市川義則
【教会学校訪問】勝田台教会

2021年10～12月カリキュラム（第83号）

—『子どもと親のカテキズム』に基づく2年サイクル 第2年—

月 日 教会暦・行事	子どもと親のカテキズム		参照教理問答
	主 題	聖書箇所	暗唱聖句
	単元の目標		
10月3日	第四戒 主の日の安息	問68、69 ルカ6:1-11	ウ小57-62、ハイデ103 ルカ6:5
	安息日に神さまの愛を味わう		
10月10日	第五戒 父母を敬う	問70、71 テサロニケ-5:12-15	ウ小63-66 エフェソ5:1
	神さまが与えて下さった人間関係を大切にする		
10月17日	第六戒 殺すな	問72、73 創世記4:1-16	ウ小67-69、ハイデ105-107 マタイ5:22
	自分も他の人も愛する		
10月24日	第七戒 姦淫するな	問74、75 創世記2:18-25	ウ小70-72、ハイデ108-109 創世記2:18
	神さまが造られた秩序、神さまとの約束を大切にする		
10月31日	第八戒 盗むな	問76、77 マタイ25:14-30	ウ小73-75、ハイデ110、111 ルカ19:8
	神さまからいただいたものを大切にする		
11月7日	第九戒 偽証するな	問78、79 列王記上21章1-29節	ウ小76-78、ウ大144、ハイデ112 エフェソ4:25
	聖霊に生かされ、神さまの真実に生きる者となる		
11月14日	第十戒 むさぼるな	問80、81 マタイ6:25-34	ウ小79-81、ウ大146-148、ハイデ113 テモテ-6:8
	私たちを満たしてくださる神さまに信頼を置く		
11月21日	憐れみを求めさせる戒め	問82 ルカ18:18-30	ウ小82、ウ大149、ハイデ114、115 ローマ7:25
	十戒を通して、イエスさまの赦しの憐れみに依り頼む生活へ		
11月28日 待降節	神の愛の戒めを喜ぶ	問83 フィリピ3:12-16	ウ小87、ウ告白16:2、ハイデ114-115 フィリピ3:12
	戒めは私たちへの愛の導き		
12月5日 待降節	キリストの誕生の予告	(問25) マタイ1:1-17	- 創世記22:18
	神の約束が守られ、その約束通りにキリストがお生まれになる		
12月12日 待降節	キリストの誕生	(問26、28) マタイ1:18-25	ウ小22、27、ハイデル35、36 マタイ1:21
	キリストはまことの人となるほど私たちを愛される		
12月19日 降誕祭	博士たちの礼拝	(問35) マタイ2:1-12	- マタイ2:11
	神さまの導きに素直にしたがい主を礼拝する		
12月26日	祈りの手本、主の祈り	問84 マタイ6:7-15	ウ小99、ハイデ118 マタイ6:8
	祈りはすべてをご存知の神さまに対する私たちの応答		

も く じ

2021年10・11・12月カリキュラム

まえがき 『教会学校教案誌』への感謝	木下 裕也……………	4
巻頭説教 人間の謎と矛盾を解くキリスト	漆崎 英之……………	5
自閉症の息子を与えられて	坂尾連太郎……………	7
執事職について (3)	吉田 実……………	11
これからの教会学校		
教会によるキリスト信仰教育を考える	小川 洋……………	15
献身のすすめ 私の使いみち	芦田 高之……………	17
信仰告白のあかし		
自分を打ち砕かれて、自分を知る	市川 義則……………	20
教会学校訪問 勝田台教会日曜学校	岩田三枝子……………	24

聖書黙想・説教展開例・分級展開例……………29

10月 3日 ……………	30
10月 10日 ……………	38
10月 17日 ……………	45
10月 24日 ……………	52
10月 31日 ……………	58
11月 7日 ……………	65
11月 14日 ……………	73
11月 21日 ……………	79
11月 28日 ……………	86
12月 5日 ……………	94
12月 12日 ……………	102
12月 19日 ……………	109
12月 26日 ……………	115

聖句カード……………	121
次号カリキュラム (2022年1・2・3月) ……………	123
教案誌自由募金案内……………	124
大会教育委員会出版物案内……………	125
あとがき……………	126

まえがき

『教会学校教案誌』への感謝

木下裕也

『教会学校教案誌』創刊当時のことを思い起こしています。もう20年も前のことになります。相馬先生はその数年前に教会ぐるみで中部中会に加入され、日本キリスト改革派教会としての日曜学校教案誌が備えられるべきことを強く願っておられました。わたしは当時奉仕していた教会で用いていた教案誌（改革派教会でも広く用いられていたと思います）が、よくととのったものでありつつ教理解に差異を覚えることもたびたびあり、教会独自の教案を作ることも検討していた時期であったと思います。そのほかにも中会の教会学校教師研修会等をおして改革派独自の教案誌を発行すべきとの声がかまっていたことを覚えています。主が備えてくださったタイミングであったと思います。

当初は有志での発行というかたちでした。4人の牧師たちからなる日曜学校教案誌編集部が立ち上げられ、中会内の何人かの方々が協力してくださいました。毎回名古屋岩の上教会で長時間の編集会議を持ちました。カリキュラムの策定、執筆者の選定と依頼、出版社とのやりとり、すべてのことがそこで協議され、決められました。経済的にもはじめは自費でということ話し合っていたと思いますが、創刊からほどなくして中会が発行を支援して下さることとなり、自由募金による支えもあって、教案誌をその後も継続して発行することができました。

有志というかたちで始められた教案誌が中部中会の教案誌となり、さらに大会の教案誌となりました。わたしはある時期から教案誌編集部を退きましたが、教案誌は実に20年の長きにわたって発行され、私たちの教派の教会教育のいとなみに大きな役割を果たしてきました。これまでこの働きにたずさわってこられた方々に主のねぎらいをお祈り致します。とりわけ創刊時からこの働きを主導し、多大な労苦をもって支え続けられた相馬編集長に心から感謝致します。

創刊時の編集部メンバーはもちろん教会の現場に仕える牧師たちであり、教会教育について専門に学んだ者たちではありませんでした。ただ、ひとつのことを分け持っていたことは確かであったと思います。それは福音に生きること、福音の恵みを分かち合うことについてはおとなも子どももないとの確信です。そのことは編集部が一貫して掲げ続けた「基本方針」にも反映されています。また教案誌がカテキズム教育を重視してきたことは、そのまま福音の言葉、キリストの恵みの言葉に生きることを願う願いのあらわれであったことを確かめておきたいと思います。

教案誌発行の働きにはこのたび一応の区切りがつけられるとのこと。「基本方針」を受け継ぐ何らかの教会教育の試み、取り組みが今後起こされてくることを心より願うものです。（岐阜加納教会牧師）

巻頭説教

人間の謎と矛盾を解くキリスト

創世記3章8～10節

漆 崎 英 之

創世記のこの御言葉を読むたびに、思い出しては、一人心中で笑うことがあります。もう30年以上前のことですが、ちえちゃんという子と、あさみちゃんという子と3人でかくれんぼをしたときのことです。「もういいかい」「まあーだだよ」、「もういいかい」「まあーだだよ」、「もういいかい」「もういいよ」。「ちえちゃん、どこにいるかな。ここかな。違った。カーテンの後ろかな。ちえちゃん、どこ〜？」いくら名前を呼んでもシーンと静まり返って何の返事もあります。そこで今度は、「あさみちゃん、どこ〜？」と呼ぶと、あさみちゃんという女の子が「ここー」と言って押し入れから出てきました。「あさみちゃん。名前を呼んでも、黙っていなければだめよ。隠れているんだから、鬼さんに、いるところを教えたらだめなのよ」。「もう一度、はじめからやり直すからね。鬼さんが見つけるまでは、黙って隠れているのよ。わかった?」「うん」。でも何度やり直してもあさみちゃんは、名前を呼ぶと「ここー」と居場所を自分から教えて出てきてしまうのです。これでは、かくれんぼになりません。

①神なしに生きることのできない人間

罪を犯したアダムとエバは、「主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた」とき、「主なる神の顔を避けて、園の木の間に隠れ」（8節）てしまいました。隠れたので

すから、主なる神が「どこにいるのか。」とアダムを呼ばれたとき、アダムは沈黙を保ち、応答しないでおくこともできたはずでした。

ところが実際はどうだったのでしょうか。「隠れております」と応えてしまったのです。隠れた者が呼びかけに応じるということは、本来はないことです。それでは隠れた意味がありません。警察から追われている犯人は、自首しようと思わない限り、あるいは逃亡生活に疲れ果て、もうこれ以上は逃げ切れないと観念しない限りは、警察の呼びかけにも、世間からの呼びかけにも、ただひたすら沈黙を保ち、どこまでも遠くへ逃げようとするものです。わたしはここに隠れておりますと、ノコノコと呼びかけに応答することはないはずでした。

罪を犯し、神の御前から隠れたとしても、造り主であられる神の呼びかけに応答してしまう、応答せずにはいられない人間の宗教的本質がここにあらわれています。神のかたちに似せて造られた人としての所以がここにあります。

造り主なる神に背き神から離れてしまった人間は、自分の神を探し求め、被造世界のありとあらゆるものを神として崇めるようになりました。聖書において語られている神の道について知りたいとは心から願ってはいませんが、宗教的渴望を満たしてくれる神を求めて飽くことがありません。

②矛盾をかかえて生きる人間

神の御顔を避けて隠れる生き方は、私たちの思考と認識、選択に大きな矛盾をもたらすことになりました。

罪に落ちた私たちの中には、自分は神さまに関心を抱いていると感じる一方で、同時に神さまから追い払われている、責められていると感じる矛盾した思いがあります。キリストにおいて罪の処罰がなされないままで、主なる神さまが罪人の私たちに近づいてこられることは、罪人にとっては恐ろしいことです。人は神なしに生きられない存在でありながら、神に近づくことを恐れる逃亡者となってしまったのです。

また私たちは、真理を熱心に追い求め、崇高な生き方をしたいと望みながら、その一方で、自分が嘘つきで不誠実な者であることを感じています。永遠に続く幸せを求めながら、つかの間の楽しみにうつつを抜かず矛盾した存在です。

キリストを知る前の私たちの姿は、自分の家を飛び出し、遠くの地で豚の食べるいなご豆で空腹を満たそうとしていたあの放蕩息子のような自分勝手に惨めな実生活だったではありませんか。生ける水の源を捨てて、水をためることのできない壊れた水溜をせつせと掘っているような（エレミヤ2：12）空しい生き方でした。

しかし、自分の中にあるこうした矛盾の原因が、どこにあり、どこから来ているのか知ろうという思いはなく、人間とはこのようなものだと矛盾を抱える自分と何とか折り合いをつけて罪の重荷に苦しみ、もがいて生きていたものです。

③人間の謎と矛盾を解く主キリスト

神に起源を持つがゆえに、背きの罪を犯

した後も神なしには生きることができない人間。神の御前には、自分が全面的に悪いにもかかわらず、それでいて真の神を憎むことを当然のようにやってのける人間。罪人とは、実に多くの矛盾を抱えて生きている存在なのです。

素晴らしさと惨めさ、偉大さと卑しさが同居している人間の謎は、聖書の上からの光が私たちの上に照らされるときにはじめて解明されます。主という名の神の御言葉だけが人間という不可解な謎を解くことができるのです。

この謎が解明されていくとき、人間の根本的な矛盾もまた解かれていきます。キリストはこの矛盾を解くためにこの世に来てくださいました。キリストは罪に対する神ののろいと怒りの刑罰を私たちに代わって引き受けてくださいました。それゆえに今私たちは神の御顔を恐れなく仰ぎ、平和のうちに安らうことができるようにされています。

キリストを告白したその日から、私たちの心は、日一日と、矛盾という鎖から解き放たれ、神の恵みによって癒され続けています。キリストが私たちの内で始められた聖化の御業は止むことはありません。

ゴールは神の御国です。神と顔を合わせて御顔をまっすぐに仰ぎ見ることのできるその日、私たちの矛盾は完全に決着するのです。神の御性質と御心に反する一切のものは都の外に締め出され、主なる神がすべてにおいてすべてとなられるその日の何と美しいことか。主キリストの御名にとこしえに栄光がありますように。

（金沢伝道所宣教教師）

連載

自閉症の息子を与えられて

坂尾 連太郎

はじめに 一個人の証として

今回、「障がいのある子どもと共に」（仮題）というテーマで執筆の依頼をいただきました。わたしには6歳になる自閉症の息子（長男）がいます。しかしわたし自身は自閉症についても障がい全般についても専門的な知識を持っておらず、一般的なことを書く力はありません。そこで今回は自閉症の息子を持つ一人の父として、牧師として、これまで経験し、考えてきたことをお分かちする個人的な証として記させていただきたいと思います。それがどれほど役に立つかわかりませんが、何か考えるきっかけになれば幸いです。

1. 自閉症であることの発覚と受容

およそ6年前、元気な男の子が生まれました。名前は「深音^{みおと}」と名付けました。深く物事を考えて言葉を発し、生きていってほしいという願いを込めて妻が考えたものです。そしてわたしが後付けですが、福音に深く根差して生きていってほしいという願いを込めました。

深音はすくすく成長し、よく笑う子でした。教会でもいろんな人にニコニコしていました。自閉症であるとは考えてもみませんでした。そのことを考えるきっかけになったのは一歳半検診でした。言葉が出ないことを含め発達の遅れを指摘されました。その頃から妻は息子の挙動・ふるまいから自閉症ではないかと考えるようになり

ました。息子は絵本などを読んでいるとき自分で指差しをせず、人の手を持って指差しをさせていました（「クレーン現象」と呼ばれる）。また立ってクルクル回るのが好きだったり、散歩では坂道が好きで何度も行ったり来たりしていました。その感覚が楽しかったのでしょうか。それらの挙動は自閉症の子どもに多く見られるものでした。妻が息子は自閉症ではないかと言いつつ出したとき、わたしはそうかもしれないが、そうではないかもしれない、と思いそのように言いました。やはり息子が自閉症であることを簡単には認めたくない思いがあったのだと思います。しかしわたしも自閉症について多少調べ、息子を見ていく中で、やはりこの子は自閉症だろうと思うようになりました。そして深音が3歳になる少し前、正式に自閉症の診断がぐかりました。

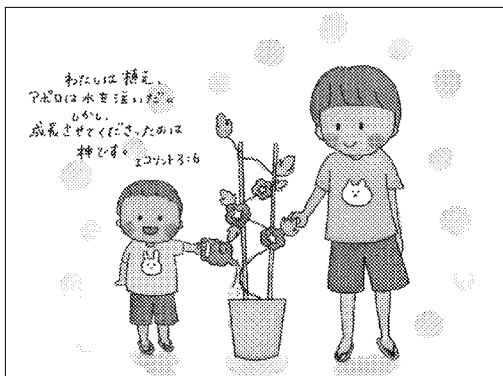
息子が自閉症であるとわかったとき何のショックもなかったと言えようそのなると思います。しかし私たち夫婦はそれほど悲観的になることなく、その事実を受け入れることができいったと思います。それはやはり信仰があったからだと思います。息子が自閉症であるのは単なる不運ではなく、そこには神さまのご計画があり、神さまが私たち夫婦に自閉症の子どもを与えてくださった、託してくださった、そのように信仰をもって受け止めることができました。

2. 息子なりの成長

一歳半検診の後、息子は発達の遅い子どものための園に母親と通うようになりました。最初はプログラムにそって椅子にじっと座っていることも難しかったのですが、だんだんとできることも増えていきました。自閉症の診断が出た後は、自閉症児のための療育園に通うようになりました。こちらは両親が共に通いました。そこで深音はカードでお菓子の要求をすることを教えてもらいました。言葉で要求はできないのですが、家でもカードで食べたいものを要求することができるようになりました。そのように少しずつ成長することができています。

現在は子どもだけで通う児童発達支援センターに通っています。最初は一人でだいたいぶかど不安がありました、今では楽しく活動ができています。そこでも生活の様々なことを教えてもらい、深音が確実に成長しているのを見て、うれしく思っています。親には子どもを愛をもって育てる責任がありますが、深音にとって良い環境が整えられ、成長させてくださっているの神さまご自身であることを思い、感謝しています。

下の絵は妻が教会のホームページに掲載するために描いたものです。



昨年には次男（透音）が生まれ、深音はどうなるかと心配もありましたが、それなりに仲良く過ごしています。次男はお兄ちゃんの真似をしたいようで、お兄ちゃんが遊んでいるじゃまをしたりするのですが、深音はそれほど拒否することなく、受け入れているようです。弟が小さい頃には頭をなでたりもしていました。今通っている園でも深音よりも小さい子が泣いているとき、おもちゃを貸してあげたりしたようです。そのような時折見せる深音のやさしさも私たち親にとってはうれしいことです。

3. 教会による受容と愛

息子は教会の中で受け入れられ、愛されて成長してきました。それは自閉症だとわかる以前も以後も変わることがありませんでした。それは私たち親にとって本当に感謝なことです。深音は高い所に登るのが好きで、母子室の棚の上に登ります。最初は教会の人たちも危ないと心配していましたが、今はその光景にも慣れていきます（母子室の棚は深音の体重に耐えられず一つ破壊されました……）。また今はだいぶ落ち着いてきましたが、じっとしていることができず、うるさくすることも多かったです（今は次男の方がうるさい）。そういう中でも教会の方々が嫌な顔をせず、息子を愛し、受け入れてくださっていることが何より感謝です。礼拝後、私たち夫婦が日曜学校の教師会に参加しているときなどは、青年の方が息子と遊んでくれたりしています。そのように教会の方々の支えによって、私たち夫婦は息子を育て、わたしも何とか牧師としての働きをさせてもらっています。

4. 小さな者へのイエスの眼差し

深音は今も話すことができません。唯一言う言葉は「いやー」ぐらいです。こちらの話も理解するのは苦手なようです。よく使う簡単な言葉は理解しているようですが、そのような状態ですので、これから深音が話せるようになるのか未知数です。神さまのことやイエスさまのこともどれほどわかるようになるのかわかりません。お祈りのときは一応手を組むことはできますが、ですから深音が自分で信仰を告白するということが今は想像しにくい状態です。もちろん神さまがこれから深音をどのように成長させ、御業をあらわしてくださるか私たちには分かりません。ただ今の段階で感じ信じていることは、深音は何ができなくとも、今の状態で神さまに愛されているということです。深音は礼拝に出ても、聖書のお話を理解しているようには思えません。そしてもしかしたらこれからも難しいかもしれません。以前行った発達検査によれば深音の知的発達度は1歳半程度でした。その意味では深音は知的には幼いままで（もちろん彼なりに成長していますが）。ではいつまでも聖書のことを理解できず、信仰を告白できない人は神さまに愛されていない価値のない存在かと言えば決してそうではないのだと思います。マルコによる福音書10章13～16節を読みますと、そのことがよくわかります。イエスさまに触れてもらうため人々が子どもを連れて来たとき、弟子たちはその人たちを叱りました。子どもはまだ信仰のことがわからず、イエスさまを煩わす存在と思ったのかもしれませんが、しかしイエスさまはそれを見て憤り、弟子たちに言われました。

「子供たちをわたしのところに來させな

さい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。はつきり言うておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」

そしてイエスさまは子どもたちを抱き上げ、手を置いて祝福されたのです。

自閉症の深音や、まだ1歳の次男を教会の礼拝に連れて行ってもお話を理解することはできません。むしろ礼拝堂で動き回ったり、うるさくして他の人に迷惑をかけてしまいます。ではそういう小さな子どもや障がいをもった人は礼拝に連れてきても無意味なのかと言えば決してそうではないと思います。礼拝において主イエスが私たちと共にいてくださり（マタイ18:20）、小さな子どもたちにも祝福を与えてくださると信じています。さらにはイエスさまはそのような小さな者こそ神の国を受け入れ、そこに入ることができると教えられました。神の国を受け入れ、そこに入るにあたっては、子どもは劣った存在どころか、むしろ私たち大人が見做すべき存在なのです。

5. 神の国に招かれる障がい者

さらにイエスさまは貧しい人や障がいをもった人々にも愛の眼差しを向けられました。イエスさまは「貧しい人々は、幸いである。神の国はあなたがたのものである」（ルカ6:20）と福音を宣べ伝えられました。さらにイエスさまは多くの病人や障がいをもった人をいやしていかれました。またイエスさまはルカによる福音書14章15～24節で「大宴会のたとえ」を語られました。ある人が盛大な宴会を準備し、多くの人を招いていました。宴会の時刻になったので、主人は僕を送って人々を宴会に招きまし

た。ところがあらかじめ招かれていた人たちはいろいろな言い訳をして断ります。最初の人「畑を買ったので、見に行かねばなりません。どうか、失礼させていただきます」と言い、次の人は「牛を二頭ずつ五組買ったので、それを調べに行くところです。どうか、失礼させていただきます」と言い、また別の人は、「妻を迎えたばかりなので、行くことができません」と言いました。それを聞いた主人は怒り、僕に言いました。「急いで町の広場や路地へ出て行き、貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人をここに連れて来なさい。」

ここに出てくる貧しい人や障がいをもった人とは普通宴会に招かれることのない人たちです（ルカ14：13参照）。しかし、宴会の主催者である主は、そういう人々をもご自分の宴会に招かれるのです。一方、招かれながらも言い訳をして断った人たちは神の国での宴会を味わうことができずに終わるのです。

たとえに出てくるような、畑を買ったり、牛を買ったり、妻を迎えたりすることのできる人はこの世的には幸せな人でしょう。しかし、神の国に入ることはできませんでした。それよりもこの世のことに関心があり、招きを拒んだためです。逆にこの世では不幸だと考えられていた貧しい人や障がいを持った人たちが神の国の宴会に招かれ、その食事を味わうことになるのです。

ですから、わたしは障害をもっている深音が神の国に入れないのではないかとこの心配はしていません。むしろ健常者と言われる私たちの方が御国への招きを拒むことがないよう気をつけなければならないのだと

思います。

おわりに 神の愛に委ねて

ただ、この世において、私たち両親がいなくなってしまう後、深音はどうなるのか心配がないわけではありません。しかし、イエスさまがルカによる福音書12章22～34節で教えてくださったように、思い悩むのではなく、私たちの命を養い支えてくださる父なる神さまに信頼し、委ねていきたいと思っています。私たち両親がいなくなったとしても、天には私たちを愛し養ってくださる父なる神さまがいてくださることは感謝なことです。そしてやがて共に神の国に入ることができたなら、それ以上の幸いはありません。（南与力町教会牧師）



『エデン』坂尾亜海

「神は彼らの目の涙を、ことごとくぬぐいとってくださる（黙示録21：9）」

連載

執事職について(3)

吉 田 実

①献金の祝福を勧めるために

この連載では「執事職」についてわたしなりに大切だと思うことを書かせていただいています。今回は政治規準第五十八条(執事の任務)一「貧困・病氣・孤独・失意の中にある者を、御言葉とふさわしい助けをもって励ますこと。」を中心に書かせていただきました。今回は同じく政治規準第五十八条(執事の任務)二「献金の祝福を教会員に勧め、教会活動の維持発展のため及び愛の業のためにささげられたものを管理し、その目的にふさわしく分配すること。」について、主に「献金の祝福」ということを中心に書かせていただきたいと願っています。まず執事自身がこの「献金の祝福」について正しく理解し、身をもってその祝福に与っていただければ、教会員に心から勧めることは出来ないからです。

②献金の前提

献金について考えるにあたり、まず大前提として、全ての物の所有者は神であられるということを確認しておきたいと思えます。礼拝指針第二十六章第二百二十条(財と賜物の管理)にはこう書かれています。「御父である神はすべての人とすべての物の所有者であられ、わたしたちは生命と財の管理者にすぎない。」2「キリスト者は、神がすべての生命と財の主権者であられることを認めて、自分自身とその賜物を適切に用い、神に献げる。また、その財を教会およ

びこの世の両方において用いるために、神に献げ物として差し出す。神に喜んで献げる者は、約束に従って神から豊かな霊的恵みにあずかるようになる。」すなわち、私たちの持ち物も命も、その究極的な所有者は神なのですから、全ての物は神からの賜物として私たちに与えられ、正しく管理運用することが求められています。ですから「これはわたしのものだ」と握りしめて執着することは許されないのです。神からの賜物として感謝してそれらを受け取り、正しく用いつつ、必要に応じて惜しみなくさげることが求められています。そうする者を神は祝福してくださり、豊かな霊的恵みにあずからせてくださるのです。

③コリントの信徒への手紙二8,9章より ～感謝と献身のしるし

この献金の祝福と恵みについて、コリントの信徒への手紙二8,9章から教えられたいと思います。ここでパウロは、エルサレムの貧しい信徒たちを援助するための慈善募金に与りなさいということ、コリント教会に勧めています。そして特に、マケドニア州の諸教会が激しい試練と極度の貧しさの中にあるにもかかわらず、このエルサレム教会のための募金に熱心に取り組んでいることをここで紹介しているのです。それは決して彼らの競争心をあおるためではありません。「兄弟たち、マケドニア州の諸教会に与えられた神の恵みについて知

らせましょう」(コリ二8:1)とパウロは語り掛けています。すなわち、「マケドニア州の諸教会がこの募金に参加することで豊かな恵みに与っているように、あなたがたにも是非この恵みに与ってほしい」と語り掛けています。ではその「恵み」とは具体的にはどのようなものだったのでしょうか。それは第一に、礼拝指針第二十六章第百二十条の最後にも書かれている「喜んで献げる者に与えられる霊的な恵み」と言うことが出来ると思います。それは言い換えれば、主の愛に感謝して自らを捧げる「献身者に与えられる報い」と言うことが出来るでしょう。マケドニア州の諸教会が激しい試練と極度の貧しさの中にあってもなお、満ち満ちた喜びをもって、惜しむことなく、力以上に、進んでこの慈善の業と奉仕に参加することが出来たのはなぜでしょうか。コリントの信徒への手紙二8章5節には「…彼らはまず主に、次いで、神の御心にそってわたしたちにも自分自身を献げたので」とあります。彼らは金銭をささげる以前に自分自身を主にささげていたのです。つまり彼らの喜びの中心は「わたしは神のものである」という確信にあったのです。その前提には、最も豊かであったお方が私たちのために最も貧しくなられた、主イエス・キリストの恵みを知った(コリ二8:9)という事実があったはずで、主イエスの愛の特徴は「自ら貧しくなって相手の所にまで降りて行く」(フィリピ2:6~8等)ということにあり、また「仕えられるものではなく仕える者となる」(マタイ20:28等)、「友のために自分の命を捨てる」(ヨハネ15:13等)ということにあります。つまり主イエスは高いところに自分を置いたまま何かを恵んでやるというよ

うな上から目線で人を見ることをなさらない、むしろ相手の所にまで降りて行って一緒に痛みを担い、その人のために仕えてくださるお方なのです。そのような主イエスの愛によって生かされていることを知る者たちは、主に倣って自らもそのように生きる者、愛をもって神と人に仕え、惜しむことなく自らをささげる者へと変えられて行くのです。そしてそのように惜しむことなくささげる者には、豊かな祝福が約束されています。「つまり、こういうことです。惜しんでわずかしか種を蒔かない者は、刈り入れもわずかで、惜しまず豊かに蒔く人は、刈り入れも豊かなのです」(コリ二9:6)とある通りです。つまりここで「惜しんでわずかしか種を蒔かない」とか「惜しまず豊かに蒔く」と言われているのは献金の額のことではなくて、捧げる者の心の姿勢のことなのです。惜しまず喜んでその人なりに精いっぱいささげる者には、豊かな霊的実りが約束されているのです。ですからこの個所は「たくさん献金すれば、何倍にもなって返って来る」などと、打算的な読み方をするべきではありません。しかしまた同時に、惜しまず豊かに種をまく者に神はまた種を与えてくださるということが約束されている(コリ二9:10)ことも、また事実です。

このように「献金」は何よりも主の恵みに対する「感謝と献身のしるし」なのであって、喜んで自らをささげる者を、主は必ず祝福して下さって、豊かに報いてくださいます。

④コリントの信徒への手紙二8,9章より ～教会の一致

パウロがエルサレム教会のための慈善募

金に参加することでコリント教会の信徒たちに与ってほしかった第二の恵みは、「教会の一致」の恵みと言うことが出来るでしょう。

そもそもキリスト教会は聖霊を注がれて誕生したエルサレム教会から始まりました。従いまして異邦人の教会がエルサレム教会のことを覚えて募金をするということは福音を伝えてくれた彼らの恩に報いる感謝のしるしでもありました（ロマ15：26, 27）。ですからこの捧げ物は、エルサレム教会と異邦人教会との物理的距離と、偏見による精神的距離を越えて、同じキリストの体・神の家族としてお互いのことを覚え合う契機となったに違いありません。つまり援助を必要としている教会のための募金は、ただ困っている人々への援助というだけではなくて、同じキリストの体の一部としてお互いのことを覚え合う、神の家族として的一致と交わりを実現するための行為であると言えます。パウロはコリントの教会にも是非この恵みに与ってほしいと願ったのです。またパウロはこのような募金を通して違いのある教会同士の「釣りが合えば取れるようにするわけです」（コリ二8：13）とも述べています。「あなたがたの現在のゆとりが彼らの欠乏を補えば、いつか彼らのゆとりもあなたがたの欠乏をおぎなうことになり、こうして釣りが合えるのです」（コリ二8：14）とある通りです。神の民の平等性はみんなが同じようになることではなくて、互いに覚え合い助け合う愛によって実現して行くのです。

私たちの日本キリスト改革派教会は負担金制度を採用しています。各教会から捧げられた献金は、自給独立が難しい伝道所の援助や教会全体の益のために用いられま

す。しかしそういう具体的な使途が見えなければ、負担金制度はマイナスの意味での「負担」としか感じられなくなる危うさを内に抱えているように思います。そうならないためには、私たちは負担金を捧げることを通して「キリストの体」「神の家族」としての一致と交わりの恵みに与っているのだということを、具体的な報告を通して教会員に知らしめることが大切です。私たちは献金を通して、遠く離れた伝道所の兄弟姉妹たちと交わり、共にその福音宣教の働きに参加することが出来るのです。このことを教会員に広く知らしめることは執事の大切な働きの一つであると考えます。

⑤様々な奉仕者の働きに参加できる恵み

このことについて市川康則先生は改革派教義学6「教会論」の「教会の礼拝の主要素—その契約的性格」の中の「f. 献金」の中でこのように述べておられます。「一般に、献金は神への感謝と献身のしるしと言われるが、感謝とは神の恵みに対する私たちの評価・値踏み (appreciation) である。そして、献金は神の御業 (宣教) の進展とその中での約束 (守り支え) への期待と信頼であり、すぐれて未来志向的、終末的行為なのである。また、献金はその受領者が神と献金者に感謝し、そして神に一層信頼することを促し、さらに、献金者を献金受領者の働きに間接的に参与させ、また、献金者自身の霊的利益の機会ともなるのである (フィリピ4：17)。」(前掲書216頁) すなわち、救いを中心とした神の恵みに本当に心から感謝し、主イエスの宣教命令を真剣に受け止め、その実現を心から信じ、やがて主イエスが再び地上に再臨されるその日には、この世界は神の国として完成する

という約束を信じて期待する信仰者は、伝道のために奉仕するとともに、献金を捧げることを通してその信仰を告白することが出来るのです。献金とは「すぐれて未来志向的、終末的行為」なのです。そしてそのような献金を捧げることを通して、自分では直接かかわることが出来ない様々な働きのために、たとえば世界宣教の実現のためにも、間接的に参与することが許され、そのような働き人たちと共に、やがては主の報いに与ることが許されるのです。執事はこのような献金の祝福を理解し、自らその祝福に与り、その恵みを証しし勧めることが求められています。

⑥教会活動の維持発展及び愛の業

また執事はこのような献金の祝福を教会員に勧めるとともに、「教会活動の維持発展のため及び愛の業のためにささげられたものを管理し、その目的にふさわしく分配すること」が求められています。教会活動の維持発展のために献金が用いられることは当然のことですが、「愛の業」のためにも、献金は正しく管理され、ふさわしく分配されなければなりません。すなわち献金は、教会のためだけでなくこの世のために、特に様々な弱さや痛みを抱えた貧困者・困窮者のためにも用いられるべきささげ物な

のです。それはただ「隣人愛」という主観的な動機だけで用いられるものではありません。「貧しい隣人は正当な分をだれかに奪われている」（榊原康夫著「知恵ある生活」89頁）ことが少なくありません。神の公平・公正を証しするためにも、献金はこの世における愛の業のために用いられるべきなのです。

⑦十分の一献金について

最後に、十分の一献金についての日本キリスト改革派教会の立場をご紹介します。「旧約聖書の十分の一献物は多くの献物の一つであって全部ではない。十一献金を制度化することには聖書的根拠がたりない。十分の一献金は教会がシナゴグから受け継いだ一つの献金基準であったと考えられるが、新約聖書はむしろ献金本来の精神を^{せんめい}闡明して、キリスト者たるものは常に能う限りの献金に励み、また祈りにも、伝道にも、礼拝参加にも、すべての面で教会の奉仕に励まなければならないことを強調的に教えている。我らもまた十分の一献金を制度化するよりも、十分の一以上に〈力に応じて〉また〈力以上に〉献金すべきことを強調すべきであると思う」（第14回大会）。

（但馬みくに伝道所宣教教師）

これからの教会学校

教会によるキリスト信仰教育を考える

小川 洋

〈教育者に必要なこと〉

「ギリシャ語」に溺れるほど浸かった予科の夏が終わり、神学校一年生の第一学期に、「キリスト教教育」の学びが始まりました。

その授業の初めに、ユダヤ人の教育について学び、当時の授業ノートには感銘を受けた箇所に、赤ペンで波線を引いています。

それは、バビロン捕囚からの帰還以降エルサレム陥落（AD70）までに、各地に広がった礼拝所シナゴグに併設された初等学校（5～10歳：読み書き算術＋御言葉の暗唱）から高等学校（後にラビ養成の律法学校）で教える教師・学者・ラビら教育者に最も求められたことが、精神的安定（metal maturity）であったということです。もちろん、教師らに求められることは、召命感や忍耐力、専門的知識と教養もありますが、何より教師に相応しい成熟した精神性ゆえに、共同体の人たちから敬意・尊敬が払われた、と習いました。

コリントの信徒への手紙一 2章6節に「信仰の成熟した人」という言葉があります。この「信仰の成熟」は、十字架の主の霊を受けることによって得る“成熟”です。今の教会学校の教師（敷衍してすべてのキリスト信仰者）にとっても必要不可欠な要素であると思います。どこでもどんなときにも、この安定が養われ守られるように願うと同時に、このことを目指して教え導きたいとも願います。

〈教会全体として担う教育〉

私が習った「キリスト教教育」学の先生は、岩井素子先生（1941～1989）でした。先生は1977年神学校夏期信徒講座で、今に

通じる正当で痛い言葉を述べています。

「家庭において、教会において、私たちの教育過程は往々にして、無意識的、無計画的です。特に問題を教会内での信徒の教育ということにしぼってみても、私たちは惰性で、あるいは行き当たりばったりで日曜学校を持っているというようなケースが多く、成人教育のクラスなどは限られた一部でしか持たれていないのが現状ではないのでしょうか。一週間に一度、教会に足を運べばそれで満足している信徒も多い中であって、教会の指導者もまあそんなところだろうと妥協してしまっているのではないのでしょうか。このような実情を指摘しても反応はありません。たまたま反応があるとすれば、実際問題として、信徒を指導する人材がない、自分たちは教育の必要性を感じているが方法がわからない、と言った類のものです。しかし、やはり、一番の問題は、私たちの無関心にあるのではないのでしょうか。私たちは本当にキリストの枝として、一人一人がキリストにあって全き者として立つようになりたいと願い、またならなければならないという思い、そのために互いに助け合い、励まし合い、教え合う義務のあることを強く自覚しているのでしょうか。今一度、皆が真剣に、教育の必要性を教会全体の成長という観点から考えていただきたいと思います。」（岩井素子キリスト教教育シリーズ第2輯「キリスト教教育」101頁より）

前述のコリントの教会の人々に語っているパウロの言葉がそのまま続いているような大胆な指摘です。言わなければならないことは、きちんと伝える真の信仰者の言葉

であり、素直に受け入れると頭が下がる思いです。

教会が教会に集う子どもたちを神から預かっていると弁えるなら、そして教会学校教師だけでなく、教会全体に対する神からの使命として捉え直すなら、そのための知恵は主の霊が導き教えてくださると信じます。

〈たとえば何をすればいいのか〉

これまで改革派教会が敢えてしてこなかったこと、見過ごしてきたことを、教会学校教師会や小会・執事会の方々と再考し話合ってみることは有意義なことです。

1. たとえば、“教保制度”です。

これはルーテル教会が使用している名前ですが、本来、カトリック教会の制度が元になっています。幼児洗礼を受ける子どもを「守る (Guard)」実の親以外の「名づけ親・霊的親 (God-parents)」を定めます。彼らは、実の親たちと共に子どもの成長を見守り、監督する責任を負います。幼児洗礼を受ける子どもの両親よりも年長で、経験(子育てや社会生活の)豊かな信仰者が、アドバイザーとして子どもとその両親を指導します。教会の牧師や役員らを助ける意味においても、重要な役目を担うことになるでしょう。教会員全員が自ら訓練される必要のあることを認識し、教会全体が共同体としての一致の意識や思いを高めることに繋がると思っています。

2. 大人と子どもの礼拝を、あえて分けることを考えてみる、あるいは試みるのはいかがでしょうか。

私を知る限り、日本キリスト改革派教会で、大人の礼拝を行っている同じ時に、教会学校を別室で開いている教会・伝道所は知りません。しかし、海外の日本人教会(欧州のほとんどの日本人教会)と現地の教会

(私の礼拝参加したことのある英国国教会、スコットランド自由教会)で経験したことです。

これらの教会の中には、大人の礼拝の前半に子どもたちも参加し、その礼拝の大人向けの説教の前に、子どもたちに分かり易く短い説教をして、それから、礼拝堂以外の複数の別室に、年齢別に分かれて、子どもの礼拝と分級(あるいは分級だけ)を持つやり方をする教会もあります。

私は個人的には、多くの日本キリスト改革派教会が行っている大人の礼拝の前に教会学校(日曜学校)があつて、その後、大人の礼拝のある同じ会堂に子どもも入って一緒に神の御前に礼拝に与るというやり方が良いと思います。しかし、再考したり、一度試してみるのには意味のあることだと思います。今まで考えもしなかった長所や短所に気付くことになれば、さまざまにより良い工夫やアイデアが生まれるのではないのでしょうか。

3. 契約の子(未陪餐会員)教育を教会学校(日曜学校)と切り離して行ってみること。

これは、ただ教会学校(日曜学校)と契約の子教育との差別化を図るということではありません。もっと、契約の子の教育の重要性に気付くべきであり、改革派教会の善き特徴である教理教育の実りをつけることに意識的に着手すべきであると思えます。教会に来る子ども全てともそうですが、特に幼児洗礼を受けた契約の子は教会全体でその信仰の育成・教育をするべきであると考えます。

主の憐みがありますように祈りつつ

コリントの信徒への手紙一 3章 6, 7節
(高松教会牧師・大会教育委員会委員)

献身のすすめ

私の使いみち

芦田高之

【何のために生きるのか】

わたくしは、学生時代、「何のために生まれて、何のために生きるのか」が、分かりませんでした。

わたくしの三人の子どもたちはもう皆な大きくなって30歳前後になりましたが、彼らがまだ小さい時、一緒によく「あんぱんまん」のアニメを見ていました。

その主題歌は今でも忘れられません。

♪「何のために生まれて、何をして生きるのか。答えられないなんて、そんなのはいやだ」♪

わたくしの学生時代、この歌の通りでした。

「なんのために生きるのだろう？」

「なんのために就職するのだろう？」

「何のために結婚するのだろう？」

「結婚してすぐにその人のことが嫌になっただろう？」

というように、とにかく、生きる意味が分からないでいました。だから、学生時代、毎晩、友だちとお酒を飲んでギターを弾いて歌って、学校には行ったり行かなかったり……という、それでもそれなりに楽しかった。でもやっぱり、とても残念な学生時代を過ごしていました。これがわたくしの、楽しくも、むなしい、そして、とっても残念な学生時代でした。

今、学生時代を過ごしている方々が、これを読んでおられるなら、どうか、今しかできないことに取り組んでください。友だ

ちとの交わり、スポーツ、旅行何でもいいです。でも、きっと、今与えられている環境の中での勉強も今しかできないことです。あまり興味のない一般教養分野でも、どうか神さまが与えてくださっている環境下で精一杯学んでください。

【自分をどう使ったらいいの？】

「何のために生まれて、何をして生きるのか……答えられない……。」

これは、言い換えたなら、「自分をどう使ったらいいのかわからない」ということだと思います。わたくしたちは、ペンをどう使ったらいいか知っています。自動車をどう使ったらいいか。これも知っています。パソコンやスマホをどう使ったらいいか。これも特に若い方々はよくご存じです。

では、わたくしにとって最高に大事な道具の使い方は熟知しているでしょうか。わたくしにとって一番大事な道具。それは、わたくし自身です。わたくしという身体、心、人生、生活、能力、性質、特質。これをどう使ったらいいのか。それが、学生時代のわたくしには全然わかりませんでした。どう使ったらいいかわからないから、退屈しないようにと、飲めや歌えや、で過ごしていたのです。

これと言って何か大きな悩みがあったわけではない。でも、自分をどう使ったらいいのかわからない。どう生きたらいいのかわからない。くすぶった、不完全燃焼の青

春時代を送っておりました。

【そして、教会へ】

そんなわたくしが、23歳の時、あるきっかけがあってキリスト教会に行くようになったのです。

教会に行って、まず聖書の最初のページ、その第一行目。創世記一章一節「初めに、神が天地を創造された。」神さまがおられて、一切の一切をお造りくださり、全てを統治しておられる。この最初の文がわたくしにとっては、とても大きな壁でした。

どうして見えない神を知って、信じることができるのか。それでも、聖書に書いていることが気にかかって読み始めたのです。そうすると、天地創造、人間の創造、罪、死、などなど。宇宙や世界、人間の営み、そして自分自信を考えると、「聖書の神がない」という前提よりも、「聖書の神がいらっしゃる」という前提で物事を見たり考えたりする方が、はるかに筋が通っている、と考えるようになりました。

【洗礼へ】

こうして、教会に通い続け、自分でも聖書を読むようになって、わたくしはこう考えるようになりました。「もし、聖書に書いてあることが本当のことだったら大変なことだ。」もし天地万物をお造りになり、一切を統治しておられる方がおられるとしたら、わたくしは、これまでその方のことを無視して、その方がわたくしを造ってくださった意図、意味、目的から離れて、自分勝手に自分を使っていたことになる。もし、聖書に書いていることが本当だったら、わたくしの生き方も、考え方も、自分の使い方も、この神さまの御計画に従って生き

なければならない。そう考えるようになったのです。

聖書に書いてあることは、本当かウソかどちらかだ。聖書が言う神さまは、本当におられるのか。しかし、なかなか聖書が伝える神さまの御存在を信じることはできず、何か月も過ごしていました。

しかし、ついにある時、自分が罪人で、神さまから罪を赦していただかなければならない存在だ、という事実気づかされたのです。今でもその時のことを覚えています。聖書のどこの言葉が心に浮かんだ、というのではない。むしろ、聖書全体から、「わたくしの存在は丸ごと罪で、わたくしは赦されなければならない存在だ」と、自分自身が何者かということに気づかされたのです。1982年のある日、東京渋谷の地下道を歩いているときのことで。その時、わたくしは思ったのです。「洗礼を受けよう。これで洗礼を受けられる」と。

【洗礼と献身】

早速、当時のわたくしが通っていた教会の牧師、江古田教会の佐藤弘之先生に、洗礼を受けたい、という願いを伝えました。それと同時に、こうもお伝えしたのです。「先生、僕は聖書のことを伝える仕事に就きたいような思いもあるような気がするのですが……」と。なかなか神さまの御存在を信じることができずに悶々としていたのですが、自分が罪赦されなければならない存在だと気づかされると、今度は、この知らせを伝える者になれるものならなりたい、という思いも同時に与えられたのです。

そういうわけで、佐藤先生には、洗礼志願の願いと、献身したいという思いがどうも自分にはあるようだという告白も同時に

したのです。佐藤先生は、嬉しいような困ったような複雑な顔をされたのを覚えています。そしておっしゃいました。

「芦田君。洗礼の願いと献身の願いを聞かせてくれてありがとう。でも、献身の願いの方はまだ、僕だけの心に納めておくから。まず、洗礼を受けて、誠実に信仰生活することから始めてください。君の献身の志は、僕の心の中でしっかりとあずかっておくから」と。

【この知らせを伝える者に】

わたくしは、教会に行くようになって、教会が教える聖書の真理を聞き続ける中で、人間にとって、何よりも大事な情報を受け取るようになったのです。

天地の造り主であられる神さまがおられること。その方との間柄が、イエス・キリストのお陰で回復することによって、人間は、それぞれが個別に造られた目的にかなって生きることができるようになること。もう、自分は「何のために生まれて、何のために生きるのか。答えられないなんて、そんなのは嫌だ」と言わないで済む。自分が造られ、生かされている目的は、自分が知らなくても、造り主が十分に完璧に知っていてくださる。だから、この造り主との親子の間柄の中を生きればよい。そうすれば、自分の使いみちを造り主が教えてくださる。……ということを知らされて、わたくしは、本当に嬉しかったのです。あまりに嬉しかったので、この聖書の事実、教会が伝えているメッセージを、今度は伝える側に回りたい。そのように素朴に、静かに熱く思うようになっていったのです。

でも、こんなわたくしが伝道者牧師になるなんて、大変な思い違い、冒険ではない

か。そうも考えました。それでも、「どんなことよりも大切なこの聖書のメッセージ、教会が伝え続けるメッセージを伝える者になりたい」という思いは、消えることはありませんでした。

そんなわたくしの内面と生活を見続けておられた佐藤先生は、わたくしが牧師になるための道筋を整えて行ってくださいました。洗礼を受けてから一年四か月でわたくしは神戸改革派神学校に入学しました。

以来約40年、わたくしは、聖書の伝えるメッセージを伝え続けています。佐藤先生は、2017年11月に突然地上から取り去られました。先生がわたくしに会うたびに、嬉しそうにおっしゃっていました。「芦田君が牧師になりたいと言ったことは間違いじゃなかった」と。きっと、はらはらしながら、わたくしのことを見続けておられたと思います。だから、わたくしが牧師になって、先生とお会いするたびに、嬉しそうに、「芦田君が牧師になることは、間違いじゃなかった」と言い続けられたんだと思います。

【あなたの人生の使いみち】

申し訳ないことですが、わたくしは大した牧師ではありません。ダメ人間です。でも、伝道者・牧師としてわたくしの体、心、体力、時間、人生、命を使わせていただいている。これは、本当に感謝なこと。わたくしにとっては、伝道者・牧師として生きる。これはわたくし自身の最高の使いみちだと、感謝してもしきれません。

これをお読みのあなたが、あなた自身の使いみちとして、最もあなたらしい使いみちを見出してくださいませう。それが伝道者・牧師であれ、別の使いみちであれ。

(新浦安教会牧師)

信仰告白のあかし

自分を打ち砕かれて、自分を知る

市川 義 則

信仰告白の証をする機会を与えてくださり感謝いたします。わたしが信仰告白をしたのは15年も前のことなので、正直、記憶が曖昧なところもありますが、できるだけ当時の状況を忠実に振り返り、その時の自分が何を思っていたかを言語化したいと思います。

わたしが信仰告白をしたのは2006年の3月で、大学に入る直前でした。しかし、最初に牧師から信仰告白の打診を受けたのは高校1年の頃でした。わたしは1年間浪人生活をしていたので、高校入学から4年間、その打診を受けては、何かと理由をつけて断り続けていました。(最後の1年あたりは気を遣われてあまり言われなくなりましたが笑)。また、牧師だけでなく、親からもことあるごとにその話を切り出されていましたが、信仰告白をするに関しては、今思えば半分意地になっていた部分もありましたが、頑なに拒み続けていました。なぜそこまで断り続けていたのかと言うと、「自分の弱さや不遇を受け入れることができず、神に対して疑心を抱いていたから」です。この思いは誰にでも起こり得ることだと思います。そして、「大事なことは疑心に打ち勝つことではなく、むしろそのことを自覚して悔い改めることである。そして、それが信仰告白である。」ということを教えられると思います。わたし自身も何度もこのことについて教えられていましたし、頭では理解していたつもりです。しか

し、当時のわたしの心の中には、弱さを受け入れて神に依り頼むことに対してどうしても素直になれない自分がいました。この思いは高校生になってから抱くようになったもので、実は、中学生の時は信仰告白をする気が割と強くありました。もちろん、中学生の時にも神に対して疑心暗鬼になることはよくありました。しかし、その時は聖書に対する疑いはなく、半ば盲信的に信じていたので、もし中学生の時に信仰告白の打診を受けていれば、素直に受け入れていたと思います。つまり、中学から高校に上がるタイミングで、自分の中で何か変化が起こったのです。このことを詳しく振り返るために、中学生と高校生の頃について少し触れておきたいと思います。

わたしの中学校は1学年10クラスという、当時神戸市で最も生徒数の多い学校でした。そのため、学校の統制を図るため校則は厳しく、教育方針も個人の自主性よりも集団生活における身の弁え方などに重きを置いていたように思います。その中でもわたしは、教師の言いつけやルールは率先して守るような、いわゆる真面目なタイプでした。教師の立場から見れば、手のかからないありがたい生徒だったと思います。また、成績も良い方でした。クラスメイトにはよく勉強のアドバイスを求められていましたし、授業中に難しい問題が出されたときは、自ずと周囲の期待の眼差しが自分の方に向くようになっていました。まさに

学校のエリート的な存在だったわけです。このような経験を積み重ねていく中で、いつしかわたしは学力と真面目さに自身のアイデンティティを置くようになりました。良く言えば自信に満ち、悪く言えば高慢だったと思います。そしてそういう人間にありがちな話ですが、いつの間にかそのアイデンティティが自分の信仰だと思い込むようになっていったのです。

そんな中学生生活を経て高校に進学するわけですが、ここで状況は一変します。当たり前ですが、高校は受験に合格して進学するので、学力は同レベルの生徒が集まります。よって自分の成績も平均並みになります。また、わたしの高校は当時としては珍しく、校則がありませんでした。最低限の決まり事はありましたが、基本的には何をしても生徒の自主性に任されていた学校でした。そのため、これまでルールを守り、周囲に良い印象を与える（というか悪い印象を与えない）ことを第一に考えていた自分にとっては、そのような状況での立ち振る舞い方が全くわかりませんでした。そして周囲がどんどん自分らしさを出していくにつれて、何も変えられない自分に自信を失っていきました。そしてこの自信の喪失が神への疑心へと変わっていきます。こんなに苦しんでいるのに神さまはなぜ何も助けてくれないのかと落ち込むようになり、また、自分よりも他人の方が正しい人だと感じるようになり、やがて自分が今まで信じてきたことは全て幻想だったのではないかという思いさえ抱くようになりました。そんな喪失感と疑念に満ちていた自分が信仰を言い表す決意などできるはずありません。わたしが信仰告白を拒み続けていた理由、それは、神の御業を確信できな

かったからではなく、元々確信に満ちていた神への信仰心（だと思っていたもの）を見失ってしまったからです。そして追い討ちをかけるように、そして偽りの信仰心を完全に打ち砕くように、わたしは大学受験に失敗します。しかし、受験に失敗したことによる1年間の浪人生活が、これまで拒み続けてきた信仰告白を受け入れる決意にまで至らせるきっかけとなり、大げさに言えばわたしの人生を大きく変えた1年となりました。（念のため補足しておきますが、あの高校に入ったことは後悔していませんし、忘れられない思い出もたくさんあります。あと、親にかける金銭的負担が半端じゃないので、現役で大学に行けるのであればそれを強くお勧めします笑）。

自分の信仰を変えた経験の1つが全国学生会でした。わたしは高校を卒業した年にも参加しており、そして参加していたまきにその間に、後期試験不合格の連絡が来て浪人が決定します。これまでの人生で一番のどん底に突き落とされた瞬間でした。だからこそ、神さまはわたしを学生会に導いてくださったのかもしれませんが。わたしが受験に失敗したことがわかると、周囲の人たちは入れ替わり立ち替わり励ましに来てくれました。出会って数日しか経っていない、いわば赤の他人のようなわたしをです。しかも、社交辞令のような励ましではなく、その言葉にはその人の思いがちゃんと込められていました。人生で一番辛いタイミングだったはずなのに、なぜかわたしは少し嬉しい気持ちになりました。それだけではありません。この学生会に参加してから終始感じていたことですが、わたしはこの場に「自分が無条件で受け入れられている」という安心感を感じ取っていました。

自分に自信がなかったわたしは、教会では自分のことをほとんど話しませんでした。大げさな言い方ではなく、「はい、いいえ、わかりません」のどれかでほとんどの会話を済ませていました。そんなわたしが、普段感じていることや受験に失敗したこと、そして自分の信仰に疑念を抱いていることさえも自分の方から話すようになっていました。この人たちになら話せる、むしろ聞いてほしいという思いが自然と湧いてきたのです。そして聞いてもらった後には、実質的には何も解決していないのに、すごくほっとした気持ちになりました。この不思議な感覚は今でも鮮明に覚えています。今思えば、これが初めて「救われた」と感じた瞬間だったのではないかと思います。

浪人生活の間に自分の信仰を変えた経験がもう1つあります。それは、2005年4月25日に発生したJR福知山線脱線事故です。死者107名という甚大な被害を出した前代未聞の大事故は、日本全国に強い衝撃をもたらしました。実は、あの路線は予備校に通う通学路で、わたしは事故が起こる1時間前にあの区間を通っていました。事故が起きたのが平日だったので巻き込まれませんでした。土日はまさにあの時間帯に通る電車に乗っていました。自分があの瞬間に死んでいた可能性は十分にあったのです。そして事故が起きてから1週間ほどは、そのことが自分の頭から離れなくなりました。あの事故で亡くなった方は、あの瞬間に自分が死ぬなどとは夢にも思っていなかったはずですが、しかし、死というのはいつでも人の生活に直面しており、そしてあまりにも理不尽にやってくる、そのことがあの事故を通して如実に表されたのです。この「死」というものに対して、わたしは

初めて心から怖いと感じるようになりました。そして、不思議なことに、その思いを神さまに率直にぶつけていました。神に対して疑心に満ちていた自分が、なぜあそこまで素直に祈れたのかは、正直今でもわかりません。しかし、神さまがあの理不尽な死さえも本当に超越されるお方なのであれば、この思いはどうしてもぶつきたいと、その時は思ったのだと思います。何をどう祈ったかは覚えていませんが、単なる願いとかではなく、自分の考えを真剣に言葉にして祈ったということだけは今でも覚えています。

この2つの経験に共通していることは、自分の思いを率直に伝えるようになったということです。そしてこれは、高校生活でできていなかった「自分の弱さや不遇を受け入れる」ことそのものです。たとえ自分に自慢できるものがなかったとしても、無条件で受け入れてくれる仲間がこんなにも多くいる、また、理不尽な死に直面していても、自分は今日も確かに生きられている、そのことを実感し喜ぶことができるようになりました。そして少しずつではありますが、教会でも自分自身のことを話す機会が増えていきました。こうした浪人生活を経て、1年後、わたしは大学に進学する道が与えられました。しかもその大学は現役時代には全く視野に入れていなかった大学でした。このことを踏まえても、この1年間は神さまの不思議な導きが大きく働いた1年だったと思います。

これらの経験を通して、ようやくわたしは信仰告白をする決意を固めることができました。この決意には2つの意味が込められています。1つはもちろん、神に対する決意です。わたしが通う大学は仙台にあり

ました。地元の神戸を離れて、人生初の一人暮らしです。今までの経験を踏まえ、これからは自分の意志と自分の足で教会に通うことを決意して、信仰を告白しました。もう1つは、これまでお世話になった方々への感謝です。自分の信仰を言い表すためのものを人のために行うのは筋違いかもしれませんが、自分がこれまで教会に足を運ぶことができたのは、家族や牧師、そして教会員の方々の支えと祈りがあったからです。これからはその方々のいる場所から離れて教会生活を送ることになるため、これまで与えてもらった恵みに対する感謝の気持ちと、離れていても思いは1つという願いを込めて、その方々に見守られる中で信仰を告白しました。

あれから15年という月日が経ちました。大学卒業後は東京で社会人生活を続けています。ここまでの記述内容を見ると、浪人生活の1年で全てを克服したような書き方をしていますが、決してそんなことはありません。その後も、高校までの経験なんて可愛いものだと思えるような凄惨な経験を何度も味わってきました。そして、なんやかんや言って昔と変わっていない自分がいます。はっきり言ってしまえば、わたしは今も自分に自信がありません。自分の弱さから目を背けることもしょっちゅうあります。そういう意味では、わたしは本当の意味でキリストにまだ出会えていないのかも

しれません。正確に言うと、出会ったことに気づいていないのかもしれませんが、しかし、弱さゆえ教会のことを後回しにしてしまうことはあっても、離れたと思うことはありませんでした。それは信仰の友が教会にいたからです。浪人することが決まり、打ちひしがれていたわたしに神さまが真っ先に与えてくださったのは信仰の友でした。その友が教会にいる以上、わたしは少なくとも自分の都合でその者たちから離れるようなことはしたくありません。信仰生活で最も重要なのは神への礼拝です。しかし、それと同じぐらい大切にすべきことは、信徒同士、特に同世代とのつながりだと思っています。そこには他でのつながりでは決して得られない何かがあるからです。必ずあると確信しています。神さまはこれまで、わたしに何か大切なことを教えられようとした時、必ずと言っていいほどこの友たちを通して教えられてきました。そのため、このつながりさえ切らなければ、神さまとの関係もゼロにはならないと信じています。これからの人生も打ち碎かれることは多々あるでしょう。しかし、打ち碎かれる時は自分を知り、神を知る機会でもあります。強さや正しさが執拗に求められる時代ですが、このような時代だからこそ、弱さに目を向け、そこから注がれる神の眼差しに心を通わせたいと思います。

(東京教会・執事)

教会学校訪問

勝田台教会日曜学校

岩田三枝子

「日曜学校」

多くの教会では、「教会学校」と呼ばれていると思いますが、勝田台教会では、「日曜学校」と呼んでいます。名称については教師会の中で何度か話し合われてきたようですが、教会の中の他の会（女性会、男子会、青年会）もみな教会学校に入る、ということで、「教会学校の中の日曜学校」ということで落ち着いたそうです。

開始当初

1970年に「土曜学校」として始まったのが、勝田台教会日曜学校のルーツです。その後、1972年に日曜学校が開始されました。1970年代後半のピーク時には、教会員の契約の子どもたちに加え、教会所蔵の2台のマイクロバスで近隣地区の子どもたちの送迎をしており、出席者は常時90名ほどとなり、1979年7月15日の出席者は107名を数えたこともあったそうです。クリスマス会には150名以上の子どもたちが集まり、当時の古い教会堂の床が抜けるのではないかと心配したこともあったとのエピソードもあります。また1976年には、牧師の奨めや教師や生徒の文章、出席状況などを掲載し、教会の方々や日曜学校の生徒に配布した独自の学校報「ぶどう」は10年以上にわたって継続され、1989年の127号まで発行されていたそうです。（写真1）

ピーク時には、日曜学校の分級も幼稚科、小学校下級、中級、上級、中学科、高校科

と多くありましたが、1980年代に入ると、子どもたちは減少し、1984年頃には出席者40名前後、1986年には20名前後、90年代に入る頃には10名前後となっていったようです。

コロナ前の様子

しばらく日曜学校には子どもが少ない状態が続いていましたが、2012年に前任の坂井孝宏牧師の着任に伴い、坂井牧師家の3人の子どもたち、また勝田台教会の日曜学校で育った契約の子のその子どもたち、また新たな教会員の子どもたちなどが加えられ、幼児から小学校低学年の契約の子どもたちを中心に10数人が定期的集まるようになりました。

日曜学校分級には子どもたち自身が考えた名前をつけました。通常の日曜学校礼拝では、初めに合同で子どもたち自身が奏楽を担当して共に賛美を捧げた後、エステル（小学校高学年女子）、ルツ（小学校中学年女子）、ダビデ（小学校～幼稚科男子）の分級に分かれて、聖書の学びを行いました。時には、教会員や実習神学生の信仰生活の証をお聞きする日や、合同での聖書かるた大会などの日もありました。

また、教会の前にある公園での春と秋の運動会、イースターやクリスマスにはお友だちを誘っての「子ども会」、月に一度の外遊びやゲーム、年始のみことば書き初め会などのプログラムも充実しました。（写

真2～4) 春休みや夏休みには小学生から中学生対象のジュニアキャンプや高校生対象のスプリングデイズには、子どもたちは参加者として、そして教師は奉仕者として参加しました。さらに、年に数回「こひつじカフェ」「こひつじキッチン」を開催し、教師や教会員の手作りクッキーやプリン、ちらし寿司、サンドイッチを教会員の昼食向けに販売し、その売上をカンボジアのホザナスクールに献金を行いました。カフェ風に飾り付けをした教会の集会室で、小さな子どもたちがエプロンと三角巾を付けて、販売役、ウェイトレス役になって教会員の方々に販売し、お食事を運ぶことで、普段は交流の機会が少ない教会員の方々と子どもたちとの良いコミュニケーションの機会ともなりました。(写真5) その他、毎年夏にお泊り会を開催し、時には東関東中会所有の水郷バイブルキャンプ場で、時には教会堂でテントを張って、時には教会員の長野県の別荘で、聖書の学びと交流の時間を持ちました。キャンプでは、巨大工作(実物大ゴリアテや巨大流しそうめん)や飯盒炊きさん、プール遊び、温泉、映画鑑賞などを楽しみ、子どもたち同士の絆を深めました。

そのような歩みの中で、2019年のクリスマスには、日曜学校で育った子どもたちの中から3名が信仰告白・洗礼に導かれたことは、大きな喜びとなりました。

コロナ禍の中で

2020年4月、新型コロナウイルスの緊急事態宣言に伴い、勝田台教会は全面オンライン礼拝となりました。この期間、勝田台教会の日曜学校は、新浦安教会のオンライン教会学校に合同で参加させていただきま

した。画面を通してですが、新浦安の教会学校子どもたちや教師の皆さまと毎週顔を合わせる中で、共に礼拝を捧げる喜びを味わうことができました。

また、夏や春には、Zoomによって開催された中会のジュニアキャンプなどにも子どもたちがそれぞれの家庭から参加しました。Zoomによるジュニアキャンプでは、中会の先生方がZoomキャンプの最初から最後まで子どもたちに親しく声掛けを続けながら、キャンプを盛り上げ、子どもたちの霊性を導いてくださったことに感謝しました。

様子を見ながら、2020年秋ごろからは、礼拝後の礼拝堂の一角に短く集まり、賛美、聖書朗読、近況報告とお祈りの時間を持つことから勝田台教会の日曜学校を再開していきました。コロナ禍でしばらく対面では会うことのなかった間に、子どもたちがそれぞれにお兄さん、お姉さんになり、子どもたちが自分たちの言葉でお互いのためにお祈りをする姿に励まされました。(写真6) また、コロナ禍でのオンラインスキルの向上が功を奏し、礼拝後の日曜学校と各家庭をZoomでつなぐことで、教会堂の礼拝に出席した子どもも、自宅から礼拝に出席した子どもも共に画面を通して日曜学校に出席することが可能となりました。さらに6月からは、ハンドベルとカホンによる賛美練習なども始めました。

また、コロナ禍の自粛期間にはしばらくお休みしていた日曜学校教師会もZoomで再開し、コロナ禍でもできることを模索しました。子どもたち自身が喜びを持って楽しく集うことを目標に、6月からは、第2日曜日の夕方に自由参加のZoom日曜学校タイムも始まりました。まずは子どもたち

が「行きたい！」との思いを持って日曜学校につながり、子どもたち同士、また教師たちとの関係を十分に築いてから、それぞれの関心に応じた聖書や教理の学びに移行

していきたいと祈りつつ、コロナ禍の日曜学校をそろりそろりと再開しています。
(勝田台教会)



(写真1) 「現存の最も古い(?)」日曜学校報『ぶどう』1977年3月号」



(写真2)「クリスマス降誕劇」



(写真4)「みことば書き初め大会」



(写真3)「スポーツ大会」



(写真5)「こひつじカフェ」



(写真6)「コロナ禍の日曜学校。教会堂の一角でコンパクトに」

聖書默想・説教展開例・分級展開例

10月3日 ルカによる福音書6章1節～11節(カテキズム問68、69)【解説と黙想】

第四戒 主の日の安息

問68、69は十戒の第四戒を扱う。

日曜日をどのように理解するかという問いは、信仰教育において避けては通れない極めて重要な課題である。

日曜日を「安息日」と「主の日」、という二つの側面から理解することが重要である。二つを切り離すことなく、一体的に理解することが欠かせない。

・十戒の第四戒として

十戒は第五戒から特に対人関係における戒めであるが、安息日規定はその直前の第四戒に位置する。つまり、神の前に安息日を聖別し神との関係を正すことが、人間関係を築く上での土台となる。

・安息日

子どもカテキズムでは省略されているが、第四戒の根拠は神の創造時における模範である。神は、六日の間に天地とすべてのものを造り七日目に休まれた。神は人間に休むことを示すために、ご自分が休みを取られた。

神は人間がただひたすら働くことを望んでおられない。人間はすぐに疲れ果て、休みが必要な存在であることを誰よりもご存知である。

私たちはすぐに予定を埋めて忙しくしようとする。むしろ、忙しくなければ不安になってしまうほどである。そのような私たちに対して、神は安息を与えようとされている。

安息日規定は、「休んでもいい」というような曖昧なものではない。「安息せよ」という神の毅然とした命令である。

・主の復活の日として

旧約の時代、安息日は創造の七日目である土曜日に聖別されていた。しかし、キリスト教会は週の始めの日である日曜日を「主の日」とし、この日を安息日として聖別するようになった。

それは主イエスの復活の日である。墓から蘇られた日である。罪の結果としての死への勝利が表された日である。キリスト教会はこの日を聖別してきた。キリスト教会の安息日とは、主の復活の光を浴びることと切り離されてはいけない。

安息日は働きを止める日であるが、何もしない日ではない。この主イエスの復活の光を浴びる日である。罪に起因する疲れは、ただたんに身体を休めるだけでは回復しない。神による霊的な安息が必要である。

・説教へ

どれだけ安息日の意味や祝福を語ったとしても、それが口先だけの言葉であれば子どもたちには伝わらない。語る側が改めて、「安息日をどのように理解し、どのように過ごしているかが問われる。

カテキズムの答えは分量がやや膨大であるので、一つ一つの言葉を取り扱うことはできない。ポイントを絞って語ることが求められる。

子どもたちの日曜日に対する理解は、育った環境において全く異なっていると言える。目の前の子どもたちを取り巻く環境をしっかりと見据えながら準備に臨みたい。(大宮季三)

《参照聖句》 創世記2章1～3節

《教理問答》 ウエストミンスター小教理問答問57～62、ハイデルベルク信仰問答問103

10月3日 ルカによる福音書6章1節～11節

【説教展開例】

第四戒 主の日の安息

◇..... 単元のねらい◇

カテキズムに基づいて、安息日、主の日がどのような日であるかを理解する。

「本当の休みを求めて」

日曜日は喜びの日？

おはようございます。今日は何曜日でしょう？「日曜日」ですね。日曜日は皆さんと会えてとても嬉しいです。教会では日曜日のことを「安息日」と言ったり「主の日」と言ったりしますが、この日はどういう日なのでしょう？ 今日のカテキズム問68と69はこのことを教えています。「十戒」（十の言葉）を順番に学んでいます、その四つ目の戒めが安息日のことを教えています。

問68 第四戒は何ですか。

答 「安息日を心に留め、これを聖別せよ」です。

問69 第四戒で、神さまは私たちに何を求めておられますか。

答 私たちの安息日は、キリストが復活された日曜日です。神さまは、この日を主の日として、特別に取りわけ、教会で礼拝をささげ、救いの祝福を喜び、きよく休んで六日間の歩みに備えることを求めておられます。安息日の恵みにはげまされて、私たちは御国をめざして神さまと共に歩みます。

日曜日は「喜びの日」だということが書かれていますね。皆さんは、今朝、どういう気持ちで起きましたか？ 起きた時に「教会に行きたい！ 嬉しい日だ！」と思えたなら、それはとても素晴らしいことです。でも、そう思えない人もいたと思います。

日曜日の朝は「せっかく学校が休みだからゆっくり寝ていたい！」「家でテレビやyoutubeを見ていたい！」「友だちと遊びに行きたい！」と思う時も少なくないのではないかと思います。「お父さんやお母さんが教会に行くから、僕も行かないといけな」と思うことがあるかもしれません。ひよっとすると、「教会に行きたくない！」と思う日曜日の方が多いかもかもしれませんね。

日曜日がどんな日なのか、今日は一緒に考えてみましょう。

安息日

日曜日は「安息日」だと記されていました。「安息日を心に留め、これを聖別せよ」という教えは十戒の四つめの教えですね。安息日を大切にして、他の日とは違う特別な日にしなさい、と神さまは教えておられます。

その昔、イスラエルの人たちはエジプトで奴隷とされていました。苦しい労働をしなければなりません。神さまはモーセというリーダーを立ててイスラエルの人たちをエジプトから導いてくださり、新しい生活が始まりました。神の民であるイスラエルは、新しい生活において「安息日」を大切にするようにと教えられたんですね。

「安息」というのは「休む」ということです。つまり日曜日は「休む日」なんですね。実は、世界が創られた時から、安息日のことが示されていたんですね。聖書の一番最初に、神さまが世界が創られた時のことが記されています。神さまは六日間で世界を創り、七日目に休まれました。

実は安息日というのは、最初は「一週間の七日目」なので土曜日だったんですね。

神さまはなぜ、七日目に休まれたのでしょうか。疲れたから休まれたのではありません。「光あれ」という言葉によって、世界を創造なさる神さまは休む必要がありません。ではなぜ神さまは休まれたのでしょうか。それは、人間に、休むことの見本を見せてくださるためでした。人間は神さまとは違います。休むことが必要です。毎日毎日働いていると体が疲れてしまいます。病気になってしまうこともあります。だから、「安息日を守りなさい」という神さまの教えは、「休んでいいんだよ、休まないとヘトヘトになってしまうよ」という神さまの御心なんですね。

休むとは

では、神さまが教えておられる「休む」とはどういうことでしょうか。「休む」というのは、ただ家でゴロゴロ寝ることを言

うんでしょうか？ 何もしないことを言うんでしょうか？

イエスさまがこの地上で生きておられた時、「安息日は何もしてはいけない！」ということをととても大切に考える人たちがいました。でも「何もしてはいけない！」ということばかりが強く言われ、神さまとの関係を見失ってしまった安息日を過ごしていたこともあったようです。

イエスさまは「人の子は安息日の主である」とおっしゃいました。「人の子」というのは、イエスさまのことですね。つまり、安息日もイエスさまを中心に考えないと本当の意味を見失ってしまうということです。

旧約聖書の時代、安息日は一週間の最後の日である土曜日でしたが、イエスさまが天に昇られてから、「安息日」は「週の最初の日」である日曜日となり「主の日」と呼ばれるようになりました。

週の最初の日、それはイエスさまが十字架から復活された日です。イエスさまが復活された日が、キリスト教会の安息日となりました。

ということは、十字架の死と復活が安息日を理解する上でもやっぱり大事なことです。安息日というのは何よりもこの十字架の光を受ける日なんです。

確かに寝ることは大切です。聖書は私たちの身体がととても大切なことを教えています。でも、寝るだけでは取れない疲れがあります。心の疲れ、魂の疲れです。人間の罪から出るこれらの疲れは、どれだけ寝てもどれだけ栄養ドリンクを飲んでも取れません。この疲れは人間の力で取ることができません。

十字架の光が必要です。十字架は私たち

に永遠の命を与えます。例えどれだけ学校で友だちと仲良くできなくても、テストで点数が取れなくても、十字架によって与えられる救いが減ることはありません。神さまの愛は変わりません。だから、イエスさまの十字架は生きる力を与えるんです。日曜日、教会に来ているのはこのためなんです。

日曜日の朝、「今日は教会に行きたくない！」と思うことがもしあれば、このことを思い出してください。そして考えてみてください。「自分は疲れていないか？」と。

「その疲れはただ寝ているだけじゃ取れないんじゃないか？」と。「イエスさまの十字架の光を受けないとダメなんじゃないか？」と。

安息日とは疲れた自分を知り、その疲れを教会に来てイエスさまに差し出す日です。そのような皆さんにイエスさまは「休ませてあげよう」とおっしゃっておられます。日曜日、神さまは皆さんに本当の休みを与え、そしてまた新しい一週間へと押し出してくださいませ。(大宮季三)

《今週の暗唱聖句》

そして、彼らに言われた。「人の子は安息日の主である。」(ルカによる福音書6章5節)

10月3日 ルカによる福音書6章1～11節

【分級展開例A】

第四戒 主の日の安息

今日は何曜日でしょう？ みんな知ってるよね？ そう日曜日です。
日曜日は何の日でしょう？ そう。日曜日は教会に行く日です。

世界の最初から、一週間に一日は神さまを礼拝する日なんです。
教会で教会学校をして、礼拝をして、友だちと楽しく過ごすんです。
みんな教会は楽しいですか？
(悪ふざけで、「楽しくない」と応える子は必ずいます。適度に聞き流すようにしましょう。)

教会の楽しいところを絵に描いてみましょう。
(毎週の礼拝、行事、キャンプ、愛餐会など)

10月3日 ルカによる福音書6章1～11節

【分級展開例B】

第四戒 主の日の安息

あんそくび
安息日って、聞いたことがありますか？

安息日って、何でしょうか？

ルカによる福音書の6章1～5節に、こんなお話が出てきます。

ある安息日に、イエスさまが弟子たちと麦畑を通りました。

「お腹が空いたなあ。」と、弟子たちは、麦の穂を摘んで、食べました。

ある人々が、「それは、安息日にしてはならないことです。」と言いました。

その人たちは、安息日のルールを何百個も作って、それを全部守らなければ、天国には入れません、と皆に教えていたのです。

けれども、それは、間違いでした。

イエスさまは言われました。

「わたしは救い主です。安息日はわたしのものです。」

私たちの安息日は、イエスさまが〇〇〇〇なされた日曜日です。

この日は、〇〇の日として、教会で神さまを礼拝します。

イエスさまによっていただいた救いを喜び、六日間の歩みのために、勉強や仕事を休みます。

安息日に、神さまから恵みと祝福をいただいて、私たちは、御国を目指して、神さまといっしょに歩いていくのです。

10月3日 ルカによる福音書6章1～11節

【分級展開例C】

第四戒 主の日の安息

安息日理解は、イエスさまと当時のユダヤ教指導者との間で最も先鋭的に対立した点です。教会においても時々、いわゆる「律法主義」的な理解に傾くことがあります。律法の原点である神さまの恵みへの感謝と、律法の目的である「人を生かす」ことに十分立脚し、自らの信仰の良心に基づいて判断することが大切です。

具体的な安息日の守り方は個人の考えの違いがあります。信仰の良心に基づいて自分で考えることができるように見守ることが大切です。教師の基準を押し付けず、自分で考えることができるように導きましょう。

聖書は安息日をどのように教えていますか。聖書を確認してみましょう。

出エジプト記20：8～11、申命記5：12～15を比較して違いを確認しましょう

ネヘミヤ記13：15～22、エレミヤ書17：19～27は何を戒めているでしょう

イザヤ書1：13、アモス書8：5はどのような「安息日」を求めているでしょう

なぜ安息日には「仕事をしてはいけない」と言われていると思いますか

次の行動は安息日に禁じられていると思いますか

- ・仕事の疲れを癒すために一日中寝る
- ・落ち込んでいるともだちの気分転換のために一緒に遊びに行く
- ・入院中のともだちの見舞いに行く
- ・将来のため資格試験を受験する
- ・困っている友人に付き添って相談所に行く

【分級展開例D】

聖書の世界を知ってるかい？④（鉱物編）

旧約聖書の昔、神さまの幕屋（神殿）で仕える祭司の衣装には豪華な胸当てがあつて、そこにはイスラエル12部族を表す12個の宝石が埋め込まれていました。出エジプト記39章10～13節を見ながら、下の図表を完成させましょう。

①ユダ	②イッサカル	③ゼブルン
④ルベン	⑤シメオン	⑥ガド
⑦ベニヤミン	⑧マナセ	⑨エフライム
⑩ダン	⑪アシェル	⑫ナフタリ

★宝石の名前（アイウエオ順）

あいぎよく 藍玉、エメラルド、オパール、サファイア、ザクロ石、ジャスパー、トパーズ、へきぎよく 碧玉、
むらさきずいしよう めのう、紫水晶、ルビー、ラピス・ラズリ

※聖書の翻訳によって宝石の名前が異なる場合があります。

画像をPCで検索してみましょう：「大祭司の胸当てに埋め込まれている12の宝石」

10月10日 テサロニケの信徒への手紙一5章12～15節(カテキズム問70、71)【解説と黙想】

第五戒 父母を敬う

・教理の解説

問70 第五戒は何ですか。

答 「あなたの父母を敬え」です。

問71 第五戒で、神さまは私たちに何を求めておられますか。

答 神さまのみをあがめ、聖書に従い、父と母を心から敬い、先生や目上の人たちを尊敬し、友だちや年下の人たちも大切にすることを求めておられます。神さまは、そのような人に祝福を豊かに与えると、特別に約束してくださっています。

以下は、日本キリスト改革派教会大会教育委員会著「神さまと共に歩む道『子どもと親のカテキズム』解説」198～201頁の要約です。

・神のみをあがめる

第四戒までは、神を愛してどのように生きるべきかを教えていましたが、第五戒からは、隣人を愛してどのように生きるべきかを教えています。前半の神への愛が、後半の隣人愛の土台となっています。

ここで、神を愛することから隣人を愛することへという、この順序が重要です。私たちは、神を神としてあがめ、神の御言葉に聞き従うとき、与えられた隣人を大切にすることができます。主イエスが十戒を要約なさり、「最も重要な第一の掟」、「第二もこれと同じように重要である」と言われた通りです(マタイ22:38～39)。第一の掟が最も重要だと分かるとき、第二の掟も同じように重要だと分かるのです。

また、主イエスは、隣人への愛が神と主

イエスへの愛より優先されてはいけないことも教えておられます(マタイ10:37)。

・あらゆる人間関係において

十戒は、隣人愛を父母を敬うことから教えています。通常、父母という存在は誰もが生まれ出てすぐに目の前にする隣人です。父母なしに人間は存在することはできませんし、父母に育てられて成長します。その父母を心から敬い、愛することは、大切なことです。

しかし、私たちが共に生きる隣人は父母だけではありません。問71はそれを意識して、「先生や目上の人たちを尊敬し、友だちや年下の人たちも大切にすることの大切さを教えています。目上の人を敬い従うことは、最も上におられる神への信仰と服従を意味します。

・特別な約束

第五戒には、「そうすればあなたは、あなたの神、主が与えられる土地に長く生きることができる」という特別な約束が付いています(出エ20:12)。信仰問答では、「神さまは、そのような人に祝福を豊かに与えると、特別に約束してくださっています」と教えています。これは、神の子どもたちの共同体が長く祝福されるという約束であり、地上で神の御国の目に見える姿である教会を建て上げるために必要です。目に見えない神との愛の交わりに基づく、目に見える隣人との愛の交わりこそが、神の御国の基礎です。第五戒の特別な約束は、神の祝福の大きさと隣人愛の大切さを強調するために与えられているのです。(小澤寿輔)

《参照聖句》 エフェソの信徒への手紙6章1～3節

《教理問答》 ウェストミンスター小教理問答問63～66

10月10日 テサロニケの信徒への手紙一5章12～15節

【説教展開例】

第五戒 父母を敬う

◇..... 単元のねらい◇

神さまが与えてくださった人間関係を大切にすることを目指します。第五戒は「父母を敬え」とありますが、第五戒を通して神さまが求めておられることは、ただ父母を敬うだけにとどまらず、①先生や目上の人たちを神さまが自分の上に置かれた者として尊敬し、従い、感謝を現わすこと、②友だちや年下の人たちに対しても忍耐し大切にすること、そして、③十戒を守る動機は神さまの愛への応答であること、を伝えて共に恵みに与りましょう。

「神さまとの関係の次は、人との関係を大切に」

導入

おはようございます。皆さんは、横断歩道を渡ろうとすると、信号を見ますね。渡って良いのは信号が……青のときですね。でも、赤信号のときには……渡りませんよね。それは、きっと、お父さんやお母さんに「○○ちゃん、横断歩道は青信号のときに渡るのですよ。赤信号のときには渡ってはいけませんよ」と教えてもらったので、皆さんは信号を守れるようになったのではないのでしょうか。でも、「そんな決まりを守るのはいやだ。ぼくは赤信号のときに渡るんだ」と言って、自分の考えを優先して赤信号のときに横断歩道を渡ってしまったら、どうなるでしょう。

このように、世の中にはルール（決まり）があります。みんながスポーツをするときにルールを守らなければ、どうなるでしょう。めちゃくちゃになって、気持ちよく試合ができませんよね。ぼくたち私たちが住むこの社会でもそうです。ルールを守れば、皆が平和に幸せに暮らすことができます。逆に、ルールを守らなければ、社会が混乱して皆が平和に過ごせないだけでなく、

ルールを守らない人も大変な目に合うかもしれない。それで、ぼくたち私たちが平和に幸せに過ごせるように、お父さん、お母さんは、「○○ちゃん、これこれを守りなさいよ」とルールを教えてくれるのだね。ルールを守るということは、ぼくたち私たちが幸せに生きるためなのだね。

それと同じように、神さまも、私たち人間にルールを与えてくださいました。「十戒」がそれです。それは、ただの「守らなければならない決まりごと」ではありません。それは、神さまから一方的に押し付けられた、人間を縛りつけるためのものではなく、私たち人間を救ってくださった神さまが、「大好きだよ」と言って、プレゼントとしてぼくたち私たちに与えてくださったものなのです。それを守ることによって、神さまがぼくたち私たちを祝福して、幸せに生きられるようにするためなのです。

皆さんは、教会学校の礼拝で十戒のお話を聞いてきているので、よく知っていると思いますが、これまでは、十の戒のうち、第一戒から第四戒までを学びましたね。これら四つの戒めは、第一の石の板に書か

れたと言われます。それらは「神さまとの関係」を教えていました。次の第五戒から第十戒は、第二の板に書かれたと言われますが、それらは「人との関係」を教えています。今日は、律法の第二の板の最初の戒め、第五戒を学びます。それはどんな戒めかと言うと、子どもと親のカテキズム問70にあります。「第五戒は何ですか」という問に対して、答は、「あなたの父母を敬え」です、とあります。では、「あなたの父母を敬え」という第五戒で、神さまはぼくたち私たちに何を求めておられるのでしょうか。それが問71の問答です。

答 神さまのみをあがめ、聖書に従い、父と母を心から敬い、先生や目上の人たちを尊敬し、友だちや年下の人たちも大切にすることを求めておられます。

第五戒が教えているのは、ぼくたち私たちがただ自分のお父さんやお母さんを尊敬して従うことばかりではありません。ぼくたち私たちの周りには色々な人がいます。まず、先生や目上の人たちです。そういう人たちを、神さまが自分たちの上に置かれた人として、尊敬し、お従いし、感謝を現わすようにと教えています。また、お友だちや年下の人たちに対しても忍耐し、大切にしてください、と教えています。

今日の御言葉からの教え

今日の聖書の言葉も同じことを教えています。パウロさんがテサロニケ教会に送ったテサロニケの信徒への手紙一5章12節から15節を先ほど読みましたが、そのうち12節と13節を読みます。「[12] 兄弟たち、あなたがたにお願いします。あなたがたの間で労苦し、主に結ばれた者として導き戒め

ている人々を重んじ、[13] また、そのように働いてくれるのですから、愛をもって心から尊敬しなさい。互いに平和に過ごしなさい。」

これは、教会の指導者たち（牧師先生や長老たち）は、神さまが選んでお立てになった人たちであり、ぼくたち私たちが神さまと良い関係を保って、喜んで生きることができるよう、教え、神さまに祈り、お世話をしてくれる人たちなので、尊敬してお従いしましょう、と教えています。

また、14節には、「兄弟たち、あなたがたに勧めます。……弱い者たちを助けなさい」とあります。パウロさんは、教会や家族の中に弱い人がいるならば、その人たちが神さまにある教会の交わりから無視されたり、置いてけぼりにされたりしないように、いつも助けるようにと教えています。

もう一つ、14節でパウロさんは、「すべての人に対して忍耐強く接しなさい」とも教えています。これは、「自分と気が合う人とだけ仲良くして助け合うのではなくて、どんな人でも受け入れ、助けなさい」ということを教えています。すべての人とそういう関係になるのは、難しいことかもしれません。でも、難しいと思うときは、イエスさまを思い出してください。イエスさまは、すべての人に対して優しく接してくださいましたね。ぼくたち私たちも、イエスさまのようになることを勧めているのですね。

十戒を守る生活は愛が動機

でも、どうしたらぼくたち私たちは、「父と母を敬いなさい」という神さまの戒めを守るようになれるのでしょうか。ぼくたち私たちは、神さまに言われるように、お父

さん、お母さんの言うことに従うことで、実は、もっと上にいらっしゃる神さまにお従いすることになるのです。それが大事なのですね。

けれども、「従う」と言っても、この世の人たちが意味する「従う」とは違います。子どもはお父さん、お母さんが恐ろしいから従うのでしょうか。いいえ、お父さん、お母さんが大好きだから従うのですよね。「十戒」も同じです。「神さまが恐ろしいから神さまに従いなさい」と言うものではありません。「神さまに愛され、神さまに罪から救っていただいたのだから従おう」と言うのです。「神さま、救ってくれてありが

とうございます！」という感謝の現れとして、お従いするのです。ところが、その「感謝」が足りないと、なかなか従えないのです。

ぼくたち私たちは、お父さん、お母さんに「有り難う」という感謝の気持ちをもってお従いすると、実は、神さまにお従いしていることになるのです。このようにして、お父さん、お母さんに喜ばれる子どもになると、神さまに喜ばれる子どもになれるのですね。日々、神さまへの感謝、お父さん、お母さんへの感謝の気持ちを持ってお従いする子どもになれるようお祈りしましょう。
(小澤寿輔)

《今週の暗唱聖句》

あなたがたは神に愛されている子供ですから、神に倣う者となりなさい。

(エフェソの信徒への手紙5章1節)

10月10日 テサロニケの信徒への手紙一5章12～15節 【分級展開例A】

第五戒 父母を敬う

父母についての言及は、それぞれの家庭の状況を確認しておきましょう。差し支えがありそうな場合は、言葉を配慮するなどしましょう。

今日の十戒は、「父母を敬え」です。
みんなお父さんやお母さんが好きですか？

みんなそれぞれお父さんやお母さんがいます。おじいちゃんおばあちゃんもいますね。おじさんおばさん、いところにいる人もいますね。それはみんな神さまがくださったんですよ。

それだけではありません。他にも、学校の友だちや先生もいますね。友だちにも年上の子も年下の子もいますね。みんなみんな神さまがくださったんです。

先生や、お父さんおかあさん、お友だちと仲良く楽しく過ごせるといいですね。
どうしたら良いと思いますか
「お父さんお母さんの言うことを聞く」「お手伝いをする」
「友だちとよく話しをする」 などなど

今週、周りの人と仲良くするために、どんなことをするか約束してみましょう。

10月10日 テサロニケの信徒への手紙一5章12～15節 【分級展開例B】

第五戒 父母を敬う

クイズです。十戒の第五戒は、何でしょうか。

「あなたの○○○○を敬え。」

○には、ひらがなが入ります。

そうです。「あなたのちち（父）はは（母）を敬え。」ですね。

私たちが礼拝するのは、神さまだけです。

でも、神さまを愛する人は、神さまが与えてくださった人たちのことも、愛します。

お父さん、お母さんを敬い、先生や年上の人たちを尊敬し、

友だちや年下の人たちも大切にすることを、神さまは喜ばれます。

わがままになってしまった時は、神さまに、「ごめんなさい」と謝りましょう。

神さまにゆるしていただくと、心が元気になりますよ。

そして、お父さん、お母さんにも、謝りましょう。

こころがスッキリして、また仲良くなれますよ。

私たちが神さまに従うとき、神さまは私たちを豊かに祝福してくださいます。

10月10日 テサロニケの信徒への手紙一5章12～15節 【分級展開例C】

第五戒 父母を敬う

第五戒からは人間関係についての戒めであると説明されます。カテキズムはウェストミンスター小教理問答に基づいて解説します。小教理問答問64の答えの文章を挙げておきます。

『第五戒が求めていることは、あらゆる人が目上、目下、対等という色々の地位と関係において持つ名誉を守り、義務を果たすことです。』

ポイントとなる理解を記しておきます。

- ・人間社会は、神さまによって成り、その意志と権威によって秩序づけられています。従って、人間関係は、まず神さまのみを崇めることから始まります。十戒の順序自体からこのことが言えます。
- ・戒めの視野は、父母だけでなく、あらゆる人間関係に関して述べています。
- ・人間の立場の違いは「従わせ、従う」関係ではなく、互いに相手の「名誉を守り、義務を果たす」関係です。「子を従わせよ」ではないことに注目しましょう。

カテキズムは「父母」で表されているのが、どのような人間関係であると理解しているのでしょうか。

私たちの周りの人間関係で何をどんなふうにかがければ良いと思いますか。

カテキズムの文章にある「神さまのみをあがめ」ることと、他の人を「敬い」、「尊敬し」、「大切にすること」とは、衝突することがあります。どんなことが問題になるのでしょうか。またどんなふうになれば両方を共存できるか考えてみましょう。

10月17日 創世記4章1～16節 (カテキズム問72、73) 【解説と黙想】

第六戒 殺すな

・はじめに

神に創られた最初の人アダムはエバと共に、罪を犯し楽園を追放される。アダムは、自身の罪のゆえに呪われた土(創世記3:17)を耕し生きる者とされた(同3:23)。その後カインは生まれた。その誕生の意義は大きい。神が人の命を次世代に繋ぐことをおゆるしになったということであるから。合わせて、それは「産めよ、増えよ」(同1:28)という祝福がなお途絶えていないことを示している。そこに、「わたしは主によって男子を得た」(4:1)というエバの喜びがあった。その喜びは弟アベルの誕生をもって一層、増し加えられたであろう。

・人類最初の殺人

罪の影響を受け呪われた世界において、しかし、神の祝福の中で成長したカインは父アダムのあとを継ぐように土を耕す者となり、アベルは羊を飼う者となった。そこで事件が起こる。二人がそれぞれになした献げ物のうち、神はアベルのものだけに目を留められたのだ(4:4～5)。その時、「カインは激しく怒って顔を伏せた」(4:5)。その怒りは神に対してであったろうか、アベルに対してであったろうか。神に対してであればそう訴えればいい。神も「もしお前が正しいのなら、顔を上げられるはずではないか」(4:7)と対話を求めておられるように見える。が、カインの怒りは神に心を閉ざし、弱いアベルに向かう。その狡さ、その愚かさ、その的外れな感こそ罪の特徴である。

カインは冷酷にアベルを手にかける。そ

れは神の祝福の器としての自身を汚す行為である。神のかたちである人間を壊す行為である。神の憐れみを踏みにじる行為である。

・カインの呪い

誰もが心の中にカインの呪いを持っている。彼の怒りを知っている。隣人に注がれる神の祝福を喜ぶよりは妬むことに熱心なのが我々の性根である。日々、神に心閉ざし、怒り、憎み、心で人を殺す。無視をしたり、暴力をふるうことだっている。誰もがカインの呪いを育み、「わたしの罪は重すぎて負いきれません」という呻きを募らせている。誰も自力でこの問題を解決することはできない。お手上げである。

・神の愛が我々を呪いから解放する

だから、主イエス・キリストの救いがどうしても必要である。主はそこご生涯と十字架とにおいて、神の御怒りと人間の呪いをすべて担われた。そして、愛と赦しだけを残された。あなたに残されたのである。だから、あなたは自分を愛さなければいけない。なぜなら、神があなたを愛しているから。あなたは隣人を愛さなければいけない。なぜなら、神がその隣人を愛しているから。神の祝福は、主キリストのゆえに、この世界にも、あなた自身にも、隣人にも途絶えてはいない。そのことを否定することは誰にもゆるされていない。自分の罪と呪いから解放される術は、主においてあらわされた神の愛を信じる他はない。「愛はすべての罪を覆う」(ペトロ一4:8)。

(柏木貴志)

《参照聖句》 ヨハネの手紙一3章15節、

《教理問答》 ウェストミンスター小教理問答問67～69、ハイデルベルク信仰問答問105～107

10月17日 創世記4章1～16節

【説教展開例】

第六戒 殺すな

◇..... 単元のねらい◇

「カインとアベル」の物語は、人間の心に巢食う嫉み、怒り、憎しみが容易に行為として表される様をリアルに伝える。まずは、この不気味な、それでいて誰もが心当たりを見つけることができる物語をそのまま伝えたい。子どもたちが目にしているであろう漫画や動画の類には怒りや呪いを扱うものが多い。しかし、案外に人間の生の罪の恐ろしさを表現しているものは少ないように見受けられる。溢れ返る情報に取り囲まれている子どもたちにとっても、この物語はインパクトを残す。そのうえで、人間の罪を乗り越える神の愛、またその応答としての自分と隣人への愛があるということを伝えたい。

「神さまは、生きよと私たちに命じられる」

はじめに～人間の罪～

みんな、このお話を知っている？ 知っている子も、初めて聞いたという子もまずは、どういってお話であったのかを確認してみましょう。

カインのお父さんアダムと、お母さんエバは、神さまから「食べると必ず死んでしまう」（創世2：17）から、絶対食べちゃダメですよと言われていた「善悪の知識の木」の果実を食べてしまいました。ここから「罪」が人間に入り込んだんですよね。だから、先生もみんなも「罪」をもって生まれてくることになりました。

みんなは、「罪」と聞いて、それがどういいうものであるか、思い浮かびますか。罪は、神さまに背くことだと言われます。アダムとエバは、神さまとの約束を破りました。それが罪の始まりとなりました。そして、その罪は、神さまが創られた人間に対して表わされていきます。今日のお話は、そのような「罪」がとてもひどい形で、生々しくあらわされたものです。

カインとアベルの物語

神さまに対して罪を犯し、エデンの園を出て行かなければならなくなったアダムとエバでしたけれども、神さまは二人の命を守られました。そして、赤ちゃんを産むことをおゆるしになりました。神さまは罪人にも祝福を絶やされないお方です。憐れみをもって守ってくださるお方です。生まれてきたカインはその恵みのしるしであるはずでした。それで、エバは「わたしは主によって男子を得た」（1節）ととてもとても喜んだんですよ。さらに、アダムとエバの間にはアベルも生まれて、家族四人が神さまの御守りのもとに幸せな日々を過ごしていたんです。が、そこで事件が起きます。

ある日の礼拝のことです。お兄さんであるカインは、「土を耕す」（3節）という農業の仕事をしていて、そこで採れた「実り」、収穫物を神さまに献げました。弟のアベルは羊飼いの仕事をしていて、その日は「羊の群れの中から肥えた初子」（4節）を神

さまに献げました。二人とも汗を流して働いて、そこで得られた良いものを神さまへの感謝として献げたんです。けれども、聖書にはこんなふうに記されています。「主はアベルとその献げ物に目を留められたが、カインとその献げ物には目を留められなかった」(4, 5節)。カインさんがせっかく持ってきた収穫物を神さまは喜ばれませんでした。なぜだかは分かりません。カインがかわいそうな気がしますね。

けれども、聖書が目にするのは、その後のことです。「カインは激しく怒って顔を伏せた」(5節)とあります。カインは礼拝をしているんですけども、悔しくて、腹が立って、神さまのことを見上げることができません。

みんな、このカインの気持がわかる？先生は悲しいかな、よく分かったりします。一生懸命にがんばったことを親や先生からほめてもらえなかったり、それどころか、兄弟やお友だちばかりほめられたりしていたら、“なんで、あいつばかり”と思えて悔しいし、“クソっ”という怒りの気持で心がいっぱいになってしまいます。そういうのは「嫉妬」、「嫉み」と言ってよくない心なんだけれど、このカインのように、どうにもこうにも怒りが収まらないということがあります。そして、神さまを見上げることができない。“神さま、どうしてですか、おかしいじゃないですか”と訴えかけることもできない。それが、「罪」というものがあらわされた姿です。怒りや憎しみの心も罪なんだけれど、その心を神さまに向かって訴えずに、顔を伏せてしまう、神さまに心を閉ざしてしまう、それを「罪」と呼びます。

その「罪」は、すぐに、人間への暴力と

してあらわされます。それが「罪」の恐ろしさです。止まらなくなるんです。どんどんとエスカレートしていくんです。カインは「弟アベルに言葉をかけ、二人が野原に着いたとき、カインは弟アベルを襲って殺した」(8節)。アベルは何も悪い事をしていませんよね。逆恨みというやつです。カインが怒りを向けるとするならば神さまに対してのはずです。でも、自分のやっていることが分からなくなる。そして、はっと気づいた時には「わたしの罪は重すぎて負いきれません」(13節)と嘆くことになる。この的外れな感じも「罪」の特徴と言えます。

たとえとしての『呪術廻戦』

先生は先日、『呪術廻戦』という漫画が人気だと聞いてお友だちばかり読んでみました。タイトルの通り、「呪い」がテーマになっていて、色々な人の怒りや悲しみや憎しみという負の感情が学校や病院、また街全体に溜まって「呪い」になるという発想がとても興味深かったです。それで、その「呪い」が人間の形を変えたり、滅ぼそうとしたりするんですよ。

なかなか考えさせられました。そして、読みながら、「呪い」はたくさんの人の怒りを集めなくても、たった一人の憎しめで、人の命を奪うものであるとも思いました。それほどに、一人の人間の「呪い」は大きなものです。

そんな「呪い」を、先生も、みんなも、心のなかに持っているんじゃないかと思えます。そして、いざとなればそれを行動に移しているんじゃないですか。誰かの悪口を言ったことはありませんか。無視をしたことはありませんか。

聖書には「兄弟を憎む者は皆、人殺しです」(ヨハネ一3:15)という言葉があります。心に抱く良くないこと、何らかのかたちで「呪い」として、私たちの行動にあらわれます。だから、聖書は私たちの憎む心を問題にするんです。兄弟を憎むその時点で、もうそれは人殺しと同じであると。悪口を言ったことはない、叩いたことはない、無視をしたことはない。そんな人でも、お友だちが困ったときにちゃんと助けたか、困らないように気をつけたか。そこまで考えるとどうでしょうか。「呪い」を抱えたまま、人を愛することはできません。みんな、そうじゃないでしょうか。みんながカインで、「わたしの罪は重すぎて負いきれません」という痛みを持っているんじゃないでしょうか。

神の愛

こういうお話をして、先生はみんなを責

めているわけではありません。先生自身も「呪い」を持っているんです。「罪」を持っています。ここで先生が言いたいことは、このどうしようもない「罪」を、神さまが赦してくださるということです。この「罪」を背負って、イエスさまが十字架に架かってくださったということです。そして、聖霊がイエスさまの赦しと私たちとを結び合わせてくださるということです。みんな一人ひとりが神さまに造られた大切な存在です。傷つけていい人など一人もいません。ましてやいなくていい人など一人もいません。みんなが罪人ですけれども、みんなが神さまに愛されています。だから、私たちも、神さまが愛される自分と、また隣人という周りの人たちを大切に愛したいんです。心に芽生える「呪い」を神さまからの御力を祈ることで乗り越えていきたいんです。(柏木貴志)

《今週の暗唱聖句》

兄弟に腹を立てる者はだれでも裁きを受ける。兄弟に『ばか』と言う者は、最高法院に引き渡され、『愚か者』と言う者は、火の地獄に投げ込まれる。

(マタイによる福音書5章22節)

10月17日 創世記 4章1～16節

【分級展開例A】

第六戒 殺すな

「殺すな」という戒めそのものは、子どもであっても理解しやすい戒めです。二つの方向の展開があるでしょう。一つは戒めの根拠として、私たちの命が神さまから与えられた「神のかたち」であるから大切にすること示す方向。もう一つは、戒めの展開として自身と他者を「豊かに生かすこと」を目指す方向です。今回は後者について扱います。

今日の十戒は「殺してはならない」です。でも、「殺してはならない」は、殺したり、怪我をさせたりするだけじゃありません。悲しませたり、苦しませたり、嫌な気持ちにさせたりすることも全部だめなんです。むしろ、人を喜ばせたり、楽しませたり、嬉しい気持ちにさせることが大切です。他の人だけじゃありません。自分も嬉しい気持ちになったらいいですよ。

「楽しい時」を絵に描いてみよう

- ・私と他の人たちがみんなで楽しんでいる場面、喜んでいる場面を絵に描いてみよう。
どんな場面なのか話してみよう。

10月17日 創世記4章1～16節

【分級展開例B】

第六戒 殺すな

「子どもと親のカテキズム」p.39を開いてみましょう。

問72 第六戒は、何ですか。

答 「殺してはならないです。」

問73 第六戒で、神さまは私たちに何を求めておられますか。

答 神さまは、人間をご自分の〇〇〇に似せて造られたので、他の人の命も、自分の命も大切にすることを求めておられます。人を〇〇〇こと、〇〇すること、〇〇〇をすることは心の中の人殺しです。私たちは、自分のように他の人をも愛します。

お兄さんのカインが、弟アベルを殺したのは、心の中の激しい怒りが原因でした。怒りは雑草と同じで、最初はほんの小さな芽なのに、あっという間にニョキニョキ大きくなって、自分の力では、抜けなくなることがあるのです。ですから、芽のうちに気づいて、神さまにお祈りして、助けていただきましょう。そうすれば、自分の命も他の人の命も、守ることになるのです。

10月17日 創世記4章1～16節

【分級展開例 C】

第六戒 殺すな

第六戒は、十戒の要約の第二の項目である「隣人を自分のように愛しなさい」という戒めを直接的に実行する戒めです。

カテキズムが教えるように、この戒めは、単に殺人を禁じるものではありません。心身を傷つけること、そのような可能性を回避する努力を怠ること、言葉や振る舞いだけでなく心の内においてそのような思いを持つことを禁じます。さらには、積極的に命を大切にすること、他の人を愛することを命じます。

戒めの根拠が、「(神さまが) 人間をご自分のかたちに似せて造られた」からであることは重要な点です。あらゆる殺人や命を損なう不法が禁じられていることの根拠は、命が神の恵みであり、生きることが神さまの意思だからなのです。

カテキズムは他人や自分の命を大切にするように命じることの根拠はなんであると指摘していますか。

神さまが「人間をご自分のかたちに似せて造られた」というのはどういうことでしょう。「子どもと親のカテキズム」問17、18、さらに問4、5を参考に考えてみましょう。

(次の質問は、立場や考えの違いによって結論が分かれます。特に信仰歴の浅い方などには注意して、事前に準備したCS教師が丁寧に話し合うことができる場合に限りましょう)

ウェストミンスター大教理問答の問136は、命を奪うことを罪と定める際に「社会正義・合法的戦争・止むをえない防衛の場合以外に」と留保を設けます。とはいえ、隣人の罪を奪うことが正当化されるわけではありません。私たちは一人の人の命が奪われることとどのように向き合うべきであると考えたらよいでしょうか。考えてみましょう。

10月24日 創世記2章18節～25節（カテキズム問74、75）【解説と黙想】

第七戒 姦淫してはならない

・カテキズムと御言葉の解説

十戒の七番目は、「姦淫してはならない」という教えです。つまり、性に関する戒めです。この戒めは既に夫婦となっている男女が自分の配偶者以外の者と肉体的な関係を持つことを禁じ、心と体がきよく保つことを求めています。

こどもと親のカテキズムは、まず男女の関係が神の創造の祝福であることから教えています。この単元の聖書箇所である創世記2章18、24～25節では「主なる神は言われた。『人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう』」、「こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。人と妻は二人とも裸であったが、恥ずかしがりはしなかった」と記されています。

神が人間を男と女に創造されたのは、「人が一人でいるのは良くない」という御心があったからです。「助け合う」ために男女に創造されました。この「助け合う」というのは単なる「お手伝いさん」という意味ではありません。この言葉の本来の意味は「向き合って助ける」という意味です。お互い、向かい合って、心を合わせて生きていくために、最初の人に妻が与えられたのです。男女の関係は神から与えられた祝福です。姦淫は、神が結び合わせてくださった男女の関係を破壊するものです。それゆえに禁じられているのです。

次にカテキズムは、神が、思いと言葉と

体をきよく保つことを求めておられると指摘しています。イエスさまは「みだらな思いで他人の妻を見る者はだれでも、既に心の中でその女を犯したのである。」（マタイ5：27～28）とおっしゃっています。イエスさまは心の中でのみだらな思いも「姦淫」として指摘しています。カテキズムは私たち人間が神の前で、思いと言葉と体を切り離すことなく、きよく保つことを求めておられます。

最後にカテキズムは結婚と家庭形成の意義を語っています。第七戒は、禁欲的な勧めにとどまりがちです。しかし、カテキズムは結婚生活に視点を向けて、神の前で結婚生活を送っていく積極的な側面を語っています。

・子どもたちに向けて

第七戒は「性」のテーマなので、デリケートです。しかし、教会は気を使いすぎて、子どもたちへ積極的に「性」のテーマを語ってこなかったように思います。私たちの社会は、性的な誘惑にあふれています。時に不倫の関係が美しく表現され、それを題材として作品が数多く世に出回っています。若者の間では婚前交渉も当たり前となっています。そのような乱れた社会の中で、教会は男女の関係が神に与えられた祝福として、聖書が語る「性」について、子どもたちに真剣に語る事が求められています。

（高内信嗣）

《参照聖句》 マタイによる福音書25章27～29節、エフェソの信徒への手紙5章3～4節
《教理問答》 ウェストミンスター小教理問答問70～72、ハイデルベルク信仰問答問108、109

10月24日 創世記2章18節～25節

【説教展開例】

第七戒 姦淫してはならない

◇..... 単元のねらい◇

この単元は十戒の七番目「姦淫してはならない」を取り扱っている。「性」はデリケートで難しいテーマである。しかし、「性」が乱れた社会の中で子どもたちを取り巻く状況は悲惨である。聖書は男女の関係についてどのように教えているのか。神の祝福としての男女の関係を子どもたちに伝えることがこの単元のねらいである。

「男女の関係の祝福—きよく生きる！」

おはようございます。今日も教会に集まってくれてありがとうございます。一緒に聖書を読んで、神さまが僕たちに何を語りかけているのかを知りたいと思います。

最近、ずっと十戒を読んでいますね。十戒は「～してはいけない」という言葉がよく出てきますので、学校の校則のように思えるかもしれません。僕は小さいころから教会に通っていますが、十戒の言葉がとても厳しく聞こえたのを今でも覚えています。でも、十戒は神さまのお心が込められているところです。神さまに愛されている私たちが、その愛に応えながら、神さまと共に歩んでいく道しるべが十戒です。今日も一緒に十戒を学びたいと思います。

今日は第七戒、「姦淫してはならない」です。「姦淫」って言葉、なかなか難しいですね。姦淫というのは、男の人と女の人の関係が正しくないことを表している言葉です。

結婚している人が、自分のパートナー以外の人と性的な関係を持つことです。「姦淫してはならない」というのは、男女の関係を守るための戒めです。

僕は小学校の時から、恋愛のお話に興

味津々でした。修学旅行の夜は同級生と恋愛の話で盛り上がりました。みんなもそのようなことに関心を抱く時期かもしれません。

だから、今日のお話は、僕たちにとって無関係のお話ではありません。男の人と女の人の関係に興味が出る時期に、きちんと神さまのお心を知りたいと思います。

今日は神さまが男女の関係について何を教えているかということと一緒に考えたいと思います。

先ほど、読んだ聖書箇所にもこのような御言葉がありました。

創世記2章18節「主なる神は言われた。『人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。』」

この神さまのお言葉は、最初の人間に語りかけられたものです。神さまは、世界をお造りになられましたが、最後に人間が造られました。最初に造られた人間は男でした。男は独りぼっちでした。独りぼっちって本当に寂しいです。

ドラえものの道具の影響で、のび太くんが世界で独りぼっちになってしまった時に、「ジャイアンでもいいから、出てきて

よ！」と叫んでいました。それほどまでに人間にとって孤独は辛いのです。

神さまは独りぼっちでいる男を見て、人間が一人でいるのは良くないとお考えになりました。男に合う助け手として女が創造されたのです。

助け手というのは、お手伝いさんのことではありません。お互いが向かい合って支えるという意味です。上下関係があるわけではありません。一緒に向かい合って、手を取り合って生きていくパートナーが男に与えられたのです。つまり男女の関係というのは神さまが与えてくださったものです。

今日のカテキズムに、「男の人と女の人の関係は、神さまの創造の祝福です。」とされています。男女の関係は神さまから与えられた、とっても素晴らしい祝福です。喜びです。

でも、そのような素晴らしい祝福を壊すのが、「姦淫」です。

大切な人が自分にくれたプレゼントを目の前でわざと壊したとしたら、当然、プレゼントをくれた人は悲しまれますね。「姦淫」も同じことです。神さまが与えてくれた男女の関係を、僕たちが乱暴に扱うなら、神さまは本当に悲しまれます。

そして悲しむのは神さまだけではありません。人間もそこで傷つきます。神さまとの関係も壊れ、人間との関係も壊れていく。

神さまはそのようなことを望んではおられません。

最近、ドラマでも、漫画でも、小説でも、色んな所で、男女の関係が用いられます。みんなもよく恋愛が取り上げられているものを目にすると思います。

そして時には浮気、不倫など、正しくない男女の関係が、正しいことのように言われることがあります。美しい男女の関係のように描かれることがあります。そういったものを見て、僕たちの心は惑わされてしまいます。だからこそ、僕たちは聖書が教えている神さまのお心を思い出したいと思います。

今日のカテキズムでは「神さまは、思いと言葉と体をきよく保つことを求めておられます。」とされています。

神さまを悲しませ、人間を悲しませることがないために。また今後の結婚の祝福を壊さないためにも、今、僕たちがきよく思いと言葉と体を保ちたいと思います。

今、僕たちが自分自身をきよく保つ生き方をするならば、必ず将来の結婚生活に、その生き方が実をもたらします。神さまがパートナーを与えてくださったことを心から感謝して、大切にすることができるのです。神さまの望む祝福された男女の関係に向かうために、今、自分自身をきよく保ちたいと思います。(高内信嗣)

《今週の暗唱聖句》

主なる神は言われた。『人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。』

(創世記2章18節)

10月24日 創世記2章18～25節

【分級展開例A】

第七戒 姦淫するな

性的関係についての知識がない就学前や低学年の子どもには、限られた分級の時間だけで「姦淫」という言葉を正確に説明するのは難しいでしょう。結婚関係に言い換えることができるでしょう。ただし、実際に両親が離婚や再婚をしている子どもがいる場合、誤解なく伝えるのは難しくなります。そんな場合を想定し、「結婚＝神さまの前での約束」として説明してみました。

今日の十戒は、結婚のことを決めています。結婚というのは男の人と女の人が一つの家族を作ることですね。結婚式では神さまと男の人と女の人が約束して、二人が夫婦になるんです。

みんなはもちろん結婚はしていませんよね。けれど、約束ならしたことがありますよね。お父さんやお母さん、お友だちと「約束」をしたことがある人はいますか。

でも、せっかく友だちと約束したのに、友だちがその約束を守ってくれなかったら嫌ですね。神さまも同じです。約束をしたのに、その約束を守らない人はよくないです。神さまは、私たちとの約束を全部必ず守ってくださいます。イエスさまを送ってくださること、イエスさまによって私たちを救ってくださることを約束して、実際にそうしてくださっていますよね。

でも私たちは、なかなか約束を守ることができません。友だちとの約束も、お父さんやお母さんとの約束も、神さまとの約束も守れないことがあります。これは良くないですね。

約束を守れなかったときはどうしたら良いでしょう？「神さまごめんなさい」「お父さん、お母さんごめんなさい」って謝ることが大事ですよ。

神さまは謝る私たちを赦してくださいます。私たちも、誰かが「○○くん、ごめんなさい」って謝ってくれたら、「いいよ」って赦してあげて、仲直りしたいですね。

自分が謝ったこと、謝ってもらったことを話してみましよう。

10月24日 創世記2章18～25節

【分級展開例B】

第七戒 姦淫するな

広い空、青い海、緑の木々、そして、わたしたち一人一人。これらは、自然にできたのではなく、すべて神さまが造って下さったものです。

神さまが造られた最初の人間は、アダムです。

神さまは言われました。

「人がひとりでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。」

そして、アダムを眠らせ、あばら骨の一部を取って、女の人を造りました。

アダムは、女の人エバを見て、大喜びでした。

だって、今までは、まわりにいるのは動物ばかり。一緒におしゃべりしたり、エデンの園で一緒に働いたりする人が、いなかったのです。

神さまは、アダムとエバを祝福しました。

結婚は、神さまが決められた祝福のルールです。

神さまが、一人の男の人と、一人の女の人を夫婦として結び合わせ、祝福してくださるのです。ですから、お父さんであっても、お母さんであっても、友だちであっても、誰であっても、神さまが祝福して結び合わされた二人を引き離したり、邪魔したりしてはいけません。

結婚のルールを造られた神さまに従って歩む時、私たちの家庭は祝福を受け、神さまが造られた世界を、神さまの御心に沿って治めるために用いられていきます。

10月24日 創世記2章18～25節

【分級展開例C】

第七戒 姦淫するな

姦淫禁止規定は性的関係という最もプライバシーに触れる可能性がありますので扱いにくい戒めです。慎重に扱う必要があるでしょう。特に子どもや中高生は、どの程度の知識を持っているかによって伝え方が違ってきますから、相手を理解した上で、丁寧に、かつきちんと伝えることが大切です。

仮に性的関係について理解できない年齢の相手や、性的問題について踏み込んで話すことが難しい相手の場合でも、この戒めについて学ぶことは大切です。なぜならこの戒めは単に性関係を制限するだけの戒めではないからです。特に性関係において私たち自身を清く保つことは、神さまの創造の祝福を尊重することです。この戒めから、結婚関係の尊重、その背後にある異なる性の相手を人格的存在として尊重し愛すること、また人間関係そのものと契約に対する誠実さ、さらには人間の基本的関係として互いに「助け手」であることなどについて考えることが大切です。

現在は結婚についての価値観も多様になっています。またジェンダーや性役割についての理解は神学的にも議論のある課題です。慎重にあつかうようにしましょう。

聖書は、一組みの男女が結婚することを教えています。現代の私たちにとっては常識ですが、日本でも明治期までは、一人の男性が複数の妻を持つことは普通にあることでした。現代でも複数の妻を持つことを認める国があります。

なぜ、一夫一婦制が好ましいとされるのでしょうか。

結婚で私たちは神さまの前で「結婚の誓約」をします。これは結婚のどんな意味を示すでしょう。またそのような結婚において、私たちは互いにどんな義務を負うでしょう。

現代では結婚しない人もたくさんいます。神さまが男女を造る際に「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう（創世記2：18）」とおっしゃったことは、どのよう to 実現されると考えますか。

10月31日 マタイによる福音書25章14～30節（カテキズム問76、77）【解説と黙想】

第八戒 盗むな

・盗んではならない（消極的戒め）

子どもと親のカテキズムの間76、77は十戒の第八戒について教えます。「盗んではならない」（出エ20：18）という戒めは、誰もが疑問を抱くことなく受け入れる教えの一つでしょう。十戒はエジプトを出てきたイスラエルの民が、神の民として生きていくための指針として与えられた戒めです。「神の民として生きるあなたがたは盗んではならない」。

では何を盗んではならないのでしょうか。出エジプト記を読み進めると、十戒が教えられた後、個々の具体的な戒めが記されます。21章16節には「人を誘拐する者は、彼を売った場合も、自分の手もとに置いた場合も、必ず死刑に処せられる」とあります。（「盗む」も「誘拐する」も同じ語「ガナブ」が用いられている）。当時、最も多く盗まれていたのは、「人のもの」ではなく「人」だったようです。人を誘拐したり売ったりする行為を禁じています。今日でも誘拐や拉致があります。それは言うまでもなく他人の家族を盗むことであり、また、その人の人生、時間、身体を盗むことであって、許される行為ではありません。

また「他の人のものを盗んだりしてはいけません」とカテキズムは教えます。人の答えを盗むカンニングは子どもたちの間でも行われることかもしれません。近年、人のデザインを盗用したり論文を盗用するという事件もありました。あるいは人の夫や妻の心を盗み、自分のものにしようとする。国家間で言えば、他国に侵入し領土

を盗み取ろうとすることは戦争に発展します。第八戒は身近な小さなものから大きなものまで幅広い「盗み」を禁じる戒めです。

・すべては神さまのもの

主なる神さまが「盗んではならない」と命じられるのは、人にしろ物にしろ、一つ一つが神さまによって造られた神さまのものだからです。「地とそこに満ちるもの/世界とそこに住むものは、主のもの」（詩24：1）「良い贈り物、完全な賜物はみな、上から、光の源である御父から来るのです」（ヤコブ1：17）

カテキズムでも「私たちの持ち物は、私たちの体もお金も時間も、すべて神さまからの贈り物です」と告白します。自分に与えられているものは感謝して大切に管理することを教え、他人に与えられているものを盗むことは、神さまの所有物を盗むことになることを教えています。

・与える喜び（積極的戒め）

単に「盗むな」という消極的命で聖書は終わりません。「盗みを働いていた者は、今からは盗んではいけません。むしろ、労苦して自分の手で正当な収入を得、困っている人々に分け与えるようにしなさい」（エフェソ4：28）。ザアカイがそうでした。キリストに出会い、キリストを人生にお迎えすると、私たちは盗む者から与える者に変えられます。自分のことだけを考え、他人のものでも欲しがっていた人が、神さまにささげ、隣人に与えることが喜びであると知るようになるのです。（小橋口貴人）

《参照聖句》 エフェソの信徒への手紙4章28節、ルカによる福音書19章1～10節

《教理問答》 ウェストミンスター小教理問答問73～75、ハイデルベルク信仰問答問110、111

10月31日 マタイによる福音書25章14～30節

【説教展開例】

第八戒 盗むな

◇..... 単元のねらい◇

第八戒の内容を理解しつつ、神さまから与えられたものをふさわしく管理することの大切さを学びたい。また、盗まないという消極的理解だけでなく、ささげることや与えて生きるという神の民としての積極的な生き方を語りたい。

「神さまから与えられたものを大切に」

盗んではならない

続けて十戒を学んでいます。今日は第八の戒め「盗んではならない」「泥棒してはいけないよ」という戒めです。わかりやすいですね。みんなと仲良く生きていくためには、とても大切なことです。みなさんは、何かを盗んでしまったことがありますか？

ある人がこんな話をしていました。中学生だった時、その月はお小遣いを使い過ぎてしまって、このままでは毎週買っているマンガの雑誌を買えないと気付いたそうです。それで、どうしたかと言うと、日曜日の教会学校の礼拝で捧げる献金をごまかして、献金袋がまわってきたときに、入れるふりをしてお金を入れなかったそうです。神さまにささげる分をマンガに当てたんですね。「わたしはあの時、神さまのものを盗んでしまったのだ」とお話ししてくれました。神さまにささげるべきお金を自分が取ってしまったということです。

先生は子どもの頃、たまにお母さんにお遣いを頼まれることがありました。財布を渡されて、「牛乳ないから買って来て」とか「納豆買って来て」とかお願いされました。そういう時は、母親の財布であることをいいことに、頼まれてもいないのに食べ

たいおやつを買ったり、好きな飲み物を買ったりしました。つまり母親のお金を盗んでいたのです。

「盗んではならない」という戒めは、実は私たちの身近にあることだと思います。テストの時に、他の人が書いた答えを盗み見てしまうことをなんと言いますか？カンニングですね。カンニングも盗むことです。また、みなさんはお友だちとの待ち合わせの時間に遅れてしまった経験がありますか？逆に、ずっと待たされた経験はどうでしょうか？先生はどちらも経験があります。例えば、一緒に出掛けようと言って、駅でお友だちと待ち合わせたとしますね。もし自分が30分遅れてしまったとしたら、お友だちの何を盗んだことになるかわかりますか？ そうです。時間ですね。お友だちの大切な時間を30分も盗んでしまったことになります。

全ては神さまからのもの

さて、カテキズムの間77を一緒に読んでみましょう。間77「第八戒で、神さまは私たちに何を求めておられますか」答「私たちの持ち物は、私たちの体もお金も時間も、すべて神さまからの贈り物です。神さまは、

それらを感謝し、ふさわしく管理し、神さまの栄光のために用いることを求めています。神さまの贈り物を自分勝手に使ったり、他の人のものを盗んだりしてはいけません」。

「盗んではならない」という戒めが求めていることは、ただ私たちが他の人のものを盗まないようにというだけではなく、神さまから与えられた全てのものを、自分勝手に使ってはいけないよということも教えています。

私たちは、自分のものなら自分の好きに使っていいと思いますよね。でも自分のものを好き勝手使う時に神さまはこんなことをおっしゃるんです。マラキ書3章9節「あなたがたは、わたしのものを盗んでいる。この民のすべてが盗んでいる」（新改訳2017）。私たちの持ち物は、私たちの体もお金も時間も、すべて神さまからの贈り物ですから、私たちがそれらを自分勝手に用いる時に、神さまは「わたしのものを盗むな」とおっしゃるのです。

神さまから与えられたものを、ふさわしく管理できなかった人の話が、マタイ25章に出ています。14節から18節を読んでみましょう。ここに、神さまから5タラントン（3億円）、2タラントン（1億2千万円）、1タラントン（6千万円）預かった人が出てきます。神さまがこれだけのお金を僕たちに預けたのは、これを用いて豊かに生きてほしかったからです。

みんなにも神さまから多くの贈り物（賜物）が与えられていると思います。それらは、みんなに豊かに生きてほしいと、神さまが与えてくださった大切な能力・性格・資質です。しかし、このたとえ話を読むと、このうちの1人は、与えられた賜物を全く

用いず、自分の好き勝手隠してしまって、大切にしなかったことが責められています。「あなたはわたしのものを盗んでいる」と言われているようなものですね。

私たちも、他の人のものを盗んではいけないということと、何よりも神さまのものを盗むようなことはしてはいけないということ覚えましょう。

ささげて生きる喜び

最後に考えたいのは、盗まなければそれでいいのでしょうかということです。実は聖書は、もっと積極的な生き方を教えています。普通であれば、他の人のものを盗んだ人や、神さまのものを盗んだ人には「これからは、もう盗んではいけないよ。気をつけなさいよ」と言われておしまいでしょう。しかし聖書はこのように教えています。「盗みを働いていた者は、今からは盗んではいけません。むしろ、労苦して自分の手で正当な収入を得、困っている人々に分け与えるようにしなさい」（エフェソ4：28）。盗む者ではなく与える者になるように。他の人から奪う者ではなく他の人にささげる者になるように。ここに神さまの心があります。

みなさんよく知っているザアカイさんのお話がそうですね。人から不正にお金を集めていた（盗んでいた）ザアカイさんは、イエスさまと出会ったときに、「もうこれからは盗みません」と言っただけではありませんでした。「これからは、財産の半分を貧しい人々に施します」と言いました。つまり、これからは、盗む人ではなくて、与える人として生きていきますと言ったのです。

私たちはよく「人からされて嫌なことは、

人にしないように」と教わります。しかし、神さまが教えているのは、「人からしてもらいたいことを、あなたも人にしてあげなさい」というもっと積極的な生き方です。ザアカイがそうであったように、私たちも、イエスさまに出会って、イエスさまを人生にお迎えすると、人のものを盗む人から、逆に人に与える人に変えられていきます。

実はそれが喜びであると知るからです。自分のことだけを考えて、他人のものをも欲しがって生きる生き方よりも、神さまにささげ、隣人に与える生きの方が豊かだと知るのです。「受けるよりは与える方が幸いである」(使徒20:35)と言われたイエスさまが、私たちの内におられ、一緒に生きてくださるからです。(小橋口貴人)

《今週の暗唱聖句》

しかし、ザアカイは立ち上がって、主に言った。「主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します。」
(ルカによる福音書19章8節)

10月31日 マタイによる福音書25章14～30節

【分級展開例A】

第八戒 盗むな

今日は「盗んではならない」というところです。

みんな、欲しいものがありますか？ オモチャや、絵本や、お人形や、いろいろ欲しいものがありますね？

何か欲しいものがあるときは、どうしていますか？

「お母さんにお願ひする」「クリスマスや誕生日にプレゼントでもらう」

ここで突然ですがクイズです。

お母さんが、「お手伝いしてくれたら、買ってあげるよ」って言われた時には、どうしたら良いでしょう？

1 番：お手伝いをがんばる

2 番：「買って！ 買って！」って怒る

3 番：お兄ちゃんが持つてるのを勝手に使う

欲しいものがある時は、ちゃんとお願ひして、ちゃんとお手伝いをしないとダメですよ
ね。

みんなの欲しいものを教えてくれるかな？

10月31日 マタイによる福音書25章14～30節

【分級展開例B】

第八戒 盗むな

有名なイソップ物語に、こういうお話があります。

一匹の犬が歩いていると、大きな肉が落ちていました。

「いいものを、見つけたぞ！」

犬は、その肉に、がぶりと食いつきました。

「こんないい肉、誰にも分けたくない。一人で食べてしまおう。」

犬は肉をくわえたまま、橋をわたりました。

すると、橋の下の川に、大きな肉に食いついている犬が見えます。

「いいなあ。あの肉の方が大きい。そうだ、あいつをおどかして、あの肉をとってやろう。」

この犬が、川の中の犬に向かって、「ワーン！」と大声で吠えたとたん、

くわえていた肉が、ポチャーン……と水の中に落ちてしまいました。

川の中の犬は、水に映った自分の姿だったのです。

マタイによる福音書25章14～30節を読んでみましょう。

神さまは、私たち一人一人に、かならずタラントン（神さまのために用いる才能）を預けてくださっています。タラントンの種類や、量は皆、違います。他の人のタラントンをもらったり、自分のタラントンをあげたりすることもできません。他の人と比べる必要もないのです。

神さまが願っておられるのは、神さまが私たち一人一人に預けてくださったタラントンを、神さまに喜んでもらえるように用いることです。

神さまを愛し、人を愛して、祈りながら、助けていただきながら、タラントンをを用いて、神さまの栄光を現わすことです。

「○○○○○な良い僕だ。○○○○○。」と、神さまは喜んでくださいます。

10月31日 マタイによる福音書25章14～30節

【分級展開例C】

第八戒 盗むな

これまでの戒めと同様、「盗むな」という戒めは、単に窃盗だけを禁止しているのではありません。子どもと親のカテキズム問77は、この戒めの求めていることについて「自分勝手に使っ……てはいけません」とし、ウェストミンスター小教理問答問74は「私たち自身と他人との富や生活状態を正当に確保し、向上させること」が求められていると説明します。

与えられた恵みを相応しく感謝すること、正当で誠実な手段を用いて自分と隣人恵みを増し加えること、これらは目に見える財産だけでなく、私たちが神さまから与えられているすべてに関して言えることです。

以下の問は正解がありません。どうしてそういう答えを導き出したのか確かめるのは大切です。どんな答えでも、「良い答え」と認めてあげましょう。

今日のたとえ話には三人の僕が出てきています。

質問1 五タラント預かった僕が、二タラントしか儲けることができなかつたら主人は何と言うと思いますか？

質問2 二タラント預かった僕が、他の僕を騙して五タラント儲けていたら主人は何と言うと思いますか？

質問3 一タラント預かった僕が、お金を銀行に預けていたところ、銀行が破綻しました。主人は何というと思いますか。

質問4 主人は、一タラントを預けた僕を「よく使い込まずに正直に財産を返してくれた」と褒めてあげれば良いと思いませんか？

11月7日 列王記上21章1～29節（カテキズム問78、79）【解説と黙想】

第九戒 偽証するな

十戒は、神と人との生き生きとした信頼関係とそれによってもたらされる人と人との真実の信頼関係を育む力です。その時に鍵になるのは「真実」（アーメン）です。神の真実が私たちの救いの根拠です。また人間関係の根拠です。人は、真実を失った世界において人間らしさを保つことができなくなるからです。人の真実はその人の行いによって示されます。言行一致こそ、真実の要です。それは、人となられた御子イエス・キリストにおいて完全に具現されました。このイエスさまを知り、信じることこそ、第九戒を具現する王道です。

「神さまは真実な方ですから、私たちにも真実をお求めにな」（問79）られるのです。これは、単なる要求、命令ではありません。人は、主イエスを信じ、知るほどに自分の不真実にたじろがされます。そのとき、繰り返し悔い改めへと招かれます。同時に「真実に生きて行きたい！」という願いが「起こされて」まいります。子どもの教会の営みは、そのためにも生けるイエスさまを中心にして営まれます。昔の神の民とは違って、もはやこの方を抜きにして十戒を語ることはできないだろうと思います。

子どもたちにとって嘘をつくことは身近な体験です。したがって、何故、嘘をつくのか、いっしょに考えることができれば、深い感謝へと導かれるはずです。自己正当化や自分を大きくかつよく見せようとする自己中心の思いが嘘を生みます。他者を貶めて、自分を高めるのが偽証の罪の本質で

す。これに抗うのが、隣人に愛をもって、真実のことは人を生かし、建て上げる言葉の語り手となることです。

今日の日本社会はまさに、底なしのような悲惨な状況にあるように思います。それは、権力を持つ人々の偽証がまかり通ってしまっているからです。しかし、何と云っても決定的に問われているのは教会です。日本キリスト改革派教会は、神の言葉の説教によってこそ教会が堅固に形成されるとの確信に生きる共同体です。それだけにその信仰告白、宣言が出しっぱなしになっていけばこれ以上に罪深いことはありません。

最後に、テキストは、主に忠実なナボトは、イゼベルの企みによって殺され、そのぶどう畑は没収されてしまいます。ナボトが神と王とを呪ったという偽証によって処刑に至ります。しかし、神はそれを見過ごしになさいません。エリヤを通して悔い改めさせるのです。

なお、ここでの最大のメッセージは、土地の収奪にあります。土地は主なる神のものなのです。イスラエルは神の土地を借用しているに過ぎないのです。（レビ記25章23、24節）。最悪王アハブと言えども、覆せないことでした。しかし、不信の妻、神を恐れることを知らない彼女は、偽証することによって法を乗り越え、人を殺したのでした。恐るべきかな、偽証です。

（相馬伸郎）

《参照聖句》 創世記3章4節、4章8節、箴言30章8節、ペトロの手紙一2章22節

《教理問答》 ウェストミンスター小教理問答問76～78、ウェストミンスター大教理問答問144、ハイデルベルク信仰問答問112

11月7日 列王記上21章1～29節

【説教展開例】

第九戒 偽証するな

◇..... 単元のねらい◇

十戒は、神が「あなた方は、わたしの民なのだから、この戒めを守って生きてくれるよね」という信頼の宣言でもあります。「偽証するな」とは、「わたしの前で嘘や偽りで生きる必要はまったくないはずだよ」と言う、御心です。この恵みの中で、私たちは真実に生きる基礎を得ます。しかも、人となられたイエスさまの赦しを受けているのですから、なおさらです。神の前で真実にいられれば、人の前でもできる。これを信じて、子どもたちとともに裏表のない人格形成を目指したいと思います。

「神さまの前で、うそつく必要はありません」

ナボトさんは、イズレエルという村にぶどう畑を持っていました。毎年、秋になるとそれはそれは、おいしいぶどうがたくさん実る畑でした。ところがこの畑は、サマリアの悪い王さまアハブの宮殿のそばにありました。

アハブ王は、ナボトさんに言いました。「お前のぶどう畑を譲ってくれ。何と言ってもわたしの宮殿のすぐそばに、ちょうどこんな畑が欲しかったのだ。もちろん、ただでよこせというわけではないぞ。もっと良いぶどう畑と交換しようではないか。なんなら、この畑にふさわしい代金を支払うぞ。」ナボトさんは、とても怖い顔をして言いました。「この畑は、先祖から受け継いできたものです。神さまが私たちに託してくださったのです。だから、一生懸命、働いて、立派なぶどう畑にしているのです。もしそんなことをしたら、神さまの前にわたしは、罪を犯すことになります。たとえ王さまでも無理です。いやです。」アハブ王は、カンカンに怒りました。しかしたとえ王さまでも、イスラエルの土地は、神さ

まから授かったものだという掟を破ることはできませんでした。

妻のイゼベルは、心の中で歯がゆく思いました。王さまのくせに情けないと思ったのです。そして、恐ろしいことをたくらみました。ナボトを殺して、畑を奪おうとしたのです。そのために、ある方法を考えました。ナボトが住む町の指導者とお金持ちたちに、王さまの名前で命令を書き送りました。「町中の人々に断食させなさい。みんな何事が起ったのかとびっくりして、いやだなと思うはずだ。そしてナボトを人々といっしょに連れ出して、真ん前に座らせなさい。そして、やくぎを雇って、ナボトが神と王を呪ったと、証言させなさい。みんな、ナボトのせいでこんな目に遭っているのかと思うはずだ。そして彼を石打の刑にして殺してしまいなさい。」こうして、とうとう、信仰と勇気の人ナボトは、お金で買われた悪者の嘘の証言で有罪とされ、殺されてしまったのです。嘘は、人を殺す力を持っているのですね。

さて今朝は、十戒の第九戒「隣人に関して偽証してはならない」に思いを巡らしてみましよう。

皆さんの中で、これまで一度も嘘をついたことがない人はいますか。いたら、手を上げてください。もし、手を挙げたなら、おめでとうございませう。あなたは、嘘つきです。もしかすると人生で最初の嘘をついたのかもしれない。

そのように言う先生も、当然、嘘をついたことがあります。数えきれないほど、です。ただし、イエスさまを信じてから、嘘をつくことは、どんどん少なくなったと思えます。何故でしょうか。

そもそも人は何故、誰にも教えられないのに、嘘をつくことを覚えてしまうのでしょうか。嘘をつくことが上手になって行くのでしょうか。嘘をついても平気になってしまうのでしょうか。考えてみてください。今日は、これで終わりにしてもよいくらいです。分級で、みんなで考えてみたいのです。

アハブ王の妻、イゼベルは、第一にナボトのぶどう畑が欲しくて、嘘をつきました。第二に、王さまに逆らうナボトが憎くて、殺したくなったからです。つまり、私たちが嘘をつくのは、自分の得になるように、自分の思い通りになるようにという理由からなのです。物事を自分を中心にして考えて、自分の欲望を果たすためなのです。相手の幸いや喜びを思いやって、嘘をつくわけではありません。それは、そもそも嘘とは呼べないかもしれません。

ナボトは何故、自分をうらぎらなかつたのでしょうか。それは、神さまの前で、生

きていたからです。逆に、人が嘘をつくのには、神さまの前で生きていないからです。ナボトは知っています。土地は、本来、王さまのものではありません。またナボトやその先祖のものでもないのです。神さまのものなのです。ですから、ナボトは神さまの前で、たとい王さまと言えども、どんなにお金をもらっても、神さまの土地を好き勝手にできない。「できないものはできない」と、勇気と信仰をもって逆らったのです。

イゼベルさんは、神さまを知りません。ですから、神さまの前で生きる喜びや幸いを知りません。「王さまが一番偉くて、妻のわたしは二番目に偉いのよ。わたしがやりたいことは、王さまの名前でなんだってやれるわ、当たり前よ」そのような思いなのです。神さまを知らないのです。人を殺しても、自分が正しいのだとすら思えるのです。恐ろしくないですか。

さて、神さまは何故、十戒を与えてくださったのでしょうか。それは、私たちと神さまがもっと仲良くなるためです。もっと近くで生きるためです。神さまは、「あなたは、わたしの子どもだよ。わたしはいつもあなたに聖書に書いてあるとおりに、約束を守り抜いているよ。愛し続けているからね。」と語られます。そんな神さまだから、僕たち私たちは「うれしいな。もったいないな。だったら、神さまの前で自分のままで大丈夫だ。嘘をついて、かっこうをつける必要なんかはないんだ」こう思えてくるのです。そして、「嘘をついて、人を傷つけたりしたくない！」と、心の底から思えるようになるのですね。

あなたは誰かに嘘を言われて、傷つけられたことがありますか。本当に悲しかったでしょう。怒れたでしょう？ 苦しかったはずです。だったら、友だちを同じような目にあわせたいですか。確かに、時には、「嘘には嘘でかえしてやるぞ。負けるもんか。」そんな風に思うこともあるかもしれません。でも、それをイエスさまの前でできますか。

イエスさまは、人々の嘘によって処刑されました。でも、イエスさまは聖書に書いてある通り、すべての人々に愛と真実を貫かれました。このイエスさまに救われ、呼

び集められたのが僕たち私たち、教会です。だから、私たちの中で特別に、嘘はダメなのです。噂話はダメです。悪口はダメです。教会のなかでそんなことをしたら、聖霊なる神さまは、居心地が悪くて、去って行かれるかもしれません！

僕たち私たちは、神さまに愛され、赦され、そのまま神の子です。神さまの前で嘘をつく必要なんか、まったくありません。だったら、お互いの間でも、それを実行しましょう。何度失敗しても、大丈夫。だって、イエスさまは、悔い改める人を、限りなく赦してくださるお方だからです。

(相馬伸郎)

《今週の暗唱聖句》

だから、偽りを捨て、それぞれ隣人に対して真実を語りなさい。

わたしたちは、互いに体の一部なのです。(エフェソの信徒への手紙4章25節)

11月7日 列王記上21章1～29節

【分級展開例A】

第九戒 偽証するな

歓迎を伝え、子どもの様子を知る

挨拶：声をかけ輪になって集まる。挨拶の歌（次頁参照）をみんなで歌う。

お祈り：短く感謝と分級のためのお祈りをする。

神さまは真実で聖いお方なので、嘘に対しては厳しく怒られ、真実を喜ばれます。

そして、悔い改める者には憐れみ深いお方です。大切なことは、本当の心です。わたしたちのことをぜんぶ知っていてくださる神さまに、何もかくさないでお祈りするよう導きます。

例：お話しを振り返りながら、簡単な質問をして対話する。

アハブ王さまは、ナボトのぶどう畑が欲しくて欲しくてたまりません。でも、ナボトは、神さまに従って渡そうとはしません。アハブ王さまは、ぶんぶん怒ってふて寝しています。妻のイゼベルは、そのぶどう畑を手に入れるためにどうしたら良いか考えました。王さまの名前を使い、ナボトが「神さまを呪った」というそを他の人に言わせ、ナボトを石で打ち殺させました。二人は、エリヤを通して、神さまの厳しい罰を言い渡されます。この時、アハブ王さまは、本当に悪いことをしたと気づいて、神さまにゆるしを願います。神さまはそれを見て、罰を先にのぼして下さいました。

- ・アハブ王様は、自分が欲しいと思った物が手に入らなくてふてくされてしまいましたね。—
—みんなも、何か気に入らなくて怒ったり、ふてくされることがありますか？—
(子どもたちが話すことを聞く)

- ・そこへ、妻のイゼベルがやってきて王様の不満な心を満たそうと嘘を考え出します。—
—みんなはうそをついたことある？どんな時にうそをつきますか？—

話を聞きながら、わたしたちがうそをつくときの理由に気付く。

ほめられたい。おこられたくない。はずかしい。与えられている物以上にほしい。お友だちや兄弟への嫉妬心など。時には、お父さんやお母さんや誰かの心を喜ばせたいときなど。

ひととおりに聞いた後、神さまはそういうわたしたちの心も知っておられるから、本当の心をお話し（お祈り）し、助けていただきましょう。そして、うそをついてしまったら、正直に話して神さまにごめんなさいのお祈りをしようねと導く。

神さまは、わたしたちが自分の本当の心をかくさないで、お祈りすることを待っていて下さいます。そして、聖霊を送ってわたしたちの心を聖くし、うそではなく、神さまの前に本当の言葉、真実で善い言葉を与えて下さいます。

終わりのお祈り 子どもたちが一人一人お祈りする。

挨拶の歌

マラカスなど、何かひとつ、音のなる楽器を用意し、ひとりずつ順番に楽器を渡して歌います。教師は、名前の子どもの前で、顔を見て歌います。名前を歌われる子どもが、楽器を持ち、タンタンの部分で音を鳴らす。

♪ お は よ う ○○ちゃん タンタン
(ラ-シ♭ド-レーラ レレレド n n) ※ここまでで8拍

だ い す き な ○ ○ ちゃん タンタン
(ソ-ラシ♭ド-ソ シ♭シ♭シ♭ラ n n) ※8拍

か み さ ま の 子 ○ ○ ちゃん タンタン
(ラ-シ♭ドドレーラ ファファファレ n n) ※8拍

○ ○ ちゃんに へ い わ タンタン
(ソ-ファ ミ-レー ド-シ♭-ファ) ※8拍

11月7日 列王記上21章1～29節

【分級展開例B】

第九戒 偽証するな

【導入として】

Q：うそをついたこと、ある？

うそをついてはいけませんって、きいたことあるよね？

それなのに、人間はどうしてうそをついてしまうんだろう？

どんなことでうそをついたかは、残念ながら自分では覚えているものだね。

A：……（ここは、子どもたちにとって次の話を聴きとる下地となる回想の時）

実際の内容を語る子どもがいれば、ていねいに聴き取っておく。

テーマがデリケートなので、必ずしもこの分級内で取り上げる必要はない、以下の本題のなかで活発な発言が出てくることも期待したい。

【今日の聖書箇所から】

- ①偽証（うそをつくこと）は「良いことか悪いことか」（道徳的な二元論）の話だと思われがち
- ②しかし、今日の聖書箇所を聴いてわかる通り、むしろそんな軽いことではない。
- ③むしろ、とても重い問題。偽証は、隣人のいのちにかかわる重い罪。直接手を下していなくても、いのちにまで及ぶほど影響が大きい。
- ④すぐさま死に至らなくても、偽証によって生じる身近な問題とは？
傷ついた名誉・心の傷、失った人間関係・学校・仕事・家庭・時間など、偽証によって隣人の生活や人生を変えてしまう可能性がある。
隣人のいのちに私たちは深く関わって生きているという事実。
- ⑤ことばの重さ 「舌は火」（ヤコブ3：6）
（第九戒は元来法廷（裁きの場）で証言することを念頭においていた）
- ⑥こういうふうにみていくと、他の戒めともかかわってくるのがわかるし、だからこそ、より重い罪になってしまうことがあるのだと気がつく。
- ⑦隣人について真実を語るように、自分自身についても真実を語ること。
隣人のことでうそをつかなければ、それだけでいいのではありません。
自分自身についてもありのままの自分を語るように求められています。
背伸びをする必要はないし、逆に自分をダメな人間だと語りすぎることも、やはりうそになります。
創造してくださった神さまへの信頼と恵みに対する感謝に関わることだから。
（このことは、次回の第十戒でもさらに聴いていくことにしましょう）
神さまは、隣人も自分も含めた、おつくりになったすべての人間のいのちを大切にすると、教えてくださっているのです。

11月7日 列王記上21章1～29節

【分級展開例C】

第九戒 偽証するな

「偽証」は法廷用語ですが、この戒めは公的な裁判における証言についてだけ規定しているわけではありません。私たちは、常に偽りを退け、真実を実現するように求められています。

私たちは日々の言葉と振る舞いと思ひにおいて神さまを表す者、「神さまに似る者」であることを求められています。なぜなら私たち人間は、そもそも「ご自分のかたちに似せて、神さまの子どもとして神さまと共に歩むように」（子どもと親のカテキズム問17）造られたからです。

神さまの性質は「存在、知恵、力、聖、義、善、真実において、無限、永遠、不変のかた」（ウェストミンスター小教理問答問4）です。私たちは前半の部分を継承（流通属性）します。ただし後半部分の三つの性質を人が持つことはできません（非流通属性）。神さまの真実を目標・お手本にして過ごすのですが、それは常に欠けがあることを理解することが必要です。神さまのかたちを目指し、自己検証し、悔い改め、赦しを自覚し、改めて神さまのかたちを目指すのです。

「うそ」はなぜいけないと思いますか。

「嘘も方便」と言いますが、うそを言っても良い場面があると思いますか。

「正義」や「真実」を主張し、相手を「論破」する人を見かけます。どう思いますか。

11月14日 マタイによる福音書6章25～34節(カテキズム問80、81)【解説と黙想】

第十戒 むさぼるな

・第十戒の解説

第十戒、「むさぼるな」は、心の状態についての戒めである。神さまの戒めに背く、どのような欲望や思いも、私たちの心の中に、起こることを禁じている。主イエスは、人の心から出て来るものが人を汚す、と言われ、「悪意、殺意、姦淫、みだらな行い、盗み、偽証、悪口など」(マタイ15:19)をあげておられる。これらの罪の根底にあるのが「むさぼり」の罪である。

そもそも「貪欲(=むさぼり)」は、偶像礼拝にほかならない(コロ3:5)。「むさぼり」の奥には、神さまのようになろうとする思いがあるのだ。

ウェストミンスター大教理問答は、第十戒の積極的義務は①自分自身の置かれている状態に満足すること、②自分の隣人に対して思いやりに満ちた心のあり方を示すこと、③思いと感情において、隣人の所有しているあらゆる良いものに心を配り、増進させることであると解説する。また、禁じていることは①自分自身の置かれている状態に満足しないこと、②隣人の持っている良いものを妬み、心憎く思うこと、③隣人の所有しているものにあらぬ思いや愛着を寄せることだと解説している。

・マタイ6:25～34

私たちは、自分で自分を守り支えようとして、不満と不安を抱えて思い悩む。しかし、マタイ6:25以下には「思い悩むな」と3回も命令されている。「思い悩むな」

と言われている第一は、命=寿命。命は神さまの領域の事柄で、委ねる領域である。鳥は働きもしないのに、神さまによって養われる。人間は鳥よりも価値あるものなので、当然養われると論されている。

衣服については、栄華を極めたソロモン王でさえ、神さまが野の花に装わせた美しさには及ばないと論される。あなたがたはなおさら美しく装ってくださると、論しておられる。

神さまは、私たちに食べ物や衣服が必要なことをご存じである。だから、何よりも、神さまを礼拝し、神の国と神の義を第一に求めなさい、と命じられている。主を信じて神の子どもとされた私たちを、神さまが養い、配慮してくださるのは当然だからなのだ。

私たちの持っているもの一金銭、土地、家、頭脳、才能等一は、全て神さまからの賜物である。人はそれぞれ神さまからの賜物を授かって生きている。私たちは、他人の賜物、才能であれ、生活状態であれ、隣人の幸せを妬んではならない。神さまは私たちに恵み、他の人と異なった賜物を沢山与えておられる。神さまが私たちに与えてくださった恵みや賜物を数えよう。自分に与えられた賜物に感謝し、その賜物を磨くこと。その賜物で神さまと人に仕えて生きて行くこと。そして、他の人の賜物を増やすように心向けることこそが、第十戒を守ることであり、神さまに喜ばれる生き方である。(袴田清子)

【参照聖句】 マタイによる福音書15章18～19節、コロサイの信徒への手紙3章5節、ヨハネの手紙一2章16節

【教理問答】 ウェストミンスター小教理問答問79～81、ウェストミンスター大教理問答問146～148、ハイデルベルグ信仰問答問113

11月14日 マタイによる福音書6章25～34節

【説教展開例】

第十戒 むさぼるな

◇..... 単元のねらい◇

私たちを満たしてくださる神さまに信頼を置き、神さまに喜ばれる心のあり方を学ぶ。

「思い悩むな、これらのものはみな加えて与えられる」

子どもと親のカテキズムの間80「第十戒は何ですか」の答えは『隣人の家を欲してはならない』です。そして、問81「第十戒で、神さまは私たちに何を求めておられますか」の答えはこうです。「神さまは、私たちにすべて必要なものを与えてくださいます。むさぼりは、この世のものを神さまとする偶像礼拝です。神さまは、私たちが、他の人のものをねたまず、自分の持ち物に感謝し、満足し、人の幸せを願うことを求めておられます」です。

十戒のこの最後の戒めは、私たちの心の状態についての戒めです。第一戒の「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」という戒めと深く関係している戒めです。

神さまは、真の神さま自身だけを礼拝するように言われています。しかし、むさぼりは、神さま以外の、この世のものを神さまとする偶像礼拝なのです。私たちは、心の中で神さま以外のものを神さまにするときに、第十戒を破る罪を犯すのです。

イエスさまも、人間の心の中から悪いものが出来ると言われました。意地悪な気持ち、あんな人いなくなればいいのにと、思ってしまうこと、体についての汚い思い、他の人のものを取りたいという思い、嘘なのに人のことを悪く言うこと、人の悪いところを言う悪口などです。それらは、人の

心から出て、人を汚す悪い思いであると、イエスさまは言われました。これらの悪い思いの根っこに、むさぼりがあるのです。

神さまは、私たちにすべての必要なものを与えてくださいます。それなのに、神さまの与えてくださるものでは、不十分であるかのように、感謝もせず、満足もせず、不満になり、「もっと欲しがる」ことは、神さまを悲しませる、神さまに対するむさぼりの罪です。

マタイによる福音書6章においてイエスさまは「自分の命のことで何を食べようか、何を飲もうかと思ひ悩むな」と言われました。

命は食べ物よりも大切です。命を守るために食べ物や飲み物があるのです。しかし、何を食べるか、何を飲むかが、命を守ることよりも大切になる。イエスさまは、それを止めなさいと言われるのです。

なぜなら、神さまが養ってくださるからです。空に羽ばたいている鳥を見ると、鳥は、人間のように種を蒔き、苗を育て、実が実ったら収穫する、というような仕事をしません。ただ、神さまが備えてくださっている食べ物を探して、食べるだけです。神さまが鳥を養っておられるのです。

人間は、神さまのかたちに似せて丁寧に造られ、神さまが命の息を吹き込まれたものです。鳥とは比較にならない、価値のあ

るものです。神さまが大切にされている人間のために、食べ物や飲み物を備えてくださらないはずがないのです。だから「**思い悩むな**」とイエスさまは、命令されているのです。また、人間は長生きしようと、努力します。しかし、命は根本的に神さまが与えられたもので、神さまの領域のことで、思い悩んでも、私たちには、寿命を延ばすことはできません。神さまが永遠の命そのものであられるのです。

また、衣服は体を守ったり温めたりするものです。しかし、私たちは自分を他の人よりもよく見せようとして、着る物に思い悩みます。イエスさまは、言われます。「野の花を注意深く見なさい。」働きもしないのに、花は細かいところまで、神さまに美しく造られていています。イスラエルの歴史の中で、最も栄え、華やかで、外国にまでその名声が届いていたソロモン王でさえ、神さまのお造りになった野の花の美しさほどではないと、イエスさまは言われました。神さまのなさり方の方が、比較にならないほど、素晴らしいのです。枯れたら直ぐに捨てられてしまう野の花でさえ、こんなに美しく装ってくださるのなら、人間はなおさらであると、言われます。

神さまは、私たちに食べ物、飲み物、衣服が必要なことをご存知です。だから、この世のものをむさぼるのではなく、「**何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる**」とイエスさまは教えておられます。神さまの国と神さまの義とは何でしょうか。それは、神さまご自身を愛し、神さまの全能のご支配を認め、神さまの喜ばれ

る正しいこと、愛や憐れみに満ちたあり方を求めることです。

父なる神さまは、御子をさえも惜しまずに、私たちの罪を赦すために、私たちに与えてくださいました。それ程までに、愛してくださっているのに、主イエスさまを信じ、神の子とされた私たちを、神さまが顧みてくださらないはずがあるでしょうか。神さまは必ず養ってくださり、必要なものを備えてくださるのです。

私たちの持っている全てのもの、お金、服、才能、家族、あらゆるものは神さまからの賜物です。**神さまは私たちが、他の人のものをねたまず、自分の持ち物に感謝し、満足し、人の幸せを願うことを求めておられます。**しかし、神さまの素晴らしさから目が離れると、私たちは、簡単に、不平や不満に心が満たされ、隣人の賜物、才能、生活状況や幸せをねたみ、心憎く思うのです。だから、**何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい**と、イエスさまは言われるのです。

神さまはちゃんと、一人一人に異なった豊かな賜物を与えてくださっています。私たちはそれらの恵みと賜物を数えましょう。私たちの隣人も神さまから賜物を与えられていますので、隣人に対する思いやりで、隣人の幸せを喜び、願うことが、神さまに栄光をささげることになります。私たちは、自分に与えられた賜物を知り、磨き、それをういて、神さまと人に仕えて生きて行けば良いのです。そのように召され、造られています。これが、第十の戒めが示す、私たちの生き方であり、神さまに喜ばれるあり方です。（袴田清子）

《今週の暗唱聖句》

食べる物と着る物があれば、わたしたちはそれで満足すべきです。（1テモテ6章8節）

11月14日 マタイによる福音書6章25～34節

【分級展開例A】

第十戒 むさぼるな

歓迎を伝え、子どもの様子を知る

挨拶：声をかけ輪になって集まる。挨拶の歌（11月7日展開例A参照）をみんなで歌う。

お祈り：短く感謝と分級のためのお祈りをする。

神さまは、私たちの必要をすべてご存知である。私たちが満たしてくださる神さまに信頼して、与えられているものを感謝し、満足することへと導く。また、人の幸せを願って祈ることへと導く。

例1：外に出て、少しお散歩しながら対話する。

鳥の音が聞こえるね。こんなところに、小さなお花がさいているね。など声かけする。

声かけをしながら、子ども達が話す言葉を聞く。応答しながら、神さまが、あの鳥たちも養ってくださり、こんな小さな野の花も育ててくださっていること、わたしたちの天の父なる神さまは、あの鳥よりもこの野の花よりもわたしたちのことを、もっとも大切に守ってくださっていること、そして、美しく飾ってくださることを伝える。

何か今、あれ欲しいな、これ欲しいなと思っているものがありますか？ と聞いてみる。

子どもの答えを聞きながら、気持ちを受けとめた上で、わたしたちは、今無い物を欲しがりやすいこと。（もっともっとと欲しくなってしまう）でも、今日お話しで聞いたように、神さまは、わたしたちに必要なことぜんぶ知っていてくださって、わたしたちを満たしてくださるから、まず今与えられているものを感謝しましょう。そして、困っている他の人たちの幸せを願ってお祈りしましょうと勧める。

終わりのお祈り：神さまから与えられているものを一人一人思い出して感謝のお祈りする。

「天のお父様、〇〇をありがとうございます。たくさん与えられているのに、

もっともっとほしがってごめんなさい。いつも、神さまがわたしにくださるものに感謝できますように。〇〇で困っている人がいます。助けてください。

イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン」

☆第十戒は、すべての戒めの根底にある事柄を言い表しているとあります。

（神さまと共に歩む道『子どもと親のカテキズム』解説216頁）

☆大切な戒めを幼い子らと共に覚え、

今すでに豊かに与えてくださる神さまの恵みと祝福への感謝に導かれますように。

（参考資料：教会学校教案誌 No.18 9月11日「第十戒 むさぼりの禁止」）

11月14日 マタイによる福音書6章25～34節

【分級展開例B】

第十戒 むさぼるな

☆子どもたちの本音をきく～これまでの教会学校での対話から～

- ・第八戒と似てるんじゃない？
- ・「盗む」と「むさぼる」はどう違うの？
- ・盗んでないし、そんなに重い罪にはならないよね？
- ・心の中で思っているだけなら、悪くないんじゃない？
- ・クラスで自分が出来ないことがなんでもできる子がいてすごく腹が立つ……

貪るとは、むやみに欲しがること、そのような欲求を心にもつことです。だから実際に盗むという行為を実行していなくても、その心の動きだけでもうすでに罪を犯したことと同じ、神さまは心の奥までご存じなのです。「何を守るよりも、自分の心を守れ。そこに命の源がある」(箴言4：23)

☆第九戒と第十戒とのかかわり

貪欲はなぜ起きるのか。これは、ほんとうにとっても深刻な苦しい問題ですね。

それは、自分は満たされていない、愛されていないという、不安や不満からはじまるのです。(誤った自己認識)

先週聴いた第九戒の最後で、隣人のことであそをついたりしないだけでなく、自分のことも真実に語ることも同じように大切なことだとききましたね。意外でしたか？

自分が神さまにどのように創られたかを正確に話すということだから、でしたね。

それは、神さまが創ってくださったとおりの自分を感謝してうけとり、喜んで生きることにつながっているからです。それでも、だれでも様々に願いがあるかもしれません、それは神さまにお祈りしていきましょう。信頼して祈るのです。

本当に必要なものは、神さまがお与えになります。

神さまは私たちにこのような正しい神への感謝と信頼と願いをもつことをお望みです。

本当は、神の独り子イエスさまの十字架の死によって罪を赦され永遠の命を約束していただいているほどに、私たちは神さまの愛で満たされている存在だからです。

☆貪欲は偶像礼拝(コロサイ3：5)

貪欲とは、まるでそれがなくて生きていけないかのような激しい思いです。

人間にとって本当になくは生きていけないもの、それは私たちの命を創り、守り、導いてくださるお方との関係だけです。その意味で、第十戒を学んだときにあらためて第一戒の大切さを深く思い知ることができるようになるのです。

11月14日 マタイによる福音書6章25～34節

【分級展開例C】

第十戒 むさぼるな

「むさぼる」とは、「欲深く望む。飽くことなくほしがる」と言った意味です。第五戒から第九戒が直接的には具体的な行動を禁じているのに対し、第十戒は私たちの思いや心の動きを戒めます。この戒めがあるからこそ、他の戒めも単に表面に見えている行動だけでなく、心の動きについても規定していることがわかります。むしろ、私たちの行動は私たちの心の動きの現れですから、「この第十戒は、すべての戒めの根底にある事柄を言い表しています」（『神さまと共に歩む道』p.216参照）と言われるのです。

また、子どもと親のカテキズムは、「むさぼりは、この世のものを神さまとする偶像礼拝です」と説明します。十戒の個々の戒めは、その根本において私たちに、自分にとって何が必要であるか、何を頼りとするかが問いかけています。

第十戒の文章は、私たちが貪ってはならないものの例を具体的に挙げています。どんなものが挙げられているか確かめ（出エジプト20：17、申命記5：21参照）、私たちが隣人とどんな関係を築くべきなのか考えてみましょう。

この戒めは「自分の持ち物に感謝し、満足」（子どもと親のカテキズム問81参照）することを求めています。一方、第八戒「盗んではならない」という戒めについて、ウェストミンスター小教理問答は「私たち自身と他人との富や生活状態を正当に確保し、向上させること」（ウ小教理問74参照）と説明します。他人と自分を比べ、財産を増やそうと思うことは良いことでしょうか。

十戒の戒めを改めて確認して、十戒が全体として私たちにどのような生活を求めているのか考えてみましょう。

11月21日 ルカによる福音書18章18節～30節（カテキズム問82）【解説と黙想】

憐れみを求めさせる戒め

子どもと親のカテキズム問82は、十戒は完全にそれを守ることのできない私たちの罪の現実を示すとともに、イエス・キリストにより頼み、罪の赦しときよめを求める信仰へと導くことを教えています。

問82「あなたは、このような神さまの戒めを完全に守れますか」とあり、答「いいえ、それどころか、毎日思いと言葉と行いによって神さまの戒めを破っています」と書かれています。私たちはこれまで教えられてきた十戒を完全に守り、神が求めておられる義の基準を満たすことができないことが教えられています。

アダムの墮落以来、すべての人は神のみ前に罪ある者であり、その罪の影響は私たちの存在全体にまで及んでいます。つまり人間の「全的墮落」です。それゆえパウロが語ったように、「律法を行うことによって、誰一人神の前に義と認められない」（ロマ3：10）のです。

また「私たちはイエスさまによって罪が赦されていますが、今も罪を犯してしまいます」ここにはすでにイエス・キリストによって罪赦された者にもかかわらず、いまだに罪を犯す私たちの現実が教えられています。

そう言われると、どうせ自分は十戒を守れるはずがないと開き直ってしまいたくなります。子どもたちは、そう受け止めてしまうかもしれないので注意したいと思いま

す。忘れてはならないのは、十戒が鏡のような存在だということです。自分の姿を見た時に、「ああ～だめだ、自分の力ではどうにもならない」という思いが与えられますけれども、その思い自体が大切なのです。

そこではじめて積極的に「いよいよイエスさまにより頼み、罪の赦しときよめを求めます」という神の恵みに向かう思いが与えられます。罪がわかるからこそ、イエス・キリストによって与えられる神の恵みがいよいよ鮮やかに示され、求めるものとなります。

神の恵みへの理解は、自分の罪に対する理解と密接不可分です。自分の罪の理解がぼやけてくると、神の恵みもわからなくなってしてしまうものです。そのためにも神の示された愛の基準である十戒を示されることによって、自分の罪深さを思い知らされ、絶えず碎かれる経験が必要です。碎かれるからこそ、神から注がれる憐れみの大きさを実感し、イエス・キリストが与えてくださる罪の赦しときよめを、いよいよ熱心に求めるようになるからです。

十戒は私たちの罪に気付かせると共に、イエス・キリストの恵みがいかに貴いかを教えてくれます。罪と向き合うことは辛いことです。しかしその先にキリストの恵みを味わう喜びが待っているのです。

（國安光）

《参照聖句》 ローマの信徒への手紙7章14～25節、ペテロの手紙二1章5～10節
 《教理問答》 ウェストミンスター小教理問答問82、ウェストミンスター大教理問答問149、ハイデルベルク信仰問答問114、115

11月21日 ルカによる福音書18章18節～30節

【説教展開例】

憐れみを求めさせる戒め

◇..... 単元のねらい◇

神さまは十戒を与えてくださった。しかし十戒を私たちは完全に守ることはできない。子どもたちが十戒によって罪を示され、そこからいよいよ神の憐れみに気づかされ、主イエスが与えてくださる罪のゆるしときよめにいよいよ信頼して歩むことができるように助けること。

「神さまの憐れみに支えられる歩み」

本当に大切なものとは何だろう

皆さんは、カタログを見たことがありますか？ 自分の大好きなものが載っているカタログを見ると楽しくなってくると思います。こんなに素敵なものがある、こんなに珍しいものがある、ワクワクします。

大好きなものが載っているカタログを見て、楽しむことは別に悪いことではないと思います。でもこれが欲しい、絶対これがないと嫌だ、簡単に決めてしまうことはないですか？ そうなったら、もしそれが手に入らなければつまらないなあと思うことがあるのではないのでしょうか？

これを欲しい、と思うことはきっと誰もあると思います。でも何かとても欲しいものがあつたとして、それが何よりも大切なものようになってしまうことがあるものです。ある時には、気に入ったものがあつて、それがこの世で一番大切なものと考えてしまうこともあるかもしれません。だとしたらまず一番に私たちの人生に本当に大切なこととは何かを考えておく必要があります。

本当に大切なものを求めて

今日のお話には、一人のお金持ちが登場

します。彼はまわりの人からあの人は立派な人だ！ と言われていた人といいます。お金持ちでしたから、自分のお気に入りのものに囲まれていましたし、立派に生きている人だったので、きっとまわりの人からは何も困ったことはないだろうと思われていたはずでした。

でもそうではありませんでした。イエスさまにこう質問しました。「善い先生、何をすれば永遠の命を受け継ぐことができるのでしょうか？」(18節) お金持ちだし、自分が欲しいものは簡単に手に入れることができたけれども、永遠の命だけは手に入れることができなかつたんです。ですから心にむなしい思いを抱えていたのだと思います。

本当に大切なものが見えない人

そこでイエスさまは言いました。「なぜ、わたしを『善い』と言うのか。神おひとりのほかに、善い者は誰もいない。」(19節) イエスさまは、大切なことに気づかせるために、善い方は神さまおひとりのほかにいないのだ、とおっしゃいました。イエスさまよりも神さまが善い、そういうことをここで言いたいのではなくて、神さまこそ

永遠の命をお与えになることのできる善いお方なのだと教えてくださったのです。

さらにイエスさまは、「『姦淫するな、殺すな、盗むな、偽証するな、父母を敬え』という掟をあなたは知っているはずだ」(20節)とおっしゃいます。すると彼は、「そういうことはみな、子供の時から守ってきました」(21)と答えます。彼は人からほめられるくらい聖書の教えを守って生きているという誇りがありましたので自信満々にそう答えたのです。

ところがこれを聞いたイエスさまは、「あなたに欠けているものがまだ一つある。持っている物をすべて売り払い、貧しい人々に分けてやりなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい」(22節)とおっしゃいました。イエスさまはここで永遠の命を得る方法をはっきりと指し示されました。全てを売って、困っている人にそれを差し出して、イエスさまに従うことです。

彼は、これを聞いてとても悲しみました。なぜならお金や手に入れた物こそ自分の人生にとって一番大切なものとなってしまうから。それを手放してまで誰かを愛することはできなかったですし、イエスさまに従うこともできなかったからです。お金を人生の中で第一としたままでは、永遠の命に至ることはできないことがはっきりと示されたのです。

皆さんはこの人のことをどう思うでしょうか？ だめな人だな、お金持ちはよくないなと思うかもしれませんが。勘違いしてはならないのは、お金持ちが悪いというお話ではありません。このお話は何が人生で一番大切なものかというテーマでのお話です。何が人生にとって一番大切かというこ

とを考えつつこの人のことを思うなら、自分もどこかこの人と似たところがあることに気づくのではないかと思います。

神さま以外のものが一番になってしまつて、これがないと人生はつまらない、これだけは絶対に捨てられない、そういうことはないでしょうか？ そういう思いがあるとするなら、私たちもこの人と重なるところがあるのだと思います。

本当に大切なものは神さまの憐れみ

だとしたら私たちはこの人のようにただ悲しむしかないのでしょうか？ 永遠の命を得ることができないのでしょうか？ そんなことはありません。神さまは私たちに永遠の命を得る道をちゃんと与えてくださっています。ここで子どもと親のカテキズム問82を開いてみましょう。

問82 あなたは、このような神さまの戒めを完全に守れますか。

答 いいえ、それどころか、毎日思いと言葉と行いによって神さまの戒めを破っています。私たちはイエスさまによって罪が赦されていますが、今も罪を犯してしまいます。ですから、いよいよイエスさまにより頼み、罪の赦しときよめを求めます。

ここには私たちは十戒を完全に守ることはできない、とはっきり言われています。十戒には、神さまが望まれる歩みが記されています。十戒に書かれていることを一言でいうと、神さまを愛し、人を愛することです。その十戒を私たちは完全に守れないんです。十戒に示されることを実際にやってみようと思うと、何度も失敗をしてしま

うのだと思います。ああ～やっぱりダメだ、
こういう思いがやってきます。

だったらもう自分は永遠の命を得ることはできないに決まっている、思いたくなることもあるかもしれません。でもあきらめる必要はありません。大切なのは、そんな自分にもかかわらず神さまは大切な存在として見てくださっているし、罪がわかるからこそ私たちはイエスさまにより頼む思いが強く、確かになっていくということです。

十戒は私たちの姿を映す鏡のような面もあるかもしれません。鏡に映る自分の姿に、ああだめだ、思い知らされるんですけど、でもそこでそんな自分にもかかわらず愛してくださっている神さまの憐れみに気付かされます。また罪がわかるからこそ、

罪を赦し、きよめ、永遠の命へと至らせてくださるイエスさまを本当に求める心が与えられていきます。

だとしたら、人生において一番大切なのは神さまの憐れみです。神さまの憐れみはこの世のお金やものよりも、はるかに貴重なものです。神さまの憐れみがなければ、私たちはどんなにお金があっても、好きなものに囲まれていてもむなしいです。永遠の命を得ることはできないです。

イエスさまは、神さまの憐れみはもうあなたに注がれている。神さまの憐れみは、十字架にかかってくださったイエスさまを通して私たちに届きます。罪を赦して、きよめてくださるイエスさまにいよいよ信頼して歩みましょう。 (國安光)

《今週の暗唱聖句》

わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。このように、わたし自身は心では神の律法に仕えています、肉では罪の法則に仕えています。

(ローマの信徒への手紙 7章 25節)

11月21日 ルカによる福音書18章18～30節

【分級展開例A】

憐れみを求めさせる戒め

歓迎を伝え、子どもの様子を知る

挨拶：声をかけ輪になって集まる。挨拶の歌（11月7日展開例A参照）をみんなで歌う。

お祈り：短く感謝と分級のためのお祈りをする。

十戒の戒めは、学べば学ぶほどに自分の罪深さに気付かされるものです。しかし、イエスさまの「人間にはできないことも、神にはできる」という約束の言葉に信頼して、いよいよイエスさまの赦しの大きさ、深い憐れみを覚え、イエスさまに寄り頼んで歩むよう導く。

例：少しの質問を用意し、対話を通して自分の罪深さとイエスさまの大きな愛を覚える。
今日まで、一つずつ丁寧に十戒を学んできました。みんなと一緒に学べてとても嬉しいです。

- ・十戒の中で一番覚えている戒めは何ですか？

子どもの答えを聞き、「そう、そうなんだね。」と受けとめる。

- ・では、十戒の中で守りたいと思ってもなかなか守るのが難しいと思う戒めはありますか？

子どもの答えを聞く。「そう、そうなんだね。」と受けとめる。

十戒を学べば学ぶほど、私たちは完全に十戒を守ることが出来ないということも分かってきました。十戒を完全に守ることが出来ない私たち、十戒を完全に守ることが出来ない自分、そのことだけを見つめるととても悲しくなってしまうですね。だから、そのようなときこそ、イエスさまに目を向けましょう。イエスさまだけが、この戒めを完全に守り抜いてくださり、罪に打ち勝って勝利してくださいました。そのイエスさまが、わたしたちの罪のために十字架にかかって死んでくださったのです。このイエスさまに結び合わされて歩むことがわたしたちの一番の幸せです。

終わりのお祈り

天のお父様、十戒を守りたいと思っても、守れないことがたくさんあります。赦してください。憐れんでください。イエスさまに結ばれて、十戒の言葉を大切に、守るようにいつも努力出来ますよう助けてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。

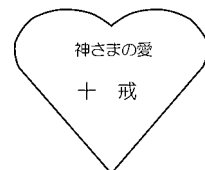
工作

準備：赤かピンク色の画用紙／ペン／穴あけパンチ／リボン／シールなど飾るもの画用紙に、大きなハートを書く。

ペンで、「かみさまのあい” ”十戒”と書く。

首にかけられるように、ハートの紙に穴をあけ、リボンを通す。

首にかける。



11月21日 ルカによる福音書18章18～30節

【分級展開例B】

憐みを求めさせる戒め

☆十戒を実際に生活に重ね合わせてふりかえる

先週までのところでひととおり十戒を学びました

十戒を守れていると思う？

この戒だけでも守れているという自信のある人いるかな？

(例) わたしは十戒を初めてきいた小学生のころ、すごくはりきっていたことを覚えていています。

「これさえ守れば、ほめてもらえるんだ、いいときいた！」と思ったのです。

しばらくは「今日はだいじょうぶだった、合格だ！」などと一人で勝手に評価し喜んだりしていました。(父がその様子を笑ってみていました)

☆罪の気づき

しかし、もう少し大きくなったころ、自分が神さまを忘れてしまう瞬間があることに気がついたのです。(父が笑っていたのはいつかそうなることがわかっていたから)

ということは、十戒を学んだのに、守り切れない、いつも破っている、ということですね。そのことに気がついてしまったのです。

十戒を知ってから神さまがとても近く感じられたことがうれしかった分だけ、なんだかすごくがっかりしたこともいまでも覚えています。

☆罪を自覚することとの葛藤

十戒を知ることは、神さまのお望みになっていることを知ることでありますから、知らなかったときのようにごまかせなくなります。

神さまに従う道をはっきり示される喜びや安心とともに、自分の罪がくっきりとみえてしまうのが十戒でもあります。

無理にがんばるととても苦しいし、そしてがんばったって完全には守れないのだとわかると、十戒なんて知らなければよかった、という気持ちも出てきます。

今日の聖書箇所に出てきた金持ちの議員は、私たちそのものなのですね。

☆罪からの解放とそのための唯一の希望 ～それが福音～

そもそも私たちが自分のちからで十戒を守れるはずはありません。私たちは罪ある人間なので。ただ一つ私たちに与えられている希望、それが主イエスの贖いによる罪の赦しです。ですから日々罪を犯す私たちは、主イエスに罪を告白し悔い改めの祈りをささげましょう。主イエスの執り成しによって、私たちがいのちの道に導く約束をしてくださった神さまに誠実に従っていく者にしていきたいです。

11月21日 ルカによる福音書18章18～30節

【分級展開例C】

憐れみを求めさせる戒め

律法には三つの用法、働きがあると説明されます。第一は信仰者に限らず、一般的社会秩序を維持するための市民的用法、第二は私たちの罪を指摘し、贖い主に導く教育的用法、そして第三は救われた者の生き方を指し示す倫理的用法です。今日の間82では、教育的用法について、次週の間83では倫理的用法について説明しています。

教育的用法は、罪を犯していることの指摘と赦しときよめを求めるように促すという二つの面があります。この二つは表裏一体です。赦しがない罪の指摘は絶望しか生みません。同時に罪の指摘が厳格であるからこそ赦しの欲求と喜びは鮮やかになるのです。

対象となる方の状況によって、どの点を強調すべきかは変わってきます。バランス良く、かつ相手が慰めと喜びに導かれるように配慮しましょう。

十戒が何を勧めているか改めて確認してみましょう。十戒の要約（子どもと親のカテキズム問59）との関係でその意味を確かめてみましょう。

私たち自身が普段の生活の中で、「この戒めは守れていない」と感じるのはどんなところでしょう。

今日の聖書箇所（ルカ18：18～30）に出てきた「ある議員」はイエスさまが指摘するような「掟」（＝十戒）を「子供の時から守ってきました（21節）」と言います。その彼が、どうして「非常に悲しんだ」のでしょうか。彼はどうすれば良いと思いますか。

（聖書では、財産はすべて悪なのではなく、むしろ神さまの恵みと考えられるものであることに注意しましょう）

11月28日 フィリピの信徒への手紙3章12～16節（カテキズム問83）【解説と黙想】

神の愛の戒めを喜ぶ

・「十戒」の目的＝「救いの完成」への基準

「十戒」は、私たちに「罪を気づかせるためだけにある」のではなく、「いよいよイエスさまにより頼み、罪の赦しときよめを求め」させるもの。さらに、「十戒」は、私たちに「救いの完成」に向かう道において、これを喜ぶように導く。それは、「まことの神さまを知り、神の栄光をあらわし、神さまを喜び、神さまと人に仕えて歩むこと」（子どもと親のカテキズム問2）。

「どのような財宝よりも あなたの定めに従う道を喜びとしますように」（詩編119:14）と祈り求められるように、私たちは、主の定めに従う道（「十戒」）を「喜び」とすることを祈ることへと導かれている。

しかし、使徒パウロ自身かつてそうであったように、「十戒」のみならず、旧約聖書における諸規定を解釈し、それを守ること（「律法の義」（フィリピ3:6））においてたとえ非の打ちどころのない者であったとしても、キリストを知らなければむなし。

パウロは、「わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています」と言い、「わたしには、律法から生じる自分の義ではなく、キリストへの信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義があります」と告白した（フィリピ3:8, 9）。それは、パウロにとって、律法を守ることそれ自体の基準が、完全に、自己正当化から、

神の義を満たされたキリストに移されたことを意味する。「自分がキリスト・イエスに捕らえられている」（フィリピ3:12）とは、この御方のうちに、律法の完全な姿が満ちていることを信じていることを同時に言い表している。

つまり、パウロにとって、この地上において「完全な者」とは、キリストの内にある完全に向かう「未完の者」という意味であって、「到達したところ（基準）」をはかるとき、皆が、欠けを負っているのである。

・弱き者の弱さを担いつつ

「互いに重荷を担いなさい。そのようにしてこそ、キリストの律法を全うすることになる」（ガラテヤ6:10、ローマ15:1参照）と命じられるとおりに、パウロの律法理解は、競争原理のように、事の優劣を競うものではなく、むしろ、キリストの愛において、皆共に、良き実りを結んでいくこと。主は、御自身が「来られるのをひたすら待ち望む人には、だれにでも、「義の栄冠」を授けてくださるのである（テモテ二4:8）。

今日、人の規準や価値観が台頭する世にあって、私たちのために、弱き者、貧しい者、無力な者の一人となられた、主イエスの十字架を仰ぎ望みつつ、命の福音を子どもたちの心に寄り添って伝えたい。

（宮武輝彦）

《参照聖句》 ローマの信徒への手紙15章1～6節、コリントの信徒への手紙一9章19～27節

《教理問答》 子どもと親のカテキズム問39～43、56～61、82、ウェストミンスター小教理問答問87、ハイデルベルク信仰問答問45～50、114、115、ウェストミンスター信仰告白16章2

11月28日 フィリピの信徒への手紙3章12節～16節

【説教展開例】

神の愛の戒めを喜ぶ

◇..... 単元のねらい◇

- 1 「十戒」は、私たちに「罪を気づかせるためだけにある」のではなく、「いよいよイエスさまにより頼み、罪の赦しときよめを求め」させるもの。
- 2 「十戒」は、私たちに「救いの完成」に向かう道において、これを喜ぶように導くもの。
- 3 このことを自覚するためには、イエスさまの十字架と復活の中に、自分のすべてを明け渡さなければならない。このとき、私たちは、イエスさまを求め、信じ、待ち望む、救いの道へ導かれる。
- 4 この道は、「救いの完成」にむかう「完全な者」としての「未完の道」であることを知る。

「イエスさまを信じ、求めつつ、共に歩む」

今日からアドベント（待降節）に入ります。来週からは、イエスさまがお生まれになったときのことを学びたいと思います。

でも、一つだけ、イエスさまがお生まれになったときのことを思い出したいのですが、それは、ヨハネによる福音書1章16、17節の御言葉です。

「わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けた。律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである」。

みなさんは、これまで、「十戒」を学んできてどんなことを思いましたか。先週学んだように、「十戒」は、私たちに、神さまが悲しまれる罪を気づかせるものです。けれども、そのためだけに「十戒」があるのではないことを、今日学びたいと思います。

それは、「律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れた」との御言葉に心を留めると

き、よくわかります。それは、「十戒」を正しく守るためには、「恵みと真理」を知ることが大切だからです。

それでは、「恵みと真理」とは何でしょうか。

それは、今日の子どもと親のカテキズムで答えたように、神さまのことをまるで子どものことを本当に大切にしているお父さんのように、愛に溢れた、恵み深い方として知ることです。

「真理」とは、もともと「隠されていないこと」という意味があります。つまり、イエスさまが現れたことによって、神さまは、私たちに、神さまが恵み深く、愛に満ちておられるお方であるということ、隠すことなく、明らかにしてくださったということです。

ですから、私たちが、何が正しいことで、神さまに喜ばれることか、を求めるとき、イエスさまに教えていただくことが、一番大切なのです。

イエスさまがどうして、この世のただ中

にお生まれになって、苦しみを受けられ、十字架の上で死んでくださり、三日目に復活され、天に上げられたのか、を学ぶことをとおして、私たちは、神さまが、イエスさまによって明らかにしてくださった、「恵みと真理」を知るのです。

それは、「十戒」を神さまから直接いただいたモーセにまさって、イエスさまが本当の預言者、祭司、王として来られた目的です。

イエスさまに、「十戒」の心を教えていただくとき、私たちは、「罪」がただ「悪いこと」ではなくて、イエスさまが、私たちの身代わりとなって、十字架に死んでくだされなければならなかったほどに、神さまを悲しませるものであることを認めるのです。

ところで、みなさんは、パウロさんという人を知っていますか。じつは、このパウロさんは、青年のころ、イエスさまを信じている人たちを殺していました。それは、十字架につけられて殺されたイエスが、神さまの約束された救い主などということは絶対にない。それどころか、イエスは、ただの人間なのに、神さまの子とって、自分を神さまにした、ひどい罪を犯した犯罪人だ、と信じていたからでした。

ですから、十字架にイエスさまをつけて殺すことをねらって、実行した、人びとに「十戒」を教える立場にありながら、イエスさまを信じる人を殺すことが、自分たちが「十戒」を正しく守るためにも、絶対に正しいと思っていたのです。

けれども、決定的なできごとが起こりました。それが、ダマスコに行く途中で、十字架につけて殺したはずの、イエスが、天からの光がパウロさんを照らしたのです。

「サウル（青年のころの名前）、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」。パウロさんは、たずねました。

「主よ、あなたはどなたですか」すると答えがありました。「わたしは、あなたが迫害しているイエスです。」

このとき、パウロさんは、自分が今まで信じていたことが全部くずれたばかりでなく、イエスさまが、本当に、神さまの子であって、神さまの約束された救い主であることがわかったのです。

そして、パウロさんは、イエスさまによってすっかり変えられて、今度は、逆に、自分の命が、イエスさまを殺した人たちからねらわれながらも、人びとに、イエスさまが、本当の救い主であることを伝えていく人になりました。

フィリピの信徒への手紙は、パウロさんが、最初にヨーロッパに入ったときに、イエスさまのことを伝えたときに、パウロさんの伝えた福音を信じる人びとが起こされてできた、フィリピ教会に、それから十年ぐらいしてから、牢屋から書かれた手紙です。

けれども、パウロさんは、自分が牢屋につながれて苦しいことよりも、それをイエスさまの恵みと信じて、手紙を書きました。

そして、自分がイエスさまを信じるまでは、「十戒」に書かれていることを全部守っていたつもりだったけれども、それは、イエスさまのうちに本当の愛からすれば、まったく罪深いものであったことを心から恥じました。

「自分は今まで、『十戒』に従うのではなくて、『十戒』を好き勝手にあしらって、自分のことを正しくするために用いていました。でも、イエスさまを知ってからは、

本当の愛も、本当の正しさも、このお方から全部流れ出てくる、なぐさめと希望に満ちたものであることがわかりました。わたしは、イエスさまが、十字架の死から復活された、その救いの命を知るばかりでなく、十字架の死に至る苦しみにあずかって、その死の姿をいつも心に覚えながら、なんとかして、自分も、死者から復活に達したいと願っています」と、フィリピの教会に書き送ったのです。

ですから、パウロさんにとって、一番の目標は、イエスさまのようになることでした。それは人びとの本当の痛み、悲しみ、苦しみを、自分の痛み、悲しみ、苦しみにされた、イエスさまのように生きることで

す。

それは、まっしぐらに、イエスさまを求め、目指すものですが、けっして、罪と弱さを負う、地上では、完成しないものです。また、イエスさまにつながっている人たちがみんな、に助け合っていく、「救いの道」です。

イエスさまは、この「救いの道」の先に、神さまのごほうびを用意しています、と約束してくださいました。それは、この道を最後まで走り抜いた人に与えられる栄光の冠です。その日（天に召される日、イエスさまの来られる日）まで、イエスさまを求め、信じ、待ち望みつつ、いっしょに歩みましょう。 (宮武輝彦)

《今週の暗唱聖句》

わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです。(フィリピの信徒への手紙3章12節)

11月28日 フィリピの信徒への手紙3章12～16節

【分級展開例A】

神の愛の戒めを喜ぶ

歓迎を伝え、子どもの様子を知る

挨拶：声をかけ輪になって集まる。挨拶の歌（11月7日展開例A参照）をみんなで歌う。

お祈り：短く感謝と分級のためのお祈りをする。

救いの完成という大きな目標に向かって、十戒の言葉を父なる神さまの愛の心と受けとめ神さまの子ども（光の子）として、聖霊の助けを祈り求めつつ、喜んで「十戒」を守って共に歩むよう導く。

例1：プレゼント（小さなおやつやメダル、十戒を記した素敵なカードなど）を用意して、目標を目指して走る遊びをする。ゴールに来たら、プレゼントを渡し言葉かけをする。（障害物競争のように、何か用意しても良いし、途中地点で十戒の問題を出すなどしても良い）

十戒の問題例：1～10の数字だけ書いた大きな紙（A）と十戒を一つずつ書いた紙（B）を用意。走ってくる途中に、（B）の紙を取って（A）にはる。

- ・今日は、みんなでかけっこをするよ。ここが、ゴールです。
（ゴールの目印として、救いの完成というボードを持っても良い）
- ・ここに、みんなに一つずつプレゼントがあります。
（親たちがいれば、親にプレゼントを持たせてゴールに立っていただくと良い）
- ・よーい、どん！で走ってきてね。「よーい、どん！」
ゴールまで走らせ、プレゼントを渡す。
- ・神さまは、いつもわたしたちを見てくださいます。神さまを愛し、家族やお友だちを愛して、十戒を守って生きようとするわたしたちの一生懸命な走りを見てくださいます。そして、罪をおかすことのない完全に聖い神さまの子としてわたしたちの救いを完成してくださいます。走る先には、賞を用意して神さまが待っていて下さいます。
- ・聖霊なる神さまが、いつも弱いわたしたちを助けてくださいます。イエスさまを通して、聖霊なる神さまの助けをいつもお祈りしましょう。そして、喜んで「十戒」を守って歩みましょう。

終わりのお祈り

天のお父様、十戒の教えを一つ一つ教えて下さってありがとうございます。神さまの愛のこころは、わたしたちの本当のお父さんの愛です。十戒の教えをこれからも忘れないで、大切に守って歩めますように聖霊なる神さま、いつもわたしたちの心を満たしてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。

例2：アドベント第1週目なので、分級用のアドベントキャンドルをみんなで一緒に作り、アドベントの時を覚えクリスマスの時を待ち望むよう導く。
家に持ち帰れるよう、それぞれの分も作っても良い。

材料／ろうソク4本、入れ物、オアシス(入れ物に合わせてカット)ドライフラワーや造花
※入れ物は、牛乳パックをカットして、折り紙などを貼り作ることも出来る。
※ろうソクは、入れ物に合った大きさのものを選ぶ。

- ①入れ物にオアシスを入れ、ろうソク（底に爪楊枝をさしておくで固定しやすい）をたてる。
- ②残ったオアシスの部分にドライフラワーや造花をさして飾りつけをする。
- ③1本のろうソクに火を灯し、讃美歌21の242番「主を待ち望むアドヴェント」1番をみんなで讃美する。（1週ごとに、2番まで3番までと加えて讃美する）

11月28日 フィリピの信徒への手紙3章12～16節

【分級展開例B】

神の愛の戒めを喜ぶ

今日で十戒の学びがひととおり終わります。

[学びの記念] ～十戒の花束をつくりましょう～

用意するもの：大きめのペーパー（花束を包む）

厚手の紙（花の茎）

色とりどりの紙（花）

リボン（花束を結ぶもの）

コップ（花瓶）

のり・セロハンテープ・ペンなど

作り方：①茎を作る 厚手の紙 幅3cm×長さ15cm 10枚

上3cmのところから第○戒を書き、丸めて筒状にする

②花を作る 好きな色の紙で好きな形の花を作る 10枚

③①の上3cmのところ②を貼って花が完成

④大きめのペーパーに間60の前書きを横に長く書く（包んだ時読めるように）

⑤③を④で包む

⑥花瓶のコップに差して出来上がり

10の戒め（花）はバラバラなものではありません。

第一戒が第十戒と深く関わっていたように、それが一つのもの（花束）として私たちに与えられています。

しかもそれは厳しいだけでなく、私たちの命を守り、生かそうとしてくださる神さまの大きな愛に包まれて、差し出されたものです。

今日のこの主日から待降節にはいります。

クリスマスにむけて、今日作った花束を家族やお友だちに贈ってもいいですね。

神さまはぼくたちの命をとっても大切に思ってくださいる方です、と紹介してクリスマスに教会へお誘いしてみてもどうでしょうか。

「十戒をいただいたのに神さまに従いきれずいつもくりかえし罪を犯してしまう私たち。

それなのに、神さまはあきらめずに、ご自分のたった独り子の主イエスさまを私たちの身代わりに十字架にかけてまで、私たちを罪の滅びから救い、さらに永遠のいのちを約束してくださいました。神さまはそういう大きな愛をもった方です」と。

神さまの大きな愛に感謝し、どんなときにも神さまを信頼して私たちの救い主イエスさまのご降誕とその生涯も想いつつ、待降節を祈りながら過ごしていきましょう。

11月28日 フィリピの信徒への手紙3章12～16節

【分級展開例C】

神の愛の戒めを喜ぶ

先週の分級で見ましたように、この問答は十戒の第三用法、倫理的用法を指摘しています。

律法の第二用法は、律法の厳しさが私たちを救いの恵みに導くことを指摘します。一方、第三用法は、律法が救われた私たちに救いの完成へと歩む生き方を指し示すことを教えます。

子どもと親のカテキズムは、「私たちにとって一番大切なこと」について「神さまの子どもとして、神さまと共に歩むことです」（問1）と説明します。つまり私たちは、一つのところにとどまるのではなく前進すること（務めること、成長すること）を本質的に志向するのです。救われた人も、救われた状態にただ安住するのではなく「救いの完成に向かって……『十戒』を守って歩みます」（問83）と言われているのです。

今日の聖書箇所の前段落（3：1～11）でパウロは、地位でも名誉でもなく、「信仰に基づいて神から与えられる義（9節）」だけが誇りであると述べています。更に今日の聖書箇所では、自分が既に「キリスト・イエスに捕らえられている（12節）」と述べています。

そのパウロが、さらに「わたし自身は既に捕らえたとは思っていません（13節）」と言い、「賞を得るために、目標を目指してひたすら走る（14節）」と言っているのはなぜでしょう。パウロは何を得るために走ろうとしていると思いますか。

今、自分が「目標を目指してひたすら走っている」ことはありますか。

自分が生涯かけて「賞を得るために」努めることは何だと思いますか。

12月5日 マタイによる福音書1章1節～17節

【解説と黙想】

キリストの誕生の予告

テキスト解説

マタイ福音書の冒頭ではアブラハムからイエス・キリストに至る系図が記される。世俗の歴史において系図はその血筋の正統さ、高潔さを示そうと意図されることが多い。しかしマタイの系図はそれとは一線を画す。特に母親をあえて明記する箇所では異例さが際立つ。ユダ（3節）とダビデ（6節）の子は正当な結婚によらないもので、サルモンとボアズ（5節）はイスラエル人でない異邦人を妻として子を設けた。そうなると当時の一般的感覚ではキリストの血筋は「傷もの」とみられかねない。

その上でマタイはアブラハムを系図の起点とすることで、創世記12章3節および22章18節で神がアブラハムに与えた「地上の諸国民はすべて、あなたの子孫によって祝福に入る」との約束がイエス・キリストによって成就したとの歴史理解を示そうと意図したのである。そうした中で異邦人のラハブやルツが系図に含まれることは、キリストが地上の諸国民全体の救い主にふさわしいことを示すことになる。さらにマタイの系図に記されるキリストの祖先に罪のない人物はいない。ユダやダビデだけが罪深かったのではなく、系図の冒頭のアブラハムにして数々の罪を聖書に記録されている。そうした罪深き先祖たちや子孫たちをも神の祝福に入れるため、キリストは罪をあがなう救い主であることが求められたことをも示していくのである。

黙想

「将来こうしよう」と約束しそれを果たそうとすることは人間の生活において日常的になされることである。しかし人が約束を守り通すことは決して簡単ではない。新型コロナウイルスの脅威の前にいくつもの約束、予告が断念に追い込まれるのを私たちは経験した。さらには人間の寿命を超える、百年、千年もの長きに渡り約束を守りぬくこともできない。

この人間的現実からすれば、アブラハムに与えられ、以後何千年もかけてイエス・キリストの誕生として実現に至った救いの約束（創世記12：3、22：18。ガラテヤ3：16も参照）について、この約束は聖書に啓示された契約の神によってこそ果たされた、というほかない。

そもそもアブラハムと交わされた救いの約束は、その出だしから崩壊の危機にさらされた。アブラハムは創世記12章の時点で75歳であったが子がなかった。しかし神がアブラハムにイサクを授けてこの危機を突破された。

ただ何よりも、人の罪によって人間の側からこの約束を崩壊させる可能性はずっと存在し続けた。系図上の人物の中には、ユダの王たちの幾人かのように神も聖書もないがしるにし、神とアブラハムとの約束に思いを致すことすらほとんどない者もいたであろう。しかし神はそうした人間側の不従順をも超えて約束を守り通し、実現されたのであった。

(吉田 崇)

《参照聖句》 創世記12章3節、22章18節、ガラテヤの信徒への手紙3章16節

12月5日 マタイによる福音書1章1節～17節

【説教展開例】

キリストの誕生の予告

◇..... 単元のねらい◇

神がアブラハムに与えた「地上の諸民族はすべて、あなたの子孫によって祝福を得る」との約束を、神は何千年にもわたり守りぬかれ、イエス・キリストのご降誕によって成就された。それをアブラハムから始まるマタイの系図を足掛かりとして解き明かすことを狙う。系図に名を連ねる人々の側に約束成就の要因を見出すことができないことを示すところから、ただ神によってこそこの約束は成就したことを浮き彫りにしたい。

「救いの約束 イエスさま」

12月を迎えました。キリスト教会にとって12月はイエスさまのご降誕を特に覚えてお祝いするクリスマスの時です。そこで12月の礼拝ではイエスさまのご降誕にまつわるお話をしていこうと思います。

そのために先ほど新約聖書マタイによる福音書1章を朗読しました。聖書を開いたらカタカナばかり、朗読を聞いてもさっぱりわからない、と感じるかもしれません。でもこの箇所はイエスさまの誕生に神さまが深くかかわっておられることを伝えようとしているのです。

今読んだ箇所のカタカナは、実はどれも人の名前です。1節に「アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図」とありました。アブラハム、ダビデという名前は前にも聞いたことがあるんじゃないでしょうか。そして「系図」という言葉、これは「誰々さんは〇〇さんの子ども」という親子、子孫の関係を書き連ねたものです。「アブラハムはイサクをもうけ、イサクはヤコブを……」（2節）という具合に何十人にもわたる親子関係が続いて、その最後

にイエスさまが来ています。

この系図はアブラハムから始まります。アブラハムにも親がいたのですが、アブラハムより前の先祖は取り上げません。どうしてでしょうか。それは、アブラハムに神さまが特別な約束を与えてくださったからです。旧約聖書創世記に書いてあるのを先生が読みますので聞いてください。「地上の諸国民はすべて、あなたの子孫によって祝福を得る。あなたがわたしの声に聞き従ったからである。」（創世記22：18）地上の様々な国民が、アブラハムの子孫によって祝福をもらうようになりますよ、と神さまは約束なされたのです。

でもその約束はすぐには実現しませんでした。そもそもイエスさまがお生まれになるまで、聖書の神さまのことをイスラエル以外はほとんど知らされませんでした。だからイエスさまが来られるまでイスラエル以外の国民は神さまの祝福からほど遠いところに置かれていたのです。しかし、イエスさまが地上にお生まれになって、救いの業をなしてくださることで、世界中の人が神さまの祝福をいただけるようになったの

です。マタイによる福音書1章は、アブラハムに始まりイエスさまで締めくくられる系図を示すことで、こうしたことを私たちに伝えようとしたのです。

「アブラハムに与えられた神さまの約束がイエスさまによって実現した、ということにはわかった。でもそのためにこんなに長々と人の名前を書き連ねなくてもよかったですんじゃないの？」そう思う人もいるかもしれません。でもマタイ福音書は代々の人の名前も丁寧に書き記すことを通して、もう一つのことを伝えようとしたのです。それは、この約束が実現できたのは、人間の側がしっかりと行動したからではない、神さまの方が約束を守りぬいて実現に導いてくださったのだ、ということです。実は創世記12章をみると、アブラハムが神さまから約束を与えられた時点ではアブラハムには子どもがいませんでした。しかも年齢75歳の老人でした。人間的な常識ではもうアブラハムには子孫は無理だ、だから「アブラハムの子孫によって祝福」という約束は実現できないと思われました。けれども神さまはアブラハムの子としてイサクをお与えくださり、約束がだめにならないようにしてくださったのです。

また5節のサルモン、オベドは、イスラエル人の女性と結婚するチャンスに恵まれなかったようです。旧約時代には聖書の神さまのことはイスラエル人の中で伝えるようにしていたので、そのままではアブラハムの約束が途絶えてしまうところでした。しかし神さまはイスラエル人でない異邦人、ラハブとルツに信仰を与えた上、それぞれサルモンとオベドと結婚するよう導いて、約束が途絶えないようにしてくださっ

たのです。

しかし何よりもアブラハムとの約束を実現していく上で立ちふさがったのは、アブラハムとその子孫たちの罪でした。例えば2節にあるアブラハム、イサク、ヤコブについて、旧約聖書の創世記を読むと、この3人ともずっと神さまに従い、罪を犯さなかった人ではありませんでした。時に神さまの御心を疑ったり背いたりしてしまうこともありました。

6節のダビデ王は、ゴリアトの出来事などですばらしい信仰を示し、王さまとしてもイスラエルをよく治めたことが旧約聖書に記されています。しかし6節後半に「ダビデはウリヤの妻によってソロモンをもうけ」とあります。ダビデ王は十戒の第七戒に違反し、さらにはそれを隠そうとしてウリヤまで殺してしまう大変な罪も犯してしまいました。

7節から11節にはソロモンなどイスラエルやユダの王さまとなった人の名前も出てきます。しかし中には本当の神さまに背を向け偶像に頼ってしまう王さまも出ました。そのひどさは11節12節にあるとおりに神さまがイスラエルから追い出してバビロンに移住させるという罰をお与えになったほどです。そうになると、そもそも神さまがアブラハムに与えてくださった約束のことなど全然気にもかけなかった人もあったかもしれません。

しかし神さまは罪深いアブラハムの子孫たちに腹を立てたり、愛想をつかしたりして約束をとりやめることをなさいませんでした。世界中を祝福に入れる救い主が約束通りアブラハムの子孫から出るよう、神さまは何千年にもわたる長い間、生ける御手を伸ばして働いてくださり、イエス・キリ

ストの誕生という形でそれを実現してくださいました。

神さまが救いの約束を必ず守りぬいてくださることは、私たちにとっても本当にありがたいことです。イエスさまを救い主と信じる者には罪の赦しや永遠の命など、神

さまの祝福が約束されています。でも私たちは神さまの子どもとしていただきながらもなお神さまを悲しませる罪を犯してしまいます。それでも神さまは約束くださった祝福をとりやめることはなさらないのです。
(吉田 崇)

《今週の暗唱聖句》

地上の諸国民はすべて、あなたの子孫によって祝福を得る。あなたがわたしの声に聞き従ったからである。(創世記22章18節)

12月5日 マタイによる福音書 1章1～17節

【分級展開例A】

キリストの誕生の予告

a. 展開例

分級のクラスが小学校低学年が中心であれば、bのワークをプリントにして、答えを書き込んでもらいます（その際は子どもたちのできることに合わせてルビ振り or ひらがなに直すなどの配慮を）。未就学の子中心であれば、口頭でクイズにしてみたり、選択肢を2つに減らしたりしてもOK。もっと簡素にして○×クイズ形式にしてもいいかもしれません。

答えに迷っている子がいたら、ヒントを出して正解へ導いてあげてください。今ある知識を試す質問ではなく、「神さまのことを知った」という喜びを知ってもらうためのワークです。

b. ワーク

- ①もうすぐクリスマス！ 神さまはむかしむかしの人たちとどんなやくそくをなされたの？ これだとおもうところに○をつけてね。
- ④あしたの夕方、あなたの家にあそびに行くよ（ ）
- ⑤みんなのために、すくいぬしが生まれるよ！（ ）
- ②神さまのやくそくって、どんなもの？ これだとおもうところに○をつけてね。
- ⑥「めんどくさいからやめよう」とやくそくがとちゅうでなくなる（ ）
- ⑦どんなに昔のやくそくでもかならずまもられる（ ）
- ⑧神さまがやくそくを忘れちゃう（ ）
- ③せいしよをよんで、あいているところをうめてね。
- 「ヤコブは_____の夫_____をもうけた。この_____からメシアと呼ばれる_____がお生まれになった。」（マタイによる福音書1章16節）

c. 解説

- ①（正解は⑤）例：クリスマスはイエスさまのお誕生日だよ！ 神さまは、ず～っと昔から、救い主イエスさまがみんなのためにお生まれになるということをお約束してくださいました。
- ②（正解は⑤）例：神さまは途中で約束を放りだしたり、忘れてしまったりするお方じゃないよね。神さまは、絶対に約束を守られるお方です。
- ③例：さあ今日の聖書は、カタカナがいっぱい。これは人の名前。最初に出てくるアブラハムさん。このアブラハムさんのこどものこどもの……ときて、16節でついにイエスさまのお名前が出てきます！ 神さまはアブラハムさんに「地上の諸国民はすべて、あな

たの子孫によって祝福を得る。」(創世記22:18)と約束されました。この「子孫」がイエスさま！ 世界中のイエスさまを信じる人たちが、イエスさまによって祝福されます、神さまの子どもとされますよ！ というお約束だったの。アブラハムさんは、イエスさまの時代よりも1900年ぐらい前の人。昔からの約束を、神さまはしっかり果たしてくださいましたね。

12月5日 マタイによる福音書1章1～17節

【分級展開例B】

キリストの誕生の予告

今日の聖書の箇所、たくさん名前が出ていましたね。知ってる名前はありましたか？

それは、どんな人ですか？ その人がどんな人か、みんなに紹介してみましょう。

旧約聖書の中で、リストに名前がある人のエピソードを探してみましょう。

・特に神さまの「約束」、「恵み」に関わる箇所

創世記12：1～3、17：4～8（アブラハム）、

創世記22：16～18（アブラハム、イサク）、

創世記28：10～22（ヤコブ）、

ルツ記4：9～22（ボアズ）、

サムエル記下7：8～17（ダビデ）、

列王記上3：4～15（ソロモン）、

歴代誌上3：15～16と歴代誌下36：1～10を比較、

さらに列王記下25：27～30を見る（エコンヤ=ヨヤキン）

12月5日 マタイによる福音書1章1～17節

【分級展開例C】

キリストの誕生の予告

今週から、三週間は待降節、降誕祭として、子どもと親のカテキズムを離れた聖書箇所です。分級では、キリストが降誕された恵みを、カテキズムの側面からも理解し、掘り下げていきたいと思えます。

マタイによる福音書の冒頭は、アブラハム以来の系図を示しています。イエスさまについて伝える福音書に旧約聖書の人物の名前のリストが挙げられている意味を考えてみましょう。

「子どもと親のカテキズム」の間25を読んでみましょう。私たちの救いを神さまが「御心のままにあらかじめおさだめになりました」と言われています。どうして神さまは、私たちの救いを事前に準備できるのでしょうか。

一方で神さまは、人々が救いを求める声に耳を傾け応えてくださる方だと言われます(参照：出エジプト3：7～10、士師記6：7～8、サムエル上9：16)。「民の声に応える神さま」と「民が呼ぶ前に救いに定めてくださる神さま」は、どちらも神さまの救いの恵み深さを表現します。それぞれの表現にどんな恵みを表現していると思えますか。

12月12日 マタイによる福音書1章18節～25節

【解説と黙想】

キリストの誕生

・ヨセフの義しさ

キリストの誕生を思い返すとき、マリアの信仰と働きに目が行くと思います。その反面、ヨセフについて思い返されることは少ないのです。キリストの誕生に関して、ヨセフは何の働きもしていないように見えるからです。しかし、キリストが誕生されるために、ヨセフの存在は欠くことができません。

ヨセフは正しい人でした。「正しい」とは、律法を守ることによって義とされるという意味でしょう。しかし、マリアのことで、ヨセフは律法を墨守しようとはしていません。もしも律法に従うならば、マリアは姦淫の罪が疑われ、死罪となってしまう。そのためヨセフは苦悩して、密かに離縁を決心するのです。

彼は律法を四角四面に遵守しようとはしませんでした。ヨセフの「義しさ」とは、律法の字面よりもその精神に従うことです。殺すという選択ではなく、命を与える神に従うのです。律法をお与えになった神は、私たちのことを慈しんでくださる神だと信じたのです。

・思い悩むときに

ヨセフはマリアのことを心に掛けて、思い悩んでいました。マリアの命が取られることが、御心とは思えなかったからです。私たちもまた、世にあっては様々なことに悩まされます。人間の知恵や能力では、どうしようもない時があります。そのような時に、神の助けが差し伸べられるのです。

・神の介入

マリアの妊娠は、聖霊によるものです。しかし、この時のヨセフはそのことを知らされていなかったようです。そこへ天使がヨセフの夢の中に現れます。天使の言葉をヨセフは信仰を持って聴きます。ヨセフもまた、主にあつて神の言葉を受け止めたのです（ルカ1：38参照）。こうしてマリアはヨセフと無事に結婚し、キリストを出産しました。

ヨセフに信仰を与え、マリアを迎える決断をさせた神が褒め称えられますように。人はいつも、神の助けによって力を得ていくのです。

・キリストの謙卑

言うまでもなく、キリストの誕生は神の御業です。他方、神が人間の働きを尊く用いておられることに驚かされます。勿論、神の摂理の方が優位にありますが、神は人間の心を見下されません。思い悩むヨセフに寄り添いながら、彼の決断を祝福してください。

そしてキリストが人として誕生されたことが、すでに十字架へと至るこの方の謙卑を示しています。キリストは、誕生の時点ですでにご自身の命を、人の手に委ねておられると言えます。全能の神が幼な子として、人の親の養いを必要とすることを良しとされます。神が言わば、ヨセフとマリアという若い親たちに全幅の信頼を寄せてくださったのです。キリストは生まれながらにして、御自身を与え尽くされるお方なのです。（後登雅博）

《参照聖句》 フィリピの信徒への手紙2章6～8節

《教理問答》 子どもと親のカテキズム 問26・28、ウェストミンスター小教理問答問22・27、ハイデルベルク信仰問答問35・36

12月12日 マタイによる福音書1章18節～25節

【説教展開例】

キリストの誕生

◇..... 単元のねらい◇

イエス・キリストは神であるにも関わらず、まことの人としてお生まれになりました。これは、ご自身が低くなられたということです。キリストは、弱さ、愚かさを抱えている私たちを受け入れてくださったのです。キリストに愛されていることを感謝しつつ、キリストの誕生を心からお祝いいたしましょう。

「ご自身を与え尽くされるキリスト」

まことの人として生まれたキリスト

今年もイエスさまの誕生をお祝いするクリスマスが近づいて来ました。教会ではクリスマスの飾り付けや、様々なお祝いの準備が進んでいます。今年も、皆さんと一緒にイエスさまの誕生をお祝いしましょう。そのために、今日はイエスさまが誕生される直前のことが書いてある聖書を読みました。

さて、イエスさまのお母さんといえば誰でしょうか？ そうですね。マリアさんですね。では、イエスさまのお父さんといえば誰ですか？ はい、今日の箇所に出て来ましたね。ヨセフさんです。

人は誰でもお母さんから生まれてきます。でも、女の人がいるだけでは、赤ちゃんが産まれてくることはできません。男の人もないと、赤ちゃんが産まれることはできないのです。私たちは誰も、お父さんとお母さんの愛の中で生まれて来たのです。あなたは愛されて生まれてきました。

ところで、イエスさまは聖霊によってマリアのお腹の中に宿られました。聖霊によるという点が、私たちの誕生とは大きく違うところです。しかし、イエスさまはまこと

との神さまなのに、私たちと同じまことの人としてお生まれになりました。ですから、お母さんのマリアだけではなく、お父さんのヨセフもいてくれなくてはなりません。イエスさまもやはり、ヨセフとマリアの愛を受けてお生まれになり、二人の愛を受けて成長されるのです。

思い悩むヨセフ

ところが、イエスさまのお父さんとなるはずのヨセフは悩んでいました。子どもが産まれるのは、普通は喜ばしいことのはずなのに、どうしてでしょうか。実はこの時、ヨセフとマリアはまだ本当には結婚していませんでした。

二人は結婚の約束をしていました。イスラエルでは、結婚の約束をしている二人は夫婦とみなされます。しかし、結婚の約束をしている間は、まだ一緒には暮らしていません。ですから、夫婦とはいえ、まだ本当の家族のようにはなっていなかったのです。

まだ正式な家族となっていないのに、マリアが妊娠していることがわかりました。家族となる前に子どもができてしまう

ことは、イスラエルでは大変な罪でした。そして、ヨセフにはどうしてマリアが妊娠してしまったのか、分からなかったのです。こんな時、イスラエルの律法によれば、マリアは石打ちの刑になってしまいます。つまり、このままではマリアは死刑となってしまうのです。

「夫ヨセフは正しい人であった」(19節)と聖書に書いてあります。ヨセフは律法をちゃんと守る正しい人でした。しかし、律法を守ろうとすれば、マリアを死刑にしなければなりません。それで、ヨセフはとても悩んでいたのです。子どもが産まれることは、喜ばしいことです。でもそのために、マリアが殺されてしまうかもしれません。このままではどうしようもありません。ヨセフはどうしたのでしょうか？

ヨセフの義しさ

正しい人ヨセフは、律法の通りにマリアが殺され無いようにと考えました。そして、マリアとの結婚の約束を無かったことにしようとしています。なんとかして、マリアを助けようとしたのでした。

ヨセフの「義しさ」とは、頑固に律法を守ることはありませんでした。律法を与えてくださった神さまの御心を大切にすることです。すなわち、マリアが死んでしまうのではなく、どうしたらマリアが生きることができるかを考えたのでした。神さまは、人が死んでしまうことではなく、生きることを願っておられるに違いない、と考えたからでした。

神の助け

しかし、マリアとの結婚をやめることは、神さまの御心ではなかったのです。ヨセフ

はマリアを助けようと思っていました。でも、人間の力、人間の考えによっては、本当に人を救い出すことはできません。神さまからの助けがないと、私たちが生きることはできないのです。

考えてみてください。マリアとの結婚の約束を無かったことにできたとしても、お腹の中の赤ちゃんをいなかったことにはできません。このままでは、マリアは罪を犯した人として裁きを受けてしまうに違いありません。

マリアのことを思い、神さまの御心に従って律法を守ろうとしたヨセフには、神さまからの助けが差し伸べられました。主の天使がヨセフに現れました。天使は言います。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである」(20、21節)。

マリアのことで苦しんでいたヨセフですが、神さまから助けをいただいて、恐れなくマリアと結婚することにしました。

自分の力ではどうしようもない問題が起こることがあります。そんな時、神の御心は何だろうか、と私たちも考えてみましょう。よくよく考えて行動した結果、それが御心とは違うこともあるかもしれません。それでも、あなたが御心を求めたことを神さまはよく知っておられます。そして、私たちの思いや力を越えて、神さまが助けを与えて導いてくださいます。

低くなられたキリスト

ヨセフは悩みながらも、神の御心を求めました。そして、天使が現れて神の御心が

示された時、迷わず従いました。

こうして、ヨセフとマリアの子どもとして、イエスさまが誕生されました。キリストはまことの神です。その方が、私たちと同じまことの人となられたのでした。これはつまり、力ある神が、全く無力な人間のようになられたということです。私たちが罪から救うために、私たちのところにまで来てくださったのです。

赤ちゃんは、自分の力で自分を守ることができません。誰かがお世話をしてくれないと赤ちゃんは生きることができません。赤ちゃんとして生まれたキリストは、ご自身をすっかりヨセフとマリアにおまかせになりました。つまり、人間の手にご自身をお預けになったのです。

イエス・キリストは、人間の罪を遠くから見ていただけの方ではありません。罪に苦しんでいる人の苦しみを、ご自身が引き受けてくださいます。そのために、進んで低くなられます。

キリストは、まことの人となるという低い姿でこの世に来られました。そして、ついには十字架にかかるまでに低くなられました。キリストはご自身を与え尽くすまでに、私たちが愛してくださるのです。ご自身の愛を、ご自身の命を、私たちに与えるためにキリストは来られました。あなたは、イエス・キリストから命がけの愛を受けているのです。私たちが愛してくださるイエス・キリストの誕生をお祝いしましょう。

(後登雅博)

《今週の暗唱聖句》

マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。(マタイによる福音書1章21節)

12月12日 マタイによる福音書1章18～25節

【分級展開例A】

キリストの誕生

a. 展開例

分級のクラスが小学校低学年が中心であれば、bのワークをプリントにして、答えを書き込んでもらいます（その際は子どもたちのできることに合わせてルビ振り or ひらがなに直すなどの配慮を）。未就学の子中心であれば、口頭でクイズにしてみたり、選択肢を2つに減らしたりしてもOK。もっと簡素にして○×クイズ形式にしてもいいかもしれません。

答えに迷っている子がいたら、ヒントを出して正解へ導いてあげてください。今ある知識を試す質問ではなく、「神さまのことを知った」という喜びを知ってもらうためのワークです。

b. ワーク

① マリアさんとヨセフさんはどんなひと？ これだとおもうところに○をつけてね。

① 空をとぶ「てんし」（ ）

② イエスさまのおとうさんおかあさんだから「かみさま」（ ）

③ 神さまを信じる「にんげん」（ ）

② せいしよをよんで、あいているところをうめてね。

「マリアは_____を産む。その子を_____と名付けなさい。この子は自分の民を罪から_____からである。」（マタイによる福音書1章21節）

③ イエスさまは、なんのために生まれたの？ これだとおもうところに○をつけてね。

① 大工のヨセフさんといっしょに大きな家をたてるため（ ）

② わたしたちを罪からすくうため（ ）

③ せかいじゅうのおいしいものをたべるため（ ）

c. 解説

①（正解は③）例：聖書を見てみよう。「空を飛ぶよ」とは書いてないね。それから、神さまはたったおひとりだから②も違うよね。正解は③の、人間。ふたりは神さまを信じるひとでした（19節「正しい人」）。

②例：結婚する前にマリアさんのおなかに赤ちゃんがいることを知ったヨセフさんは、「マリアとおなかの子のために、お別れした方がいいんじゃないか」と悩みます。でもそんなヨセフさんの夢の中に、天使が出てきて言いました。「怖がらずにマリアと結婚しなさい！」。そして生まれてくる子がどんな子か天使が教えてくれたのが、ここ。

③（正解は②）天使も教えてくれました！ 生まれてくる子、イエスさまは、みんなを罪から救うためにお生まれになりました！ しかも、人間の夫婦の所に、人間として。本当は神さまなのに、私たちと同じ人間となってくださるほど、神さまは私たちのことを愛してくださった。イエスさまのお誕生は神さまの「みんなのこと大好きだよ！」のしるしでもあるんです。

12月12日 マタイによる福音書1章18～25節

【分級展開例B】

キリストの誕生

イエスさまの家族について調べてみましょう。

父ヨセフ マタイ13：55（職業）、マタイ2：14、2：21、ルカ2：41～52（少年イエス）

母マリア ヨハネ2：1～12、マタイ12：46～50、ヨハネ19：25～27、
使徒言行録1：14

兄弟姉妹 マタイ13：55、使徒言行録15：13、ガラテヤ2：9、ヤコブの手紙1：1

12月12日 マタイによる福音書1章18～25節

【分級展開例C】

キリストの誕生

キリストがおとめマリアから生まれたという信仰箇条は、キリストに関するいくつかの重要な教理と結びつきます。イザヤ書の実現として救いが神の永遠の計画であること、キリストが物質的な肉体を持つ真の人間であること、キリストの聖さや無罪性のしるし（根拠ではないことに注意）、キリストの降誕が聖霊の働き神の介入であること等、様々なことを表現します。キリストの二性一人格に関わることですので、その理解は難しく、古代において多くの議論を生みましたが、今日でも完全に意見が一致しているわけではありません。あまり厳密な議論に踏み込むのではなく、この出来事が指し示す救いの恵みの大きさを理解するよう努めましょう。

救い主イエスさまは、神であり同時に人間です（二性一人格、「子どもと親のカテキズム」問26参照）。イエスさまの誕生の仕方は、そのことを表現しています。以下の登場人物の関わり方が「イエスさまが神であり人である」ということとどう関連するか考えてみましょう。

- ・父ヨセフ（ヒント：ダビデの子）
- ・母マリア（ヒント：処女）
- ・聖霊なる神さま

12月19日 マタイによる福音書2章1節～12節

【解説と黙想】

博士たちの礼拝

・テキストの解説

ヘロデ王は紀元前37年から4年まで王位に就いていたとされている。ユダヤ人からあまりよく思われていなかった（自らの王位を守るために、王妃や兄弟、子どもまで殺害するという残忍な性格から）が、ローマの庇護のもと、長くユダヤを治めた。

東方の博士たちは普通3人とされているが、どこにも3人という数字は聖書にはない。複数形で表されていることから複数であったことは間違いないが、「3」である根拠はない。しかし、3人として扱っても不都合はない。

東の方から来たこれらの博士たちは、ベルシャやインド、バビロンやアラビアなどから来たのではないかと、との諸説がみられる。しかしどれも決定打までには至らない。彼らは占星術、天文学に通じていた者たち（そして賢者）とされている。すなわち、異国の民に救い主の告知は（神により）なされた。そしてこの事は、後に異邦人にも福音が広まって行くことを暗示している。

東方の博士たちの言葉を聞いて、心を乱したのはヘロデ王だけではなく、エルサレムの人々もまた同様であった。ヘロデ王は自らの王位が危ぶまれる不安から、エルサレムの人々は、「これからいったい何が起こるのだろうか」という（騒動への）不安から、それぞれなつたものと思われる。

「贈り物」一つ一つについても、色々な象徴的意味付けが歴史的にはされてきたが、決定的なものまでには至らない。しかしユダヤの新しい王の誕生に際し、最高のものを準備し献げることで応える博士たち姿勢には教えられるべきところがある。

・黙想

この箇所は、自らに与えられたタラントを、正しく用いて神を拝する者たち（博士たち）と、礼拝どころか新王誕生に不安を抱く者、更にはその王（御言葉なる神の子イエス）を殺そうともくろむ者（ヘロデ王とエルサレムの人々）とがコントラストとして描かれている。

博士たちは、ある星に導かれて（神の招きと導きによって）遠く東の国から『ユダヤ人の王』と呼ばれる方を拝みに来た。そしてミカ書の御言葉と、神の夢によるお告げ（「ヘロデのところに戻るな」）のみに従っている。博士たちが一貫して人の言葉でなく、神の教えのみを根拠に行動を起している点は見逃せない。

一方で、聖書の言葉に聞き従わず（預言者の言葉、救い主の誕生の言葉に耳をかすことなく）幼子イエス（＝御言葉）を殺そうとする王、そして新展開を前に不安に思うエルサレムの人々の不信仰をみる。

これら両面は、私たちの中に両方とも存在するのではないだろうか。御言葉に従い歩みたい思いと、御言葉通りに歩むことへの不安・恐れ、受け入れ難い（この世の常識を一方で思い計る）気持ち、そう言ったものが各々の中で渦巻くこそ私たち人間である。

クリスマスの出来事は、罪の色濃い世に現れた光の業である。神の憐れみと恵みの御業がそこに表されている。自らに在るふた心を認め、深く頭を垂れて幼子イエスを今年も迎えたく思う。（大木 信）

《参照聖句》 ミカ書5章1節、ヨハネ福音書7章42節

《教理問答》 子どもと親のカテキズム問34、35

12月19日 マタイによる福音書2章1節～12節

【説教展開例】

博士たちの礼拝

◇..... 単元のねらい◇

キリストの誕生が最初に示されたのは羊飼いたちであったが、遠い東の異国の地に在った博士たち（異邦人）にもこの救い主誕生の知らせが示された。この神の導きに素直に従い、礼拝する姿を通して、今年も救い主なるキリストを迎え入れると共に、いま一度自らの礼拝姿勢を整えられたい。

「喜びあふれて礼拝する博士たち」

序

今日はクリスマスです。私たちの主、イエスさまの誕生をお祝いする日です。イエスさまは世界中の人たちに知られ、多くの人々に礼拝され崇められています。しかし、その誕生は、ほんの少しの人たちにしか知らされていませんでした。ルカによる福音書ですと、羊飼いたちへ、神さまからイエスさま誕生のお知らせが伝えられたお話がありますけれども、マタイによる福音書ではそれとは全く別のお話が伝えられています。それが今日、お読みした箇所、三人の博士たちのお話です。

本論

この三人の博士たち、『占星術の学者たち』だったとあります。特に宇宙にある太陽や月や星、天体のことを詳しく調べて人の生活と結びつけ考える人たちでした。

ヘロデ王の時代に、その博士たちは不思議な星を発見しました。そしていろいろと調べた結果、これがユダヤ人の王さまの誕生を知らせる星だと分かったのです。神さまが、この星を博士たちに分かるように用意してくださったのでしょう。今日でも、星の動きや星座から世の中の動きや出来事を占う人たちがいますが、この博士たちは、

自らのライフワーク（神から与えられたタラントを活かして）を通して、王さま誕生の星（御業）を見出すことが出来ました。その様にして、遠い東の国からその星をたよりにユダヤの国までやって来たのでした。そしてユダヤの王さまの誕生であるならば、とエルサレムの宮殿にまではるばるやって来たのでした。

博士たちは当時の王さまのヘロデ王にお会いして、「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです（2節）」とエルサレムまで来た理由を王さまに伝えたのでした。

実はこれを聞いたとき、ヘロデ王の心の中は穏やかではありませんでした。それもそのはずで、自分以外に王さまが生まれたと聞かされたわけですから。わたしの命はその者によってこの後狙われるのではないか、殺されるのではないか、そんな風にも考えたのだと思います。すぐに祭司長や律法学者たちを集めて調査を命じます。しかし調査と言っても、街に出て調べるものではありません。イエスさまの誕生はまだ誰にも知らされていなかったからです。彼らは旧約聖書の御言葉に書いてあることを調べました。そして、王が生まれるとするな

ら、ダビデの町ベツレヘム以外にはないと王に伝えました。これを聞いたヘロデ王は、自分からは動きませんでした。聖書の御言葉を博士たちに伝えて、詳しいことが分かったら教えてくれ、と何食わぬ顔で言いました。

博士たちはエルサレムを出発しました。その旧約聖書の御言葉と、先立って進む星をたよりに、幼子のいる所までたどり着くことが出来ました。そしてついに、博士たちは救い主に出会うことが出来、宝物をお献げすることが出来ました。

結論

この博士たちは、10節を見ますと「喜びにあふれ」ています。神さまを、そして救い主イエスさまの誕生を礼拝する喜びにあふれています。そして喜びにあふれているだけではありません。一番良いものを宝としてもってきて「ひれ伏して……拝み（11節）」ながら献げています。私たちは、毎週の礼拝の中で、この博士たちのように喜びにあふれて神さまに礼拝をお献げしているでしょうか。

この聖書のお話を通して「礼拝する」とは、喜びにあふれてするもの、私たちの内側からあふれ出るものをお献げするもの、と教えられます。イエスさまによって、今のわたしは存在している。イエスさまがわたしを愛して、命を与えてくださるからこそ、今のわたしは在る。このあふれ出る喜び・思いを礼拝でお献げするのです。そしてその喜びにあふれた思いで神を賛美する、感謝と献身とを現す（自らに与えられた賜物を用いて主の栄光を現す）のです。

その様にして生きている人は、主日だけではありません。週の旅路の中でもイエス

さまに感謝して生きていきます。この博士たちは、占星術を通して幼子イエスに出会うことが出来ました。皆さんの場合ですと、一週間のなかでどんな時にイエスさまに出会うのでしょうか。学校生活を御言葉に従って生活する時でしょうか、友だちとの関係を主に感謝して行う時でしょうか。日々の何気ない生活の中で、神さまを思って生活するそのただ中で、占星術の博士たちが星を見つけたように、皆さんも神さまを見ることが出来ると思います。その様に、生活のただ中で神を見たならば、やっぱり『喜びにあふれる』のだと思うのです。そしてその喜びを携えて、また主日に教会に帰って来て神さまを喜びのなかで賛美する事になるのだと思います。

この博士たちは、神さまが教えてくださった星をたよりにしました。そして、聖書の言葉に従って歩んだ時に、幼子であるイエスさまにお会いできました。更に、「ヘロデのところへ帰るな」との夢でのお告げに従って、行動を決めて行きました。逆にヘロデ王の、「見つかったらわたしに知らせてくれ」という人の言葉には従わなかったのです。

私たちもこの博士たちのように、御言葉にのみ従って歩むべき道を選びたいと思います。御言葉に示された神さまの御心にこそ従いたいと思います。神さまの言葉だけが私たちを活かします。私たちの行動の基準はいつも御言葉にこそあります。その様にして生活していくときに、喜びにあふれたなかで、幼子であるイエスさまにも出会うことが出来る。幼子であるイエスさまを今年も確かな心で迎え入れることが出来ると思います。（大木 信）

《今週の暗唱聖句》

家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。（マタイによる福音書2章11節）

12月19日 マタイによる福音書2章1～12節

【分級展開例A】

博士たちの礼拝

a. 展開例

分級のクラスが小学校低学年が中心であれば、bのワークをプリントにして、答えを書き込んでもらいます（その際は子どもたちのできることに合わせてルビ振り or ひらがなに直すなどの配慮を）。未就学の子中心であれば、口頭でクイズにしてみたり、選択肢を2つに減らしたりしてもOK。もっと簡素にして○×クイズ形式にしてもいいかもしれません。

答えに迷っている子がいたら、ヒントを出して正解へ導いてあげてください。今ある知識を試す質問ではなく、「神さまのことを知った」という喜びを知ってもらうためのワークです。

b. ワーク

①すくいぬしイエスさまがお生まれになったのはどこ？ これだとおもうところに○をつけてね。

①北海道（ ） ②ベツレヘム（ ） ③イタリアのローマ（ ）

②はかせたちは、なぜイエスさまに会いにきたの？これだとおもうところに○をつけてね。

①赤ちゃんが好きだから（ ）

②星を見たから（ ）

③なんとなくノリで（ ）

③せいしょをよんで、あいているところをうめてね。

「彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た_____が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。学者たちはその星を見て_____にあふれた。」

（マタイによる福音書2章9～10節）

c. 解説

①（正解は②）例：今日のみことばの中で、救い主がお生まれになるのは「ユダヤのベツレヘムです」って書いてあるね。これは、昔々に神さまがお約束なさったことです！

②（正解は②）2節に、「わたしたちは東方でその方の星を見たので」と書いてあるので正解はこれも②！

③例：さあ、この星の正体は何だろう？ この星は、博士たちの前に現われて、「こっちだよ～」と道を教えてくれる星。この星の正体は、神さまの導きの星！ 博士たちがイエスさまに会いに行けるように、神さまが「こっちだよ～」と光らせた星。博士たちは神さまに従って、イエスさまに会いました！ そして何をしたかという、イエスさまを礼拝しました。神さまに素直に従って、礼拝をすること。神さまは、いまの私たちにもそれを求めています！

12月19日 マタイによる福音書2章1～12節

【分級展開例B】

博士たちの礼拝

イエスさまが生まれたことを知ってやってきたのはどんな人ですか？

ユダヤでは、占いは良くないことです。この学者たちは違う国の人ですね。

ヘロデ王やエルサレムの人たちは、なぜ「ユダヤ人の王としてお生まれになった方」について知らされて「不安を抱いた」のでしょうか？

ヘロデ王やユダヤの人たちは、どうすればよかったですか？

あなたが、王さまだったら、「新しい王さまとして生まれた方がいる」と知ったらどうしますか？

12月19日 マタイによる福音書2章1～12節

【分級展開例 C】

博士たちの礼拝

降誕物語に現れる博士たちは、東方の三博士などと呼ばれます。彼らが三人であったという記述はありませんが、おそらく贈り物の数から三人にされたと考えられます。

キリスト教の歴史の中で、個々の博士に下記のような属性が与えられます。本来「東方の」とされている博士たちが様々な人種に割り当てられるのは全世界の人々が主の降誕を祝うことを表したものと思われまます。

メルキオール Melchior (黄金=王権の象徴、青年、黄色人)

バルタザール Balthasar (乳香=神性の象徴、壮年、黒人)

カスパール Casper (没薬=将来の受難である死の象徴、老人、白人)

博士たちの来訪は2章16節から降誕の二年後とされたり、降誕から十三日目の公現日(1月6日)とされたりします。

ポイントは、異邦人である博士たちが主の降誕を祝い、本来祝うはずのエルサレムの民が「不安を抱いた」とされる点です。

メシアの誕生の知らせに対して、異教徒であるはずの「占星術の学者たち」と真の神さまを知っているはずの「エルサレムの人々」の態度の違いはどこから来ると思いますか。

占星術の学者たちの贈り物について、どんなものか調べてみましょう。

黄金：列王記上10：21、詩編72：15、

乳香：レビ記2：2、5：11、

没薬：ヨハネ福音書19：29

「子どもと親のカテキズム」問30から33にイエスさまの救いの働きが整理されています。博士たちの贈り物と比べて、イエスさまの働きについて考えてみましょう。

12月26日 マタイ6章7～15節 (カテキズム問84)

【解説と黙想】

祈りの手本、主の祈り

マタイによる福音書6章9～13節に記されている祈りを特に「主の祈り」と言うが、これは主イエスが、異邦人の祈りを悪い例として引き合いに出しながら、弟子たちに教えてくださった祈りである。当時、異邦人は、「くどくど述べて」、「言葉数が多ければ、聞き入れられる」と思っていた(7節)。主の祈りとは、神の御前に全てを放棄し、私たちの父であり、王である神の主権を認め、無から始めようとする貧しい心から、こうべを垂れた悔い改めの祈りとして告白される。

主の祈りの全体の構造は、最初に呼びかけがあり、その次に神に対する祈りが三回続く。「あなたの御名が……」「あなたの御国が……」「あなたの御心が……」。続いて私たちの祈りが三回続く。「わたしたちに必要な糧を……」「わたしたちの負い目を……」「わたしたちを誘惑に……」。ここから教えられるのは、第一に祈るべき事柄は、自分たちのことではないということである。何よりも先に、また、祈りの半分を費やしながらか、神のために祈るのである。第二に「わたし」ではなく「わたしたち」という複数形が使用されている点から、主の祈りとは共同体の祈りと言える。それは主イエスによって贖われた民の祈りであり、神を「われらの父」と呼ぶことができる特権をいただいた教会の祈りである。

9節の「御名」とは神ご自身のことである。「崇められますように」とは、他のものと厳格に聖別されるように、区別されるように、という意味で、聖書協会共同訳で

は「御名が聖とされますように」と翻訳されている。ところで私たち罪人が神ご自身を聖別することなどできない。私たちの罪は常に神の名に泥を塗り汚すからである。9節の「崇められますように」と、10節の「行われますように」は受動態になっている。つまり神の名を聖別することも、御心を行うことも神によってなされるということである。父なる神は、実に、私たちが願う前から既に必要なものを全てご存じで、ご自身の名を聖別し、ご自身の御心を完全に行うことができる。それにも拘わらず、ご自身の民をご自身の経綸の御業に共に参与させようとされる(フィリピ2:13参考)。11節の「糧」とはパンである。このパンが何を意味するのか諸説あるが、素直に今日一日の食事として理解したい。私たちは日ごとの糧を祈りつつ、日ごとに神に信頼し、日ごとに神からの恵みを受け取って生活して行くように招かれている。12節で、罪の赦しの祈りが出てくるのは、キリスト者が信じて救われた後も、依然として罪人であるという現状を言い表している。イスラエルでは罪責は、神に対する負い目・借金として理解されていた。日々罪を告白し、赦しを乞わなければならない。13節の誘惑という言葉は、試練という言葉である。肯定的な文脈では試練と翻訳され、否定的な文脈では誘惑と翻訳される。主イエスもゲツセマネの園で苦しみ悶えながら「できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください」と祈られた(マタイ26:39)。

(川栄智章)

《参照聖句》 フィリピ2章13節

《教理問答》 子どもと親のカテキズム問87、ウェストミンスター小教理問答問99、ハイデルベルク信仰問答問118

12月26日 マタイ6章7～15節

【説教展開例】

祈りの手本、主の祈り

◇..... 単元のねらい◇

祈りとは、神さまとの会話であり、神さまとの交わりであって、原則として祈りに形式はないが、「主の祈り」は祈りの手本として、私たちに祈りを教えてくれる。この「主の祈り」は当時イスラエルの人々が捧げていた祈りと比べると、大変短く簡潔なものであった。しかし、その祈りは、私たちが信仰に入った時の初心を思い起こさせる祈りである。「主の祈り」を学ぶことによって、再度私たちの信じている神さまが、私たちの主権者であり、憐み深い父なる神さまであることを確認したい。

「私たちの主権者であり憐み深い父なる神さま」

異邦人の祈りとは異なる主の祈り

教会では、神さまにお祈りをささげますね。イエスさまは、お弟子さんたちにお祈りの仕方を教えてくださいました。これを「主の祈り」と言います。祈りのお手本のようなものです。最初に悪いお祈りの仕方について考えてみましょう。悪いお祈りの仕方というのは、一言で言えば、自分が主人で神さまを自分の召使のように利用しようとする祈りです。自分の願いを何度も何度も唱えて、言葉数が多ければ、聞き入れられると考えることです。私たちの神さまは私たちの召使ではありませんね。私たちはそんなに偉くはありません。私たちの神さまは、天地の王であり、同時に憐み深い父でもあられます。そして、神さまは、私たちが願う前からすでに必要なものを全てご存知なんです。ですから、主の祈りとは、この神さまに自分が持っていた主権を全て明け渡し、神さまの御前に全てを放棄するお祈りなんです。自分は無価値な者で、自分には何も神さまの御前にお捧げできるようなものはありませんという気持ちでお祈りします。ゼロから始めようとする貧しい心から、神の主権にお委ねしてみようと

する悔い改めのお祈りなんです。

神さまのためにとりなす祈り

最初に「天におられるわたしたちの父よ」と呼びかけましょう。父なる神さまは、何故かわかりませんが、罪びとである私たちを神さまの家族として、王さまの家族として受け入れてくださいました。なんとという恵みでしょうか。次に、具体的な祈りに入りますよ。まず最初に、神さまの為に三回、お祈りを捧げます。「御名が崇められますように」、「御国が来ますように」、「御心が天におけるように地にも行われますように」。

ところで、私たち罪びとが神の御名を崇められるように、神さまの御名を高く聖別することはできませんね。また、神さまの御心を完全に悟って、それを行うこともできません。むしろ私たちはいつも罪を犯し、神さまの御名に泥を塗ってばかりいるのが現実ではないでしょうか。実は、神の御名を崇めるようにすることも、神の御心を行うことも、神さまがなされることなんです。つまり、神さまは全能なお方であって、私たちが願う前から既に必要なものを全てご

存じであり、ご自身の名を聖別し、ご自身の御心を完全に行うことができるお方なのです。こんなことを言うと、「それなら、どうせ、神さまがすべての事をされるのだから、祈らなくてもいいじゃないか。一体、私たちに何を祈れと言うのか。何もかも神さまお一人でされればいいでしょうに。」と思う人もいるかもしれません。それにも拘わらず、神さまは私たちの祈りを待ち望んでおられますよ。その理由は一体、何でしょうか？

もし、みんなが旅行をしていて、とっても美しい景色を見たときとしますよ。例えば海に沈む夕日を見た時のことを想像してみてください。その時、この美しい景色は誰にも教えないように隠しておこうなどと思いませんね。むしろ、「自分の最も愛する人と一緒に、このとっても美しい景色を見ることができたらどんなに良かったか！」と思うのではないのでしょうか。または、今までに一度も食べたことのない、とっても美味しいスイーツを食べたとします。その時には、「あ～、こんなにおいしいのを一人で食べるのはもったいない！」と思うのではないのでしょうか。神さまもみなさんと同じですよ。神さまのご計画された御業がとっても美しいために、私たちが神さまのご計画された御業に、一緒に神さまと手をつないで参加させて、その御業と一緒に体験させたいと、願われるのです。それほどまでに神さまは私たちを愛しているということです。信じられるのでしょうか？ ですから、主の祈りで、最初に神さまのために祈るのは、祈りを通して神さまが私たちに思いを与えてくださり、神さまが願うことを共に願うようにさせていただくためなのです。

私たちのための祈り

神さまの為に祈った後に、次に、私たちのことをお祈りします。まず、必要な糧を今日、与えてくださいとお祈りしましょう。神さまは空の鳥さえ、その日、食べる分を責任もって備えていてくださいます。ましてや、神の子どもである私たちにも、神さまはその日その日に充分な糧を与えてくださいます。私たちは日ごとに神さまに信頼し、神さまからの恵みを受け取って生活していくのです。次に、負い目の赦しのお祈りです。私たちはイエスさまを信じて神の子とされていますが、相変わらず日々罪を犯してしまう弱い存在なんですね。ですから日々悔い改めて、罪の赦しを神さまに乞わなければなりません。それに、そもそも私たちはイエスさまに罪赦された共同体ですから、赦しの共同体が自然に形成されていくべきですね。神さまが私たちを赦してくださいましたように、私たちが私たちに罪を犯した人たちを赦してあげましょう。最後に、試練や誘惑に遭わないようにお祈りしましょう。私たちは、自分が考えているより、はるかに弱い者であるかもしれないからです。

神さまの主権は、私たちの愚かさの中でご自身の知恵を現わしてくださり、私たちの弱さの中でご自身の力を現わしてくださり、私たちの罪の中でご自身の正義と恵みを光り輝くように、現わしてくださいます。私たちは「主の祈り」を祈るたびに、この神さまに信頼を寄せて、悔い改めをもって、弱さを告白し、この神さまの御前に全てを放棄し、自分が持っていた主権を明け渡し、この方に委ねることができるのです。

(川栄智章)

《今週の暗唱聖句》

あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。

(マタイによる福音書6章8節)

12月26日 マタイによる福音書6章7～15節

【分級展開例A】

祈りの手本、主の祈り

a. 展開例

分級のクラスが小学校低学年が中心であれば、bのワークをプリントにして、答えを書き込んでもらいます（その際は子どもたちのできることに合わせてルビ振り or ひらがなに直すなどの配慮を）。未就学の子中心であれば、口頭でクイズにしてみたり、選択肢を2つに減らしたりしてもOK。もっと簡素にして○×クイズ形式にしてもいいかもしれません。

答えに迷っている子がいたら、ヒントを出して正解へ導いてあげてください。今ある知識を試す質問ではなく、「神さまのことを知った」という喜びを知ってもらうためのワークです。

b. ワーク

①せいしよをよんで、あいているところをうめてね。

「あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに_____をご存じなのだ。」
(マタイによる福音書6章8節)

②イエスさまは、どんなふうにお祈りしなさいって言ったのかな？

- ① みんなの前でりっぱなことばでおいのりしなさい ()
 ② あなたのきもちを知っている神さまを信じておいのりしなさい ()
 ③ 神さま何も聞いてくれないからお祈りしなくていいよ ()

③なにをおねがいたらいいのか、イエスさまが教えてくれたおいのりはどれ？

- ①使徒信条 () ②十戒 () ③主の祈り ()

c. 解説

①例：みんなの前でお祈りする時、上手にできるかな？ 大丈夫かな？ と心配になっちゃうことがあるけど、聖書は「大丈夫！」と言ってくれています。わたしたちがお願いする前から、神さまはみんなに必要なものを知っておられます。だから、安心して神さまにお祈りしていいんだよ、ってイエスさまはおっしゃっているんだね。

②（正解は②）例：1問目にもありました、神さまはみんなのお願い、みんなの気持ちを全部知っておられます！ だから、そんな神さまに心からぶつかって、信じてお祈りしてください。

③（正解は③）例：それでも、おいのりってどうやるの？ というときのために、イエスさまは私たちにお祈りのお手本を教えてくださいました。それが、マタイによる福音書6章9～13節にあるお祈りです。いつもの礼拝の中でもみんなでお祈りしてるね。イエスさまが教えてくださったお祈りだから、「主の祈り」。神さまとお話する時はどうするんだっけ？ と迷ったら、この主の祈りを思い出してみてください。

12月26日 マタイによる福音書6章7～15節

【分級展開例B】

祈りの手本、主の祈り

今日は、お祈りについて、調べてみましょう。聖書の中のお祈りがどんなお祈りか、みんなで確かめてみましょう。(限られた時間で、全部調べるのは無理です。一つ二つ選びましょう。家に帰ってから調べても良いです)

食事の時の祈り	マタイ14：19、15：36、26：26、使徒言行録27：35
祝福の祈り	マタイ19：13～15
苦しい時の祈り	マタイ26：39、使徒言行録16：25
高慢な祈りとへりくだった祈り	ルカ18：9～14
勇気を求める祈り	使徒言行録4：23～31
教会の働きを勤める時の祈り	使徒言行録6：6、13：3
生命を回復する祈り	使徒言行録9：40、28：8
仲間の助けを願う祈り	使徒言行録12：12
お別れする時の祈り	使徒言行録20：36、21：5
救いを願う祈り	使徒言行録26：29

どんなふうに祈るべきか教えられている箇所も見てみましょう。

迫害する者のため	ローマ12：14
熱心に	コロサイ4：2
絶えず	テサロニケー5：17
王様や高官のために	テモテ1：2
互いのために	ヤコブ5：16
聖霊の導きの下	ユダ20節

12月26日 マタイによる福音書6章7～15節

【分級展開例C】

祈りの手本、主の祈り。 祈りとは何か

三週空いて、「子どもと親のカテキズム」に戻りました。今週から祈りについて学びます。全体の流れを確認してみましょう。

子どもと親のカテキズムの中で、祈りについて触れているのは以下の箇所です。それぞれどんな箇所か、祈りはどんな役割を与えられているか、確かめてみましょう。

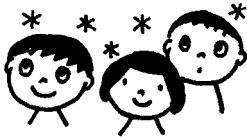
問5（全体での位置づけ）、問31（預言者職）、問32（祭司職）、
問38（主が祈ってくださる）、問42（教会生活の要素）、問46（礼拝の要素）、
問48（恵みを与える方法）、問55（説明）、問56（神さまが求めていること）、
問57（神さまの求めを聖書で知ること）、問83（律法の第三用法との関係）

祈る時にどんなふうに祈るのが良いと思いますか。また日々祈ろうとする時、どんなことを難しいと感じるでしょう。

みんなで実際に祈ってみましょう。

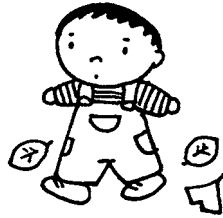
10月3日

そして、彼らに言われた。「人の子は安息日の主である」
【ルカ6:5】



10月10日

あなたがたは神に愛されている子供ですから、神に倣う者となりなさい。
【エフェソ5:1】



10月17日

兄弟に腹を立てる者はだれでも審きを受ける。兄弟に「ばか」と言う者は、最高法院に引き渡され、「愚か者」と言う者は、火の地獄に投げ込まれる。
【マタイ5:22】



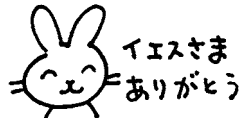
10月24日

主なる神は言われた。「人が独りであるのは良くない。彼に合う助ける者をつくらう。」
【創世記2:18】



10月31日

しかし、ザアカイは立ち上がって、主に言った。「主よ、わたしは財産の半分を貸しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します」
【ルカ19:8】



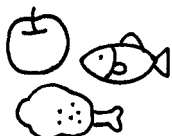
11月7日

だから、偽りを捨て、それぞれ隣人に対して真実を語りなさい。わたしたちは、互いに体の一部なのです。
【エフェソ4:25】



11月14日

食べる物と着る物があれば、わたしたちはそれで満足すべきです。
【テモテ6:8】



11月21日

わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。このように、わたし自身は心では神の律法に仕えています。肉では罪の法則に仕えているのです。
【ローマ7:25】



11月28日

わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。自分分がキリスト・イエスに捕らえられているからです。
【フィリピ3:12】



12月5日

地上の諸国民はすべて、あなたの子孫によって祝福を得る。あなたがわたしの声に聞き従ったからである。

【創世記22:18】

神さまありがとう



12月12日

マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。【マタイ1:21】



12月19日

家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼はひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。

【マタイ2:11】



12月26日

あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。

【マタイ6:8】



うれしい
時も



神さま
ありが
と



くるしい
時も

お祈りしよう



いつも
喜んでいなさい

絶えず祈りなさい



どんなことにも
感謝しなさい

2022年1～3月カリキュラム (第84号)

—『子どもと親のカテキズム』に基づく2年サイクル 第2年—

月 日 教会暦・行事		子どもと親のカテキズム	参照教理問答
	主 題	聖書箇所	暗唱聖句
	単元の目標		
1月2日	神の子らしい祈り	問85	ハイデ116、ウ小98
		サムエル記上3:1-18	フィリピ4:6
祈りによって神さまとお話し、神さまと心を合わせて一年を過ごそう			
1月9日	祈りに生きる道・ 神との会話	問86	ウ小98、ハイデ116,117
		ルカ11:1-13	ルカ11:13
父に対する信頼をもってすべてをゆだねて祈る			
1月16日	祈りに生きる道・ 主の御名による祈り	問87	ウ小98, 99、ハイデ117
		ルカ17:11-19	ヤコブ5:16
イエスキリストの十字架によって私たちに救ってくださる本当の神さまに祈る			
1月23日	祈りに生きる道・ 祈りの内容	問88	ウ小98、ハイデ118
		使徒16:16-34	使徒16:25
神さまを信頼して祈ることで神さまと結ばれる			
1月30日	主の祈り・ わたしたちの父よ	問89	ウ小100、ウ大189、ハイデ120
		マタイ6:5-9	マタイ7:11
神の子として天の父に祈る			
2月6日	主の祈り・ 御名を崇める祈り	問90	ウ小101、ハイデ122
		詩編33:1-22	詩編33:8
神さまの御名をたたえることで、私たちが幸いを得る			
2月13日	主の祈り・ 御国を求める祈り	問91	ウ小102、ハイデ123
		マタイ12:22-32	マタイ12:28
世界に神さまの支配がおよぶように祈る			
2月20日	主の祈り・ 御心を求める祈り	問92	ウ小103、ハイデ124
		ローマ12:1-2	ローマ12:2
私たちが愛してくださる神さまのみ心にゆだねる			
2月27日	主の祈り・ ゆだねる祈り	問93	ウ小104、ハイデ125
		ヨハネ6:22-40	ヨハネ6:35
すべてを与えてくださる神さまを信頼してゆだねて祈る			
3月6日 レント	主の祈り・ 赦され、赦す祈り	問94	ウ小105、ウ大194、ハイデ126
		マタイ18:21-35	マタイ6:12
赦されている恵みを覚えて、人を赦せるように祈る			
3月13日 レント	主の祈り・ 神の子の勝利の祈り	問95	ウ小26, 36, 106
		マタイ26:36-46	マタイ26:41
イエスキリストが天にいて私たちがいつも守ってくださるように			
3月20日 レント	主の祈り・ 確信の祈り	問96	ウ小107、ハイデ128
		歴代誌上29:10-20	テモテ二4:18
私たちのすべてを支えてくださる主をたたえる			
3月27日 レント	主の祈り・ 神の真実による祈り	問97	ウ小107、ハイデ129
		黙示録3:14-22	黙示録22:20
真実である方にすべてをゆだねる			

大会教育委員会

「教会学校教案誌」

継続発行のための

50万円 自由募金のお願い

弊誌のためにお祈りとご購読をもってお支え下さいます事を、心から感謝するとともに御礼を申し上げます。

大会教育委員会の重要な使命と任務は、日本キリスト改革派教会独自の教案を作成することです。そのために委員会は、なにより「内容」を磨くことに全力を注いでおります。しかしそのためには、教案誌の「安定的発行」が不可欠です。

かつて執筆者には1000円の図書券を贈呈し、最低限の礼を尽くしてまいりました。現在は、何の御礼もさしあげていません。ひとえに誌代を維持したいからです。ギリギリの厳しい状況がつづいています。自由募金に積極的にご参加ください。

教会だけではなく、個人としてのご協力をも伏してお願い致します。

Soli Deo Gloria!

※ 購読申し込みは、西堀 元（熊本伝道所：✉ boribori89@gmail.com）

〒862-0924 熊本県熊本市中央区帯山2-13-74 ㊚フックス (096)382-7630

お問い合わせは、相馬伸郎 (iwanoue@me.ccnw.ne.jp) まで。

目標金額 50万円

送金先 郵便振替 00190 - 4 - 451670

日本キリスト改革派教会大会教育委員会

大会教育委員会 出版物ご案内



神さまと共に歩む道

「子どもと親のカテキズム」解説

牧田吉和・監修

聖書の信仰を「神さまと共に道を歩む」という動的な概念で位置付けたユニークな信仰問答として親しまれている「子どもと親のカテキズム」。そのカテキズムを信仰的対話の土台として用いるための最良の手引き。(帯より)

定価：2,000円

(改革派内の方は消費税分・送料無料)

既刊書籍



子どもと親のカテキズム

— 神さまと共に歩む道 —

定価：500円



信徒の手引き

定価：2,200円

(改革派内価格：2,000円)

申し込み先：rcjkyoiku@gmail.com

〈あとがき〉

●いよいよ紙媒体の教会学校教案誌も終わりが見えてまいりました。最後まで気を抜かず、お届けしたいと思います。来春より、既刊コンテンツすべてを公開し自由に利用していただけるようにと願っています。教会教育に携わる者は、できる限りの準備をもって立つべきです。そもそも、教会学校教案誌の刊行は、子どもたちに福音を届けるための労力を軽減させるためではありませんでした。これまでのように、あるいはこれまで以上に皆様の備えと献身的奉仕が求められるかと思えます。そこには、ポジティブな意義があると言えるかもしれません。(相馬伸郎)

●夏も、刑務所での教誨活動はいつも通りです。グループ教誨と言っても、コロナ禍で収容受刑者が半分になり、聖書の学びには受刑者2名、刑務官1名、と私だけです。前日、教誨師を三年勤めたので、刑務所内の所長室で小さな表彰式がありました。表彰式など必要ないと思いながら、断ることも出来ず……。三年経っても任務そのものは、今も試行錯誤の連続です。(小川 洋)

●オリンピック報道でニュースが埋め尽くされています。

出場しているアスリートに責めは多くないと思いますが、ナチス政権時代の3S政策を思い起こします。

今日ではそれにSNSが加わって4Sでしょうか。世界を席卷するコロナ被害にも不明な点が多くあり、背後にうごめく獣の支配に注意が必要と思わされます。

(牧野信成)

●牧師館玄関脇の砂利の間から、朝顔の芽が顔を出しました。昨年か一昨年に鉢から落ちた種が芽生えたものです。支柱を立て

てあげたところ、ちょうど数日雨が降ったので、毎朝花が咲いてくれるまでになりました。石地に落ちた種は、焼けて根がないため枯れてしまうのが、聖書の教えるところかと思っておりましたが、神さまは、石地でも蒔いてもいない種を芽生えさせ、花を咲かせてくださる方でした。神さまは、ご自分で教えてくださる以上に私たちに恵みを与えてくださることを知った夏でした。

種まきが疎かな石地にある私たちの教会にも神さまが花を咲かせてくださるに違いないと励まされました。(長田詠喜)

※バックナンバーを御希望の方は下記までご連絡ください。

長野佐久伝道所 牧野信成

〒385-0051

長野県佐久市中込3-9-1

Tel & Fax : 0267-62-2409

E-mail : rcjnaganosaku@gmail.com

執筆者一覧

まえがき

木下裕也（岐阜加納教会牧師）

巻頭説教

漆崎英之（金沢伝道所宣教教師）

自閉症の息子を与えられて

坂尾連太郎（南与力町教会牧師）

執事職について（3）

吉田 実（但馬みくに伝道所宣教教師）

これからの教会学校

教会によるキリスト信仰教育を考える

小川 洋（高松教会牧師）

献身のすすめ 私の使いみち

芦田高之（新浦安教会牧師）

信仰告白のあかし

自分を打ち砕かれて、自分を知る

市川義則（東京教会）

教会学校訪問 勝田台教会日曜学校

岩田三枝子（勝田台教会）

イラスト作画

表紙 中村未生（春日井教会・IBUKI）

高橋乃亜（湘南恩寵教会・IBUKI）

聖句カード

岡野美佳（青葉台キリスト教会）

聖書黙想・説教展開例

大木 信（西鎌倉教会牧師）

大宮季三（芸陽教会牧師）

小澤寿輔（高知教会牧師）

柏木貴志（岡山教会牧師）

川栄智章（せんげん台教会牧師）

國安 光（園田教会牧師）

高内信嗣（山田教会牧師）

後登雅博（高蔵寺教会牧師）

小橋口貴人（那加教会牧師）

相馬伸郎（名古屋岩の上教会牧師）

袴田清子（灘教会）

宮武輝彦（男山教会牧師）

吉田 崇（吉原富士見伝道所宣教教師）

分級展開例

伊藤穂波（四日市教会）

木下奈緒子（岐阜加納教会）

草野容子（恵那教会）

小堀尚美（花小金井教会）

長田詠喜（新所沢教会牧師）

牧野信成（長野佐久伝道所宣教教師）

編集部

相馬伸郎（長）

名古屋岩の上教会牧師

牧野信成

長野佐久伝道所宣教教師

長田詠喜

新所沢教会牧師

西堀 元

熊本伝道所宣教教師

小川 洋

高松教会牧師

日本キリスト改革派 大会教育委員会『教会学校教案誌』 第83号

2021年10・11・12月号（季刊）

2021年9月1日発行

発行

日本キリスト改革派教会 大会教育委員会

発行所

日本キリスト改革派教会 大会教育委員会

名古屋岩の上教会 牧師 相馬伸郎

〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012

Tel/Fax 052-895-6701

郵便振替口座

00190-4-451670「日本キリスト改革派教会大会教育委員会」

編集・印刷 株式会社あるむ

頒価 900円（本体価格）

Reformed Church in Japan
Board of Education

